

レジリエントな 地域社会

自然に寄り添う暮らしと地域社会のために

深町 加津枝 編



写真説明

- ・表紙

夕暮れ時の気仙沼大島の田中浜（2021年11月撮影）。地域が団結して巨大な防潮堤を造らないことを選択。NHK連続テレビ小説「おかえりモネ」のロケ地にもなった。砂浜の小舟は2011年の東日本大震災の時に打ち上げられた。

- ・裏表紙

上：南三陸町入谷の里山の風景。森・里を流れる川は志津川湾につながる。刈りとられた稲束は稲藁を積み重ねた「稲むら」にして乾燥させる。（2020年9月）
下：南三陸町入谷にある壇の峰（だのみね）に咲く彼岸花。壇の峰は、大日如来や青面金剛塔などの古い石碑が集まった板碑群。（2020年9月）

Vol.8
2022.3

レジリエントな 地域社会

自然に寄り添う暮らしと地域社会のために

深町 加津枝 編

レジリエントな地域社会 自然に寄り添う暮らしと地域社会のために

深町加津枝 編

はじめに

吉田 丈人 3

1. 防潮堤と市民活動

三浦 友幸 4

2. 気仙沼大島の浜を未来に

↳ 白幡昇一氏（大島汽船株式会社取締役会長、前気仙沼大島観光協会長）インタビューから 28

3. 里山・里海の自然に寄り添う暮らしの実現に向けて 震災一〇年目にみえてくる風景

↳ 気仙沼座談会の記録より 深町加津枝 40

4. 災害に備えるとはどういうことか？

↳ 元南三陸町職員が見た震災復興の現実 太齋 彰浩 76

5.	「南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト」その後	鈴木 卓也	88
6.	北上川のヨシで日本の文化を支える ↳ 熊谷秋雄氏（有限会社熊谷産業社長）インタビューから		94
7.	震災を乗り越えて ↳ 地域のリーダーへのインタビュー	島田 和久	112
8.	津波の被害に対する賢明な対応策とは ↳ 櫻井公一松島町長（宮城県）インタビューから		126
9.	原子力災害から一〇年、福島のと未来 ↳ 松島座談会での振り返り	小沢 晴司	136
10.	三陸海岸の自然に寄り添う地域社会に向けて	深町加津枝	170

はじめに

総合地球環境学研究所 吉田 丈人

東日本大震災と原子力災害が発生してから一一年余り。東北地方太平洋沿岸の街々で、未曾有の災害とそれが加速した多くの変化に立ち向かっている人々の、生の声がここに収録されている。

実に多様な豊かな自然の恵みがこの地域にはある。自然の恵みを活かす知恵や技術が今も生きている。多様な恵みを組み合わせて人々の暮らしや地域社会が営まれている。日本のほかの地域と同様に、社会・経済や自然・生態系の変化による影響を受けてはいるが、自然に寄り添う暮らしや地域社会の実現に向けたいくつもの明るい兆しが生まれ育まれている。これに挑んでいるのは地域のさまざまな人々であり、その人々の心に通底しているのは、自然との心理的距離の近さなのだろう。

そのような自然に近い人々を襲った大災害の影響は、今なお続いている。自然に近い人々や地域社会だからこそ、豊かな自然の恵みに支えられながら、レジリエントな地域社会が新たに築かれるのではないだろうか。災害は、いっどこで自分の身に降りかかってくるか、わからない。しかしその時、この地域の人々のこれまでとこれからの歩みは、大切な道しるべとなるに違いない。

この地域の人々の歩みを知ること、人々から学ぶことから始めたい。それが、この地域の人々の未来にとつても、ほかの地域の人々の未来にとつても、何かを生み出すことにつながるのではないか。収録された多くの声を聞き、感じたことである。ぜひ多くの方に読んでいただきたい。

防潮堤と市民活動

(二社) プロジェクトリアス 三浦 友幸

1. はじめに

二〇一一年三月一日、甚大な被害を及ぼした東日本大震災。私は住み慣れた自宅と母を失った。多くの人々が津波の恐怖に震え、親しき者の死に涙し、まちの惨状に打ちひしがれていた。雪の舞い散るあの日のことを私は忘れない。震災は私に強い当事者意識を与えた。

あれから一年の歳月が流れようとしている。被災地の様子は大きく変わった。応急仮設住宅は全て撤去され、住宅再建のための高台が整備され、災害公営住宅が建設された。流された水産加工場や商店街が再開し、被災した道路や公共施設のそのほとんどが復旧された。そして海岸線には、巨大な防潮堤の建設が進んでいる。最大高さ約一五m、岩手から福島まで総延長約四〇〇km。被災沿岸部の自然海岸を除いたほぼ全ての浜辺に計画され、当時、景観や環境、防災などをめぐり、住民間や住民と行政の間で激しい対立を巻き起こしていた。

しかし、気仙沼市大谷地区では、地域が一つにまとまり、各行政機関と協働することで当初の計画を大きく変更し、地域のアイデンティティである大谷海岸の砂浜を守ることに成功した。また、気仙沼市民有志による「防潮堤を勉強する会」は、市民リテラシーの向上を通じて防潮堤事業に対し社会的に大きな影響を与えた。私はこれまで、一人の被災当事者として、地域住民として、震災復興の活

動や防潮堤の問題に取り組んできた。震災を経験した私たちは、社会に何を伝えていけるのか。これまでの活動を通して得た知見を述べていきたい。

2. 避難所と地域コミュニティ

防潮堤の活動の前に、私の今の活動の土台となった避難所の頃の経験についても述べておきたい。震災後、私の住んでいた地域では世帯の三分の一が自宅を被災し、国道の寸断により地域は半孤立状態となっていた。地域内には、大きな家や残された施設を利用し、いくつもの避難所が形成されていた。また、それらを統括する形で自治会をベースとした対策本部が置かれた。私はこの組織の事務局長となり、物資、ボランティアの受け入れなど、様々な支援の調整を行っていた。

電気も水もない、携帯も通じない暮らし。何とかみんなで生き延びようと必死だった。



しかし、辛く苦しい中にも、私はとても満たされた気持ちも同時に持っていた。年代は関係なくみんなが同じ方向を向き、全体のために動き、人を思いやっていた。人はこれ程までに気持ちが一つになれるかと驚いた。「震災ユートピア」という言葉がある。人と人との関係において、地域の理想郷のような姿がそこにはあった。濃厚な地域の人々との関わりは、震災前は個としてしか存在していなかった自分をすぐに地域住民にしてくれた。

対策本部では毎日朝夕会議が行われ、物資の分配方法の検討や各避難所の状況の報告や課題の解決、今後の方向性などが話し合われていた。私たちの避難所には、様々な支援をしつかりと受け取とめる受援力があつた。対策本部が簡易的なボランティアセンターとなり、地域の瓦礫の撤去なども行っていた。地権者と交渉し、市に要望して地域内での応急仮設住宅の建設にも成功した。流された地域の集会場も、支援団体からの協力や寄付を集め、多くの住民が作業に携わりながら建設することに成功した。

なぜこのようなことができたのか。それが地域コミュニティの力だった。私の地域では、お祭りや伝統芸能などの文化活動が活発だ。私が震災前は全く興味のなかった地域のお祭りや文化活動が、非常時の協力体制や話し合いをする力、行動する力、そして支援を受け入れる力となっていた。それに気がついた時から、私の地域を見る目が変わった。

避難所は刻一刻と状況を変えていく。避難所はいつまでも理想郷ではなかった。物資が十分に届くようになると、避難所の中に亀裂が走り出した。みんなで生き残ることから、自分のことに目が向き、様々な不満が表に出始めた。そのような状況下でも、避難所では常に新しく物事を決めていかなければならない。毎日が小さな合意形成の繰り返しである。周知の方法や配布の方法、優先順位など、一

つ間違えるとしてもないことになってしまふ。避難所解散の危機にも何度もあった。おそらく揉め事のない避難所は存在しなかったと思う。その時期は毎日がとてもつらく苦しい日々だった。常に怒りに満ちた言葉が飛び交う。しかし、それは環境がもたらした心理状態。人の本来の姿ではないのだ。私は何度もそう自分に言い聞かせていた。そして合意形成や地域コミュニティの性質、そして特殊な集団の心理などを学んでいった。そのことが後の防潮堤の活動に役立つこととなる。

3. 防潮堤計画の始まり

防潮堤計画の始まりは震災当初に遡る。二〇一一年四月、内閣府が実施している中央防災会議は専門調査会を設置し、津波のレベルを2つに分けた。発生頻度は極めて低い、甚大な被害をもたらす東日本大震災クラスのような最大クラスの津波をL2（レベル2）、発生頻度が高く、津波高は低い大きな被害をもたらす津波をL1（レベル1）。L2津波においてはハードとソフトを総動員して生命を守ることを優先し、L1津波においては防潮堤などのハードによつて生命と財産を守る方針が示された。東日本の被災沿岸部に計画された防潮堤の高さは、L1津波に対応した防潮堤が整備されることとなった。しかし、リアス式の三陸沿岸は地形的に波が集まりやすく、防潮堤の計画高はTP10m前後にも及ぶ巨大なものとなっていた。

二〇一一年九月、地元新聞に各浜の計画高が示され、その高さに驚愕した。これまで海のそばで育ち、毎日海を見て生活してきた私は、この計画に対し、強い憤りと言い知れぬ不安を覚えた。しかし、この頃、私たちはまだ避難所から応急仮設住宅へ移り住んだばかりで、暮らしの再建に精一杯だった。防潮堤計画は被災者の意識から遠いところにあり、この計画がそのまま進むとはあまり信じられては

いなかった。

私が本格的に動き出したのは、二〇一二年の六月からである。気仙沼市大谷地区における災害危険区域に関する説明会のことだった。災害危険区域とは、災害に備え住居などの建築物に制限をかける区域を指す。災害危険区域の設定方法は各市町村で異なるが、東日本大震災の津波被害のあったエリアで、新たに設定された災害危険区域は、シミュレーション上でL1対応の防潮堤（L1防潮堤）を設置し、さらにL2津波のシミュレーションをかけたときの浸水エリアを基準に設定されることがほとんどである。

さらに、東日本の住宅再建には、防災集団移転事業やがけ地近接等危険住宅移転事業などが中心的に用いられ、いずれも災害危険区域内の住居が被災し、災害危険区域外に移転して住宅再建をにとき適用される制度である。L1防潮堤の高さを決めなければ災害危険区域が決められない。災害危険区域を決めなければ住宅再建の補助制度が使えない。つまり住宅再建と防潮堤の高さが災害危険区域を通じて密接に結びついてしまったのである。必然的に災害危険区域の説明会では防潮堤の説明を伴うこととなる。そして、そのことが防潮堤の高さを容易に変えにくいものとしてしまった。

4. 住民参加の署名と震災復興計画

気仙沼市大谷地区の人口は三七〇〇人。地域にはいくつもの小さな漁港や農地があり、背後にはすぐに山林が広がっている。大谷海岸は1kmにわたる砂浜を有し、震災前は海水浴場として多くの人に愛される地域の象徴であった。しかし、津波と地盤沈下によりその大部分が失われてしまい、わずかに残った砂浜の上には、高さ九・8mの防潮堤の建設が計画されていた。

二〇一二年七月、防潮堤の説明会が開始されると、会場では計画に対する怒声が飛んだ。当時、早くに防潮堤の計画を知った私は、大谷海岸の防潮堤に対する反対運動の署名活動を行うべく、地域の様々な方にヒアリングを行っていた。その結果、地域には防潮堤に反対する声だけではないことがわかった。私はより多くの方が賛同できるように、内容のバランスを整えていった。すると、自然に、反対運動の署名ではなく、「防潮堤計画の一時停止」と「住民意見の反映」を求める、住民参加の署名活動へと形が変わった。

大谷地区の自治会連合会にあたる「大谷地区振興会連絡協議会」の会議の場で協議され、内容がある程度中立的だったことから、連絡協議会が署名活動を主催することが全会一致で決まった。そして大谷地区の全戸に配布され、各振興会の班長を通じて公民館に集められた。署名の内容が反対運動であれば、地域



内で賛成反対の対立は避けられなかったと思われる。対立構造の回避は地域として大きな意味を持った。一三二四名の署名が集められ、同年一月、気仙沼市長へ要望書と共に提出された。

また同時期、大谷地区を含む気仙沼市の旧本吉町では、本吉町震災復興計画の作成が行われていた。当時、私は震災後に支援のため地域に入ったNGO団体の職員として、この計画づくりをサポートすることとなった。大谷地区では、大谷地区振興会連絡協議会を拡張した代表者会議を行い、大谷地区全体の問題の議論や地域振興会ごとの横の計画の擦り合わせを行った。その中で、「大谷海岸の砂浜は大谷地区全体の財産である」との共通認識がもたれ、防潮堤は砂浜の上には造らずに、海岸沿いを走る国道四五号線を嵩上げて海の見える形状とすることが大谷地区全体の計画の中に盛り込まれた。ここから大谷海岸の防潮堤問題は、砂浜を守る運動へと変わっていった。「大谷海岸の砂浜を守る」それが大谷地区住民の共通する想いであり、まちづくりの上位概念であった。

署名と復興計画は二〇一二年一月、気仙沼市長に提出された。提出の際、市長からは意外な言葉が返ってきた。「市も砂浜の上に防潮堤を建設し人工の砂浜を作っても、砂は定着しないと考えていた。よって防潮堤をセットバックする必要があることから、他の行政機関と調整するときに、このような住民の意向が分かるものがあると、強い説得材料になるのでありがたい。」市の意向も住民と同じであったのだ。それは住民間や住民と行政の間でも部分的に合意形成を切り取ることができた瞬間でもあった。これがもし防潮堤の高さの議論から地域が入っていたら、住民同士の間に対立をつくり、そして行政とも意見が割れていたと予想される。そして、市が住民の意向を受けて、他の各行政機関に働きかける。それは市と住民の役割分担であり、共同作業でもある。共同作業は、お互いの間に多少なりとも信頼関係を生み、少しでも対話しやすい空気を醸成する。感情的対立を引き起こしやすい間

題では、この小さな信頼関係がとても重要なのだ。問題が全て解決したわけではないが、結果的に地域は前に進むことができた。

5. 防潮堤を勉強する会

大谷地区で署名活動と復興計画の作成が行われている間、気仙沼市内の各地でも防潮堤に関する説明会が行われていた。二〇一二年八月、防潮堤に関する議論が激しさを増す中、気仙沼市では、市民有志による「防潮堤を勉強する会」が立ち上がった。市内全域を対象に、中立的な視点から様々な面でこの計画を市民が勉強し理解することを目的とした。防潮堤を管轄する各行政機関、様々な専門家、国県市の各議員、気仙沼市内の地域ごとの住民など、毎回講師を呼び、防潮堤について、あらゆる角度から勉強会を行った。気仙沼市全域を対象とし、二ヶ月半で一三回の勉強会を開催。述べ二五〇〇人以上の市民が参加した。発起人メンバーの多くは気仙沼市内の企業の代表の方で、気仙沼市を民間側で動かしてきたリーダーの方々だった。私も大谷地区の署名活動に携わっていたことがきっかけとなり、発起人として声をかけられた。

防潮堤を勉強する会の優れていた点は、賛成反対を抜きにして中立的な立場を取っていた点にある。これは一三回の勉強会が終わるまで徹底していた。また毎回の議事録や資料、要点などがWEBページにつぶさにアップされ、短期間で集中して知見を蓄積したことも優れていた点であった。反対運動でも、推進運動でもない中立的なスタンスの活動は広く注目を集め、防潮堤の議論は社会問題となっていた。

そして、勉強会の結果をもとに、宮城県知事や各関係機関に要望書という形で、防潮堤計画の制度

や進め方の改善を求める活動を行った。その中でも特に、地域の多様性を考慮し地域の実情に合わせた防潮堤の整備、そして住民意見の反映・住民合意の尊重を強く訴えてきた。当時、災害の復旧復興事業は負担法により三年以内に事業を完了させなければならぬルールであった。時間のなさは、地域の対立を加速させていた。しかしその後、復興予算の期限は繰り返し延長されている。

防潮堤を勉強する会の活動は一定の成果をあげた。まず、当初の目的としていた市民のリテラシー向上がある程度達成され、制度に詳しい市民が多く生まれた。さらに、勉強する会の活動が大きな注目を浴び、防潮堤問題に社会の目が入ったことで、住民合意をないがしろにした進め方はできない状況をつくりだした。これらの要因が、行政との話し合いの場において、市民の立場を、行政とある程度対等な位置まで押し仕上げることにつながった。

しかし、防潮堤事業自体は多少の柔軟性をみせながらも変わらずに進められていった。防潮堤の議論は、あとは地域の浜ごとの話し合いに委ねられることとなる。防潮堤を勉強する会の活動は二〇一二年八月から二〇一四年四月まで続いた。

6. 大谷まちづくり勉強会

二〇一二年一〇月、私は署名と復興計画に関わった二〇代・三〇代を中心に仲間を集め、「大谷まちづくり勉強会」を組織した。大谷地区全体に参加者を募り勉強会を行い、最後は行政ではなく、復興会に提言を行った。勉強会は全部で四回行われ、最初は復興会が作成した復興計画の読み解きから始め、後半は大谷海岸をテーマに行った。「大谷海岸の役割と思い出」というテーマで行い、参加者のそれぞれの大谷海岸での過去の思い出から、これまで大谷海岸が果たしてきた役割や機能を見出そ

うと試みた。それをもとにして次の勉強会で「未来の大谷海岸」に関する意見出しをしたところ、防潮堤に関する大きな対立は生じず、話し合いを行うことができた。そこから導き出される、重要項目として、「美しい砂浜の確保」、「安全な防災対策」に関する懸念事項をまとめ、各振興会へ提出した。どのくらいの広さの砂浜が確保されればよいのか、養浜工で砂は定着するのか、何を持って安全といふべきかなど。

二〇一三年六月、署名と復興計画の返答が行政サイドから返ってきた。振興会の会長のみが集められ、大谷海岸の防潮堤の代替え案が示される。そこには、防潮堤が大きくセツトバックされた図面が示されていた。しかし、十分な砂浜の広さは確保されておらず、海岸のすぐそばを走る国道も嵩上げはされていなかった。振興会は、この案を合意せず跳ね除ける結果を選んだ。そこから、振興会と行政の議論は長く平行線を辿ることとなる。大谷地区はこの頃から、国道四五号を嵩上げて防潮堤と兼用化する案を目指すこととなる。

地域は、結果的に代替え案に合意はしなかったが、実は行政サイドでは大きな試みを行っていた。それは海岸の部分的な管轄変更を視野に入れた、防潮堤のセツトバックであった。当時、大谷海岸の大部分は林野庁の所管する治山海岸であった。治山海岸の防潮堤はその性質上、背後の保安林（防潮林）を守るために存在する。よって、制度上、保安林の土地を越えて背後にセツトバックが許されていない。しかし、大谷海岸の代替え案は、それを大きく超えてセツトバックされていた。セツトバックを可能にするために、林野庁が所管する治山海岸から、国交省が管轄する建設海岸に変更し、宮城県土木部が引き取る案であった。行政側も住民の意向を組むべく汗を流していた。

大谷まちづくり勉強会は、活動を勉強会からコミュニティ活動にシフトし、大谷海岸のビーチクリ

ーンやお祭りのお手伝い、公民館にある写真を利用した「懐かし写真展」などを開催。次第に地域の信頼を得ていくこととなる。勉強会を行っていた時も、毎回その案内や結果を各振興会に届けるなかで、実際に顔を合わせ、世間話をする事で、次第に信頼関係が構築されていった。

7. 大谷里海づくり検討委員会

大谷海岸には様々な行政機関が関係する。海岸だけで管轄は三つ。建設海岸部分の宮城県土木部、治山海岸部分の林野庁、第二種漁港部分の宮城県水産漁港部。背後にはJR気仙沼線、気仙沼市観光課が所管する道の駅、国交省所管の国道四五号。都市計画区域外を担当する気仙沼市計画調整課、そして予算は復興予算を見込むため当然復興庁も関係する。

振興会と行政の議論が平行線を辿る中、やがて、震災前から大谷地区の青年部を担い、既に地域との信頼関係を持っていた四〇代が動き始め、震災後に活動を開始した。二〇代・三〇代と共に、二〇一四年四月に発起人会を形成。同年九月「大谷里海づくり検討委員会」を設立。大谷地区の各振興会や各団体から人を出してもらい三〇名の委員で構成。うち二〇代から四〇代が委員の八割という、当時の被災地では非常に若い世代のまちづくり協議会が立ち上がる。大谷地区振興会連絡協議会の承認を得て、大谷里海づくり検討委員会が、大谷海岸の防潮堤を含めたまちづくり計画の検討を任せられることとなる。

大谷里海づくり検討委員会は具体案の検討を行う組織である。地域の最終的な意思決定は、大谷地区振興会連絡協議会が行った。検討のための会議は、当初毎月一回程度開催され、徐々に大谷海岸の議論を深めていった。検討委員会が立ち上がると、すぐに行政サイドから打診があり、振興会と検討

委員会を対象に説明会が開かれた。そこで示された複数の計画案の中には、国道嵩上げ案も含まれていた。しかし、国道嵩上げ案は実現の可能性はほとんどないと言われ、諦めてもらいたいという話であった。防潮堤予算は海岸の予算であり、国道は道路予算である。全く財布が違う事業である。また、東日本の復旧復興事業では、嵩上げ事業はほとんど含まれていない。土地区画整理事業と津波防災拠点事業など、一部の特殊の事業だけである。しかし、大谷地区は可能性をあきらめなかった。制度は解釈を伴う。必ずグレーゾーンが存在する。私たちは検討を続けた。

計画づくりの他に、検討委員会では震災前に大谷小学校で行われていた学校行事の「砂の造形大会」を地域イベントとして開催した。また、震災後に支援で行われていた「大谷海岸花火まつり」の実行委員会にも、積極的に参加し、コミュニティ活動と計画づくりを並

〜私たちが大切にしたいこと
未来につなげたいこと〜

- | | |
|-------------|--|
| 1. 海・環境 | 海と陸をつなぐが、その両方の資源を生かしたい。子どもたちはこの機会にその考えを伝えたい。 |
| 2. 自然がい・歴史 | 東日本震災や東日本大震災、大谷の「にざわびくつ」の観光資源を話題にする。 |
| 3. 人・コミュニティ | 地域の多文化のつながりやなかでいかに大谷にいて、楽しんでいるコミュニティを学ぶ。 |
| 4. 国・地方 | おかげで「東日本震災」の話題については、安全な東日本震災の話題を十分に知ってもらえ、全体で「安全」を模範的行動にたもてています。 |
| 5. 社会の | 「大谷の海」を大事にして、多様な人たちが楽しく、ながい時間や場所づくりを希望する。 |



- ・既存の人工リープとあわせ**④歩の減速防止**の調査研究と対策を継続して実施する。

来源：中国统计年鉴数据库，中国统计网（<http://www.stats.gov.cn>） 年份：2014 年 1 月 31 日

行して行っていた。私はこのような活動が、合意形成の上でとても重要な役割を果たしていたと考えている。いくら地域が砂浜を残すことについては意見が一致していても、防潮堤の議論はやはり感情的対立を生みやすい。いつ結束がほつれてきてもおかしくはないのだ。その中で、祭りや共感性の強い活動を行うことによって、再び地域の結束を強められ、それが結果的に合意形成の維持につながっていたと思われる。

計画づくりにおいて、検討委員会は何度も振興会とすり合わせを行い、話し合いの結果を一枚のイラストにまとめた。それを地域全体に配布し、イラスト案に対する意見や、大谷地区のまちづくりに関するアンケートを行った。それらの結果もすべて盛り込み、最終案を完成させた。そこには国道やその背後地が嵩上げされ、前面には広い砂浜が確保された絵が広がっていた。二〇一五年八月、イラストを元に要望書を作成、気仙沼市長へ提出した

8. 住民計画から行政計画へ

要望書の返答が返ってきたのが二〇一五年一〇月。結果として国道の嵩上げは難しいというものであった。しかし、気仙沼市は引き続き国道嵩上げを要望していくとのこと。要望書提出以降、検討委員会は、各行政機関との意見交換を開始する。その中で、次第に変化が起こり始めていく。

二〇一五年一二月、復興庁の呼びかけにより、各関係機関が集められ、大谷海岸の国道嵩上げに向けた関係者会議が開始される。国道の嵩上げに向け、役割分担と知恵が出されていった。毎月一回、計五回に及ぶ関係者会議の中で、国道嵩上げの実現性が示されていった。検討委員会も各行政機関とのすり合わせを独自に行い、住民の意向をさらに具体的な段階へと落していった。そして、二〇一六

年六月の意見交換の際、ついに国道の嵩上げの実現性が示される。翌七月、四年ぶりとなる行政による大谷海岸の住民説明会が開催され、検討委員会もこれまでの経緯を説明し、合意形成に協力した。その場で合意した事項については主に三点。①震災前の砂浜の広さの確保、②防潮堤の設置、③国道四五号及び背後地の嵩上げ。これをもつて地域の合意とし、砂浜の復旧と国道嵩上げが計画上成立した。地域が行政と協力し、砂浜を守り切った瞬間であった。

大谷の成功には、いくつかの要因がある。一つは「地域が最後まで一つとなっていたこと」である。住民参加の署名に関しては要望事項の「計画に対する住民意見の反映」、復興計画では「砂浜を残す」という賛成反対両者が乗れる内容であったこと。対立構造を回避したここが大きな分かれ道であった。そして、住民が最後まで一つとなり行政と交渉していたことである。住民が割れてしまっていては、行政との対話の受け皿になれなかったと考えられる。検討委員会も、最終的な住民案ができるまで、行政を話し合いの場には入れなかった。

次に「信頼関係の構築」である。地域と若者世代が信頼関係を構築し、若者世代が地域の意思決定へ加わっていく。そして各行政機関とも部分的に合意形成を積み上げ、役割分担と共同作業を繰り返して、信頼関係を構築する。対話しやすい関係を醸成することで、次の協働を生んでいた。また震災前から自治をしつかり積み上げてきた振興会に対する住民の信頼も大きかった。

最後に「大切なものがはつきりしていたこと」である。繰り返しになるが大谷海岸の砂浜は地域のアイデンティティそのものである。砂浜を守ることが大谷のまちづくりの上位概念なのだ。それを地域や行政が共通認識することで、結果にとっても大きな力を生むことができた。

住民の合意形成の他にも、砂浜を守ることにつながった外的要因はいくつもある。先に述べたよう

に気仙沼市長が砂浜を残す選択をしたことや、海岸の部分的な管轄変更、各行政機関の関係者会議の開催。また、J R気仙沼線がB R T化（代替えバス運行）し、海岸を通る専用道ではなく国道四五号を使用することが決まったことも、結果的に砂浜を守ることに繋がった。J R気仙沼線の原位置で路線復旧、またはB R T専用道となると、その海側に防潮堤を建設する必要性が生じるため、防潮堤と国道の兼用化は不可能となる。いずれにせよ、これらは大谷海岸の砂浜を守るという住民の意向を基本としている。

9. 活動の分離

防潮堤の問題は、今後日本の沿岸部のどこでも起こりえる問題であり、社会全体の問題であると言える。しかし、こと地域の意思決定の場においてはそうではない。地域が目指すのは、防潮堤計画全体の問題解決ではなく、地域での最善の妥協点を見出すことである。よって、私は防潮堤計画において、地域の問題の側面と社会問題としての側面、両方に対処しなければならなくなっていた。そこで、二〇一四年六月に友人と一般社団法人を立ち上げ、防潮堤も含め広域的に復興に関わる活動をする受け皿として活動を開始した。この新しい団体の活動は、私と地域を切り離す役割をもっている。活動の分離である。地域の合意形成をしながら、防潮堤問題に全体については、こちらの団体として、その都度様々な仲間とともに活動を行った。

まず、岩手、宮城の主要な浜の防潮堤の施工事例や合意形成のプロセスを調査し、そして国の中央防災会議やその専門調査会などの防潮堤の制度に関わる各種関係会議の議事録や資料も可能な限り目を通した。また、国の関係会議の委員になられている主要な専門家が、シンポジウムなどで登壇す

るときは、できる限り参加し、接触を図るなど彼らの言語や考え方を学んだ。また、防潮堤問題の過去の事例や関係がありそうな他の社会問題についても、現場に足を運んで学んだ。北海道南西沖地震で最大高さ11mの防潮堤を建設した奥尻島、大規模な干拓事業により地域が二分した諫早湾、日本で唯一ダム撤去に成功した荒瀬ダム、破綻を経験したまち夕張市、除染と帰還政策に揺れる福島にも何度も通った。こうして得られた知見を元に、様々な場面において、防潮堤問題の発信や政府への政策提言などを行った。

地域の中で合意形成のコーディネートを行いながら、社会に対して問題提起を行うことはとてもバランスが難しい。発信を伴う活動の際は、いつも細心の注意を払いながら言葉を選んでいった。社会に対して、そのような活動がどこまで影響があったかはわからない。しかし、活動を続ける中で、大谷海岸の砂浜を守ることに対す



二〇一八年一月、大谷海岸の工事は着工を迎える。さらに詳細を調整し工事が進むうちに発生する検討課題を必要に応じ話し合いながら四年の月日を経て、二〇二一年七月、ついに新たな大谷海岸が完成する。一年ぶりに海水浴場がオープンし、嵩上げされた国道の背後に整備した新たな道の駅からは、一面に海の見える景色が広がる。既に多くの人々がこの地を訪れ、大谷の海を感じてくれている。

施工にあたっては、かなり細かな配慮が

取り組み方針(3):海浜環境と賑わいを両立した土地利用とします。



組み込まれている。大谷海岸について性質の違う四つのエリアに分けて説明したい。

①海を向いて大谷海岸の右端から滝根川までの西エリアは、行政との協議の結果、ホテルの背後の国道が九・八m以上あることと、ホテルの建築強度や避難計画を考慮して高い防潮堤は整備せず、既存の護岸をさらに右岸側に延長して海岸浸食を防ぐ構造とした。②滝根川から砂丘の間、大谷海岸の中央エリアは、前述の通り海岸の管轄変更を行い、治山海岸から建設海岸に変更。嵩上げした国道と一体化しその法面が防潮堤構造となった。それに伴い道の駅や国道から海が見える景観を確保しつつ、また防潮堤法面を全てベンチ状の構造とすることで法面自体も人々の集える場所とし、親水性を上げ、さらに海岸のどこにいても避難が可能な構造とした。スロープは車いすが自走できる勾配とし、途中に踊り場を設け、また防潮堤の足には、スロープから砂浜を横方向へフラットに移動できるプロムナードを設置した。③海岸の管轄変更をしていない砂丘エリアの治山海岸部分は、既存の護岸を修復し、高さ九・八mの防潮堤をセトバックし建設。砂丘の地盤を補強するため、砂を柱状に固めてジグザクに打ち込むサンドコンパクション工法が採用され、地下水の流れの遮断しない構造とした。また砂丘エリアの防潮堤は、表面を防潮堤工事で出た砂丘の砂で被覆し、飛砂防止を兼ねて海浜植物の再生を図った。④大谷海岸の左端にある漁港エリアの防潮堤は林野庁の防潮堤に合わせ、漁港区域を越えてセトバックした。最後に元々の大谷海岸の砂である砂丘エリアの工事で出た残りの砂を使い、震災前の広さ二・八haの砂浜を再生した。

各所管の行政機関やコンサル、事業者、住民、専門家が知恵を出しあい、津波や高潮の防護という単機能しかもたない防潮堤事業の大きな制約を超え、地域のアイデンティティである砂浜を軸として、エリア全体にまちづくりの話し合いの中で多様な機能を持たせることを可能とした。こと砂浜の果た

す役割は大きく、生態系における自然環境的な役割や、波の浸食におけるバッファゾーンであることはもちろん、大谷地区の場合には、砂浜が故郷の象徴であり、多くの人々が訪れる憩いの場所であり、相乗効果として商業施設の売り上げにも影響を及ぼしている。つまり地域コミュニティの核となっている。

11. 対立を越えて

防潮堤問題を社会的合意形成の問題と捉えた場合、大谷地区の事例は一つの成功モデルと言える。社会的合意形成の最大の壁は、感情的対立である。人はどこまでいっても感情の生き物である。そして、集団心理の影響を受ける。自己の所属しているグループのメンバーに対し評価が甘く、所属していないグループのメンバーへの評価が厳しくなる。防潮堤の場合、建設への賛成意見の方と反対意見の方が、それぞれ賛成派と反対派となり、お互いに厳しく自分たちに都合の良い論理だけを積み上げていく傾向がある。住民と行政、各行政機関どうしても同じである。いずれにせよ、感情的な対立構造を回避し、信頼関係を積み上げていかなければ、本来の意味での対話は成立しない。

また、防潮堤の議論の場では、往々にして「環境・景観」と「防災・減災」が対立構造を持ってしまっている。防潮堤は巨大構造物であるがゆえに、景観に大きな影響を与える。そして大きさに加え、波を止めるというその目的、そして造成される場所が陸と海の間であることから、生物や物質の流れを遮断、もしくは不可逆的なものとし、海岸環境という特殊な場所を埋め立ててしまう。しかし、一方で、国による新たな防災の方針において、防潮堤等でL1津波を防ぎ、L2津波を軽減させるという大義名分が存在する。必ずしも物理的な防護だけが防災・減災ではないが、防潮堤の議

論においては、それを優先する正義が存在する。環境にせよ防災にせよ強すぎる正義は対立を作り出す。正義を強く掲げると、もう片方の正義が牙をむく。そして感情的な対立の場面に、多くの人が声を潜め、合意形成の場から姿を消してしまう。結果的に強く正義を掲げる者だけが残ってしまい、争いが生まれる。

しかし、大きな声を上げなければ、社会はその課題に気が付いてくれない現実もある。それをある程度克服したのが「防潮堤を勉強する会」であった。中立性は一つのヒントである。合意形成の場においても、私は自分の個人的な想いを切り離し、できる限り中立性を担保して運営に携わってきた。もし仮に私が誘導的な運営をしようとした場合、私は地域からの信頼を失っていただろう。そして、当たり前であるが、防潮堤がはらむ問題は、社会的合意形成の側面だけではない。環境や景観の問題、防災・減災の在り方、津波被災地の復興の在り方など、様々な要素に課題は残されている。

気仙沼における防潮堤の議論では、多様な知識や考え方を学んだ市民が、地域のコーディネーターとして地域と行政の調整に取り掛かっていた。そして、地域の合意形成の場においては地域がこれまで積み上げてきた自治やコミュニティの力が一つにまとまることで、国や行政を動かす大きな力を生み出していた。また、行政との協働においては、住民と行政との様々な役割分担や共同作業を通して、信頼関係を積み上げ、対話できる素地を構築していった。それは考え方や世代の違う地域の住民間でも同じであった。そのような土台の構築が、合意形成の中では何よりも重要であった。その上で、専門性が必要な場面においては専門家の力を借り、最終的な計画策定へとつなげていった。

もちろん全ての地区が同じような道を進んだわけではない。震災から一〇年が経った今、三陸の海辺の風景は防潮堤によって大きく変わってしまった。時間の経過とともに薄れてはいるが、地域によ

つては防潮堤の際に生じた対立がコミュニティに残っている浜もある。しかし、二極対立を生み出す社会的合意形成の問題を突破した事例はいくつか存在する。そして事業ありきで進んだ防潮堤事業に対し、市民や行政、専門家などが共に戦った痕跡は、三陸沿岸のいたるところに刻まれている。例えば風景が変わったとしても、そこには海と人との暮らしを別つまいとした人々の想いが込められている。

12. 海と陸のはざまにあるもの

多くの人々が心を砕いた防潮堤。私たちは何故これほどまでにこの問題と向き合ってきたのか。この三陸沿岸は津波が頻繁に訪れている。チリ地震津波や昭和三陸津波、明治三陸津波、慶長の津波、貞観の津波がある。津波常襲地帯である。しかし、それにもかかわらず私は初めて防潮堤の計画を知ったとき、大きなショックと共に強い怒りを覚えた。それは海に対する信仰にも近い想いをもっているからかもしれない。自分の大切に行っている場所が埋め立てられ、そして海と人との暮らしの間に隔たりをつくられてしまう。そういう強い危機感があつた。

人の心には接近傾向と回避傾向という性質があるらしい。「おそれる」という言葉がある。津波を「恐れる」。防潮堤は津波を「恐れる」ので、それを避ける回避傾向の存在だ。しかし、私たち海の民にとつて、海は「畏れる」つまり恐れ敬う存在である。畏敬の念を払い常に意識化におく接近傾向の存在なのだ。私は常に意識化に海がある暮らしが重要であると考え。海や川、山などの自然とともに、その恵みを享受し、脅威にもさらされ、絶えず変化する自然の中で生きるとはそういうことなのではないだろうか。命をいただき、命を守る。私たちはそれを生活の積み重ねや、文化的な信仰、慣習のなかで保管してきたのかもしれない。

「ゆらぎ」という言葉にも触れておきたい。海岸は常に陸と海のゆらぎの中に存在する。大きなゆらぎが来て陸地はたまに海に変わることもある。海と陸の間は線で区切られているわけではない、ゆらぎの領域が存在するのだ。そこには独自の環境があり、生物や物質の行き来がある。私たちが安全と思つて暮らしていた場所も、大きな時間の流れの中ではゆらぎの領域だったのだ。私たちがまたゆらぎに住む生き物なのだ。

であるならば、私たちは自然を意識しながら暮らしていくしかないのだ。ゆえに海を感じられる暮らしが重要なのだ。大谷海岸も防潮堤は存在する。納得のいかない部分も多く存在する。しかし、少なくとも陸側から圧倒的に海を感じられる場所となっている。道の駅のテラスにも多くの人が訪れ、海を眺めている。そして波打ち際で戯れる人々を見て、海岸へ足を運ぶ人の流れができていく。このエリアを訪れた人々の意識化には、海が存在するのだ。そして、制約が多い事業の中でも、結果的にはあるが、大谷海岸はできる限りゆらぎの環境やそのつながりを残す形を目指してきた。

13. 復興のその先へ

私は活動に集中するあまり、ときに目的を忘れ、活動自体に埋没しそうになってしまふ。あるいは感情にとりつかれ、誰かを傷つけてしまいそうになってしまうこともある。だから、私はいつも原点に立ち返ることになっている。意識的にあの日を思い返す。そして避難所の時から出会ってきた人々のことを思い返す。私の活動はあの日から始まり、今まで出会ってきた人々の思いに支えられ成り立っている。

あの日、二万人の命が失われ、そして多くの悲しみと不安、行き場のない怒りが生まれた。しかし、

家族や友人、地域の人々が痛みを分かち合い、その悲しみに世界中の人々が意識を向け、数多くの人が東北の地を目指してくれた。私たちは苦しみの中、同時にあたたかな一体感にも包まれていた。当時、私たちは耐え難い痛みと同時に、日本全体が良い方向に変わるような、社会の可能性や人の可能性、希望に満ちた空気感を感じていた。そこには、多くの人の祈りや感謝の想いが存在していた。

しかし、その後に政府から降りてきた復興事業には多くの制約があり、私たちはまた新たな困難と立ち向かうことになってしまった。事業にのるかそるか、二者択一を迫られた。だが地域社会はそう単純ではない。その土地や風土にあった、これまでの暮らしや人々の想いが反映されたまちづくりが必要なのだ。それは二者択一の外にある、第三の選択を生み出す作業なのだ。だから私たちはこれまで活動を続けてきた。大谷地区住民の砂



浜を守る活動は、震災で失われた故郷そのものを取り戻す活動であった。私たちはその動態の中で、取り戻したかった故郷の姿を、復興と呼び目指してきたのかもしれない。

今、東北の沿岸部には既に巨大な防潮堤が立ち並んでいる。現在の復興の姿は、震災当時思い描いていたものとは異なる未来かもしれない。自然との共生については悔しさが募るものもある。しかし、防潮堤を勉強する会の活動は、市民活動の可能性を、そして大谷地区住民の活動は、地域としての課題解決の在り方の一つを、社会に示すことではできたと思う。私たちの成果は小さなものだったかもしれない。それでも、これから同様の問題に立ち向かう人々、そしてすでにその重庄の中で問題と向き合っている人々に、少しでも勇気を与えることができればと私は願う。次の社会ではきっと違った景色が広がっている。そう信じて私は活動を続けている。

気仙沼大島の浜を未来に

〓 白幡昇一氏（大島汽船株式会社取締役会長、
前気仙沼大島観光協会会長）インタビューから

大島での防潮堤計画

島民の方にとっての小田の浜海水浴場に対する想い入れというのは、他所の地域で生活された方にはわかりにくいところが多々あります。やはりここは島ですから。島で、なおかつ楽な生活をして暮らしていた方々が多い島でもなかったんで、当然海のレジャーってのは海水浴だったですよ。だからこの島に生まれ育って、小田の浜海水浴場にお世話にならなかった子どもっていないんです。それぐ



白幡昇一さん

らい島の方々の、小田の浜に対する想い入れつてのは全く違うわけです。

我々観光事業者にとっては、小田の浜海水浴場というのは、環境省選定の海水浴場百選つてありましたよね。その中で、一〇ヶ所の特選の中の一ヶ所に選ばれたぐらい素晴らしい場所なわけです。夏の海水浴場がピークのときは、民宿、旅館含めて五〇軒から六〇軒ぐらいの宿が存在したんです。ウチでも民宿やってたんです。長崎地区つて小田の浜を抱えるその集落は、約百軒のうちの三〇軒ぐらいが民宿やってたんです。つまり、その民宿のひと夏で、そこそこの生活の一部を稼ぎ出した場所でもあるわけです。だから、そんな所に防潮堤なんかとんでもない話だと言うのは、その話が出たときからすごい強かったですね。

四月の第三日曜日から大島の観光が幕開けなんです。四月の第三日曜日というのは「つばきマラソン大会」という河北新報の冠大会なんで



小田の浜

すよね。数千人ぐらいの方がここを走られる。その中で宿泊も結構あるんですよ。そこから島の観光はスタートしていくわけです。四月の下旬、五月のゴールデンウィーク、そして教育旅行、海水浴ってこう繋がっていくわけです。だからそういった意味では、小田の浜の我々観光関連事業者にとつての位置付けっていうのは、相当利益を生んでくれる貴重な場所でもあるわけです。そこに防潮堤をはられては、この海水浴場は危険ですよというのを看板に背負った形で、海水浴場なんかでできるわけじゃないじゃないですか。だからもういらないよねみたいな雰囲気は協会の中でも当然あったし、被災した所ですら反対でした。

最初から申し合わせて、防潮堤はいらないよねではないんですよ。要するに島民説明会の場で、個人個人が持ち寄った意見が同じ方向を向いてたっていうだけの話です。結局回を重ねるごとに、一回目以上に二回、三回、四回と繰り返



小田の浜への案内板



返すうちに、どんどん皆さんの気持ちが一本化していったというようなところもあるから、もう県も立ち行かないみたいになっただね。だから今となつては、浜を残して良かったと。

大島地区振興協議会という自治会の集まりで、ここにはいらないと言って、だんだんまとまっていっただね。大島地区振興協議会っていうのは、構成メンバーが、この地域に一三地区ある一三自治会の自治会長さん、島内の諸団体、我々観光協会とか婦人会とかボランティアクラブ、老人クラブといった、いろんな団体の会長さんたちが集まった組織が大島地区振興協議会という組織なんです。だから、そこで結論付けられた意見というのが、この島全体の総意になるんです。最終的にはそこが反対したんで、島の一団体の大島観光協会のみならず、一三自治会を含め他の様々な団体の団体長さんも反対したから、最終的には、島全体の総意ということになったんですよ。だから県も諦めざるを得なかった。

多分被災地で防潮堤がはられなかった海水浴場つ



小田の浜ビーチハウス

てここ以外ないんじゃないですか。だからそういった意味では、後世に自慢できる。海水浴場して、泳いでる方々にとつてみても、後に防潮堤をはられていたら、おそらく心理的な威圧感が相当あると思うんですよ。でも全く道路とフラットで普通の防波堤と全く変わらないので、安心して泳げる。

震災復興

震災時、田中浜の体験館は屋根まで波をかぶりました。震災の次の年、いち早く環境省が予算化をして直してくれた。フットワークが軽かった。当時、いろんなボランティアが島に入りました。しかし、公共的な部分、例えば、大島の開発センターとか体育館とかは避難所になってるわけです。大学生や企業も大島には入ったのですが、集まる場所ないわけですよ。だからここの体験館が大活躍したんです。ありがたかったなと思って。ただ県の防潮堤の計画があり、小田の浜のビーチ



田中浜の背後地のマツやサクラの植栽地

ハウスの再建のほうは、最初は防潮堤の足にか
かるからと言われ一時中断したんです。本来で
あればあれはもつと早くできたんですが。

震災後のイベントでいろんなことやったん
です。震災の一年後には、浜辺の海開きができ
たんです。大島は、当時地元の仙台放送、宮城
テレビ、東北放送とか地元のテレビでは紹介さ
れるけれども、中央のテレビで紹介されたこと
ない島なんです。だから全国で紹介するには、
一番先が絶対いいなと思ったんですよ。

四月の第三日曜日に河北新報の冠大会の「つ
ばきマラソン大会」があるんです。それも次の
年にはやろうと。当時、行政が「ランフェスタ」
という名前でマラソンやってたんですが、道路
なんかも、至る所めちゃくちゃやられてるわけ
ですよ。県の方が「ランフェスタ」に合わせて
道路を直してくれました。スポーツ大会が行政
を動かしてくれたんです。



亀山から気仙沼市街地を望む（提供：渡辺綱男氏）

大島の観光業

田中浜は海浜植物の宝庫でもあったんです。それをもっと復活させたいっていう想いもあるし、せっかく残った砂浜を有効に使う努力を若い方々にぜひ頑張ってもらいたい。観光協会を四〇数年間やって感じたのは、観光に携わる方はボランティア的な精神を持っていないと、なかなか活動ができないということです。活動してすぐ実入りがあるわけじゃないですから、種をまく時期つてのは相当必要なわけですよ。結実するまでの期間をとにかく我慢しながら、辛抱強く待つしかないわけです。若い方がお宿の主人であつたりすると、自分たちが動かないと生活がままならないわけじゃないですか。相応パワーは必要ですよ。

大島の方々は二つの浜の使い分けをしていて、田中浜つてのは離岸流があつて、ここで泳いで亡くなつてる方つて結構いるんですよ。し



シーカヤック体験の様子（気仙沼大島観光協会 HP より）

たがって地元の人たちはここで泳ぐのは駄目。でも教育旅行を開始して、ここで地引網体験ができるようになったりして、環境省がここに海辺の体験施設を作って、この浜の活用が見えてきました。海水浴じゃない部分のプラスチックアルフアとして、このフィールドが使えると。だから貴重だよとなったんですね。亀山山中に登るところで、田中浜と小田の浜でハートスポットになってるんです。二つでセットなんですよ。どっちも欠かせない。ハートっていうのは最近です。防潮堤計画が見直されて、この二つの浜をセットで守ることができたんです。

ただ、ウチは一日カーフェリー二隻で一六往復やってたんですが、大島架橋でゼロになりました。収入のほぼ九九%ぐらい失ったわけです。今新たな事業を展開しようということで遊覧船事業に軸足を移してるのですが、まだまだ育っていないんです。



田中浜

NHK「おかえりモネ」のロケ地として

震災一〇年の年に、NHK「おかえりモネ」が来てくれた。舞根湾（もうねわん）ってあるじゃないですか。だから、「おかえりモネ」のモネって舞根じゃないかって言う人もいます。いろんな場面で納得いくような場所が結構出てきてるんですね。田中浜で盆の送り火の時に「蛇やムカデに噛まれないように」とあつたじゃないですか。我々が小さい頃にやってたわけです。流行病にならないようにっていうまじないなんですよ。

「おかえりモネ」では田中浜がエンディングのロケ地でした。良かったですよ。あれ以来祝祭日になると車すごいです。ドラマに出たサビた船は震災で焼けて、本土から流されてここに打ち上がった船なんですよ。船っていうのは、基本的には所有者が最終的には片付けなきゃならないわけです。だから行政は手を付けなかつ



亀山から田中浜と小田の浜を望む（ハートスポット）（提供：渡辺綱男氏）

た。それで残った。

休暇村の道をずつと行つて、一番大島の北側にセツト持ち込んでロケしたんです。小屋も家の前に作っただけで、その小屋は撤去して東京に持つて行っただけです。家は本当に由緒ある家なんですけど、その脇に防潮堤がはつてあるんですよ。バランス悪いですね。

将来的には、遊覧船事業を気仙沼観光の中核事業にしていきたいと思っていました。今年「おかえりモネ」があつて三陸道の横断橋があつて、行くぞつてときにコロナじゃないですか。もう大シヨックです。朝ドラは六ヶ月経つと新しいドラマが始まります。だからモネ効果つていつまでもつのか。その辺も含めて、差別化した遊覧船を展開していかなきやないかと。

ウチは基本的に生でガイドしてるんです。リアルタイムにガイドできるようにというこ



田中浜（地盤沈下した浜の防潮堤を１メートルだけかさ上げて元の高さに戻す復旧にとどめた。）（提供：渡辺網男氏）

とで。乗るお客さんによって、子どもが多いときは子ども向けのガイドしたり、変えてやっています。三年目となり、これからも頑張っていけます。

（二〇二二年二月二八日 休暇村 気仙沼大島にて 聞き手…渡辺綱男、深町加津枝、吉田丈人、小沢晴司）



休暇村に向かう道の整備

里山・里海の自然に寄り添う暮らしの実現に向けて 震災一〇年目にみえてくる風景／気仙沼座談会の記録より

深町 加津枝

本特集テーマとなる自然に寄り添う暮らしの実現に向けて、これからの地域社会に求められるのはどんなことでしょうか。その答えを探るため、宮城県気仙沼市において身近な里山・里海と深く関わった暮らしや事業を営まれている吉田勝彦さん、村上健一さん、高橋正樹さん、山内宏泰さんに座談会に参加いただきました。座談会では、震災後一〇年が経った今、皆さんの目からみる里山・里海の風景がどのように変わってきたのか、残したい風景とはどういう風景なのかなどについて、語り合っていました。

深町加津枝（司会）…本日はお集まりいただき、ありがとうございます。まず初めに、自己紹介をお願いします。

吉田 勝彦さん（八瀬・森の救援隊 事務局長）

私は昭和二二年生まれでございます。気仙沼の北西の山の中で育ちました。ウチのおじいさんは、矢作から来た「気仙大工」で嫁入り箆笥を作るような人だったんですね。父親も大工でした。ウチの近くでは山仕事や田畑をしている人が多くて。友だちと一緒に炭焼きや田んぼに行くと、みんなは自分の家のことを手伝います。

私の父はそこにはいないから、なんとなく自分とはみんなと違うんだなと感じていました。一番

違ったのはお米買うときね。昭和六〇年頃までは米の鑑札を持っていかないと米を買えなかったのよ。大工だから現金はあるんだけど米がなくてね。中学校終わってすぐ車屋に何年か勤めました。そのうちに昭和三〇から四〇年の材木がすごく値が上がった頃から材木の仕事を一〇年ほど勤めた後、今度は銀行の話がきて定年まで勤めました。その都度転職したんですけど、人に声をかけられるとこれが運命かなと思いい、他の話にも乗りました。

若い頃は青年団活動っていうのがあり、その組織は全国的に存在して、組織が大きくなってくると政治活動までやってね。いろんな人の絡みとかそういうのを勉強しました。銀行に入ってもその繋が



りもあって、人に声をかけられるとすぐ乗る癖があつてね。

そして、高橋社長と出会つてスローフードに関わりました。震災があつて、次はエネルギー事業が始まつて今は山で仕事をしています。人の繋がりがあると損得もあるんだけど、何か縁があつたから自分に来たんだと思うようにしているんです。

村上 健一さん（魚料理専門店「福よし」店主）

私は昭和二四年に気仙沼で生まれました。農家です。おふくろが大島出身です。おふくろの兄弟が大島や松岩で海苔を作つたり、ウナギを取っていたので、私もよく海で遊んでいました。海苔の天日乾燥を手伝っていました。おふくろはね一二人家族のところに嫁に来たんです。それで私が生まれたときで家族が一四人。山で炭も作っていました。山で木を切つて、炭窯を作つて炭焼きをやっていました。今はどこにもないけれどね。私は水産高校へ行つて、公務員を三年し、それから一九七八年に魚料理専門店「福よし」を開業しました。震災があつて、翌年に今の場所に移つて再興しました。

私のひいじいさんは、薪や木出しもしたしい



ろんなことをやったんだけど、私は三歳頃には山に行くときは一緒に連れていかれました。冬だろうが何だろうが、家においていても人がいないから連れていくしかないんですよ。行く道々で、これで何々ができるぞ、これは食えるぞとか。この木の枝は取って、この木を残せというのは、鋤を作るときに鋤の角度があつて、田畑によって鋤の角度がだいたい決まる。自分の家は畑が少し段々畑で、傾斜があるから傾斜に対して鋤の角度が違うわけです。だからそれに対して枝を測るわけでもないけれど、目測して、それをとつておくわけですね。ある程度成長するまでとつておいて、それから成長したやつを伐つて、皮をはいで、保存しておいたわけです。鋤が壊れたときに使えるようにしていました。

藁を打つのはツバキの木がいいよなとか。訳の分からない木で道具を作っても時間が経



「福よし」の炉端

つと割れてしまうんだ。ツバキの木とかは時間がたっても割れない。そういうのを分かっているわけよ。重さもちょうどいいしね。全部教えられたわけじゃないけれどやっていますね。

ウチのひいじいさんは、そういうのが周りの人から比べたら、ちよつと抜け出ていたかもしれない。山に行くときは必ず鉈を持っていけば、あと何でもできるよ、ぐらいなもんでね。だから私も知らないうちから身についてきちゃった。今になってみると大切なことだった。その時はなんとも思わないんだけど。みんな大学に行くけれど、私は山の大学へ行ったのかもしれないなあ。そういうのは、面白いね。知らないところで自分の体の中に入っているのかもしれないだよ。

高橋 正樹さん（気仙沼地域エネルギー開発株式会社 社長）

私は昭和三八年に市役所のある八日町に生まれました。本当に気仙沼は田舎ですけど、気仙沼の中では都会っ子、町の子というふうな環境です。でも、遊びはまだ公園が整備されていなかったもので、横丁山という安波山の麓に広場があつて、毎日そこに地域のガキ大将に連れられて一〇人、二〇人で何かいろんなことやつて遊んで、沢もあつてちよつと行けば山がありますからね。ほどほどに町の子なんだけど、そう



いう遊びも小さい頃はしていました。

中学校まで地元にて高校から大学・社会人と東京で一〇年生活をして、家業が一昨年で創業一〇〇年になる石油の会社だったもんですから、それを継ぐために帰ってきました。最初仙台に二、三年いて、その後二八歳で帰ってきて、外からなるべく人を増やさなくちゃならないって言われて、遠くから嫁さんをもらいまして、嫁もらったら子どもをいっぱいつくらなくちゃならないと思ったんで四人子どもをつくって、そしたら少子化対策委員の中に選ばれました。

帰ってきてそのまま家業を継いだわけですが、その中で青年会議所だの商工会議所だのいろんな活動をしてきたのです。東京から戻るのにも色々葛藤はあったんですけど、東京はあんまり人が住むとこでないなと思ったことがありましてね。それは、お通夜に行ったときに偉い人の割には寂しいんだなって思ったんですね。子どもの頃に見ていた気仙沼のお通夜というのは、近所のおばあちゃんでも凄く沢山の人が来たりするんですね。家で何時までもお通夜やっていて。そうイメージしていたので、東京ってなんか寂しい街だなって。都会は人が多いけれども、その中の歯車で終わってしまうよりは、やっぱり自分の生まれ育った町に帰って、何かそのためにはなるようなことやった方が、生きる意味があんじやないかなと思って。そんなふうなことを漠然と考えましてね。都会で就職するのはやめて、稼業を継ぐことにして、それで帰ってきた経緯がありました。

そんな思いでいたところに、とある人から青年会議所に誘われて、何度か断っていたら「何度も誘われると思うなよ！」と怒られて渋々入ったのですが、実はその人が今の商工会議所の会頭でして、それからまちづくりを一緒にするようになって。その後、関西の方から来た人にこは都会から遠くていろんないいものが残っているのだからそれを生かすのにスローフード運動というのがあるからって教

えられて、スローフードも始めたんです。

私の人生はとにかく自分で何か発想したんじゃないくて、いろんな人にいろんな知恵をつけられて、それはいいなって共感して、それで何かに取り組む。それで町のためになる様になるという事で、活動してきたのではないかと感じるんです。その中で震災にあつて、震災の後またいろんな事業を始めたのもそういうところが多かったと思うんですよ。

山内 宏泰さん（リアス・アーク美術館 館長）

私は宮城県の石巻市で生まれ育ちました。親父の実家は秋田なので、石巻と秋田のハーフという感じです。自分の中では未だに秋田人だと思っていて、今でも本籍は秋田の角館です。個人的には、山が好きかって言われると別に好きってほど知らない。海が好きかって言われると海にあんまりいい思い出はないっていう感じだね。だから海の町で生まれ育つて海の町ですつと生きていますけど、ことさら海を愛しているかと言われると、特別そんなことはないし、海水浴とか全くしないですよ。小さい頃一回死にかけて、ちょっと海は怖いんです。さらに津波があるし、海は正直、苦手かもしれないですね。

ただ、この間掛川にちよつと出張があつてその帰り足で焼津に寄つたら、駅に出た瞬間に、海なんです。何にも見えない駅前



でもわかるんですよね。海だぞって。匂いでもないし、なんだろうなと思うんですけど。空気の違いが判るんですよね。だからさすがにほぼ五〇年海の町で暮らしたことで、知らず知らずに体は海の人間になってるんだろうなとは思います。

気仙沼に来たのは二三歳。今年五一歳になるので、二七、八年ここにいます。気仙沼は美術館が開館するというタイミングで仕事として来たわけですが、今となつては、仕事があるからいるとも言い難い、気仙沼だからいるとも言い難い。気仙沼にいる人たちと長い付き合いがあるからここにいてというのが、一番本音かもしれないですね。

人の繋がりで生かしてもらっているという中で、それに応えるのも仕事だと思っているうちになんか三〇年くらいたった。二〇代頃にお世話になった人や、三〇代頃に一緒にまちづくりだとか言い出した人たちとかがどんどんお年を召していくので、最近は若い人たちとどうやって付き合っていくかということを考え始めていますね。

こういう関係性の話の中で、自然とわきだしてくる言葉が一つあるんです。「覚悟」っていう言葉。それは今もこれからも変わらない一つのキーワードかなと思っています。

里山・里海との関わりの記憶

深町…暮らしの中の山や海、川との関わりとその変化について、記憶に残っていることをお話しただきたいと思います。

高橋…昔の遊びは、遊びつて言いながら食べ物を探していたよね。学校の帰りに山を通つて木イチゴを食べながら帰ってくるみたいなのはあったな。

吉田…木イチゴ食べたね。

深町…山のおやつっていうのは主にイチゴですか。
高橋…スカンポだね。今食えばおいしくないと思うんですけど。おやつがなかったから。

吉田…あれも種類があつてね、おいしいのとおいしくないのがある。秋になればクリが落ちるし、あの木の実がなるつてのがわかつて、山のどこにあるつてわかつていたし、人より先に食べれるように工夫してたね。

高橋…山ブドウも美味かったね。

吉田…その後に赤いイバラのある木に実がでてるし、季節ごとに場所を覚えて山に入つてたよね。
村上…農家の家では「子どもが生まれたら成木を植える」と言つて、カキやクリなどのおやつになるような樹木を植えたよね。

山内…武家屋敷の庭にカキの木が植えられていた歴史があつて、カキの木を自宅の庭に植えることがステータスシンボルになっていたみたいですね。
吉田…一番カキが多いね。増えるもの。クリなん



座談会の様子

かと比べて収穫する量が多いもんね。

村上…クリは実も食えるんだけど、家を造るとき土台とか、物干しや田んぼの杭のために植えたんです。クリの木は水で腐りにくいから。だから山に行つたときに、杭にちょうど良いクリの木は残されていました。

山内…大黒柱もクリの木ですよ。

吉田…大黒柱はケヤキだったのでは？

山内…ケヤキも多いんですがクリも使いますよね。

村上…土台に使うのはクリだよ。マツは梁とか。マツは脂分があるから水に強いんだよ。水の中に入れたらマツは腐らない。

山内…南気仙沼地区の初期の埋め立ても木杭が入っていました。津波で洗われた下から木組みが出てきました。マツなのかな。昔の埋め立ても初期の頃はベネチアとかと一緒にですね。

高橋…今はマツ枯れで、マツが駄目になっていますね。

村上…スキーで一番滑るソリの下の材料は、クリの木なんだよ。

吉田…おれはスクラで作ったよ。昔、木出するキンマ（木馬）はクリの木だったな。

村上…炭出しだね。ソリを作つてね。炭乗つけて引つ張りながらすべっていたんですよ。

高橋…子どもの頃の海つて意外と綺麗でなかったんですよ。内湾は赤黒い赤潮だね。大島に行けばもちろん綺麗なんですけれど。

村上…夏は特に駄目だった。夏場は南風が入るから、内湾から外に水が出ていかない。西風が入って

内湾の水が外に出されたら綺麗なんです。

村上…ここ（神明崎）から大島まで遠泳したね。貸しボート屋さんがあって、ボートを漕いでいたり、牡蠣筏がいっぱいあった。

吉田…そのあたりは全部養殖筏だらけだった。

村上…水産高校から朝日町は全部砂浜だった。校庭がそんな状態だから、干潮があるとその砂浜が引くわけですよ。そうすると体育の授業でソフトボールをやったりした。大型バスで潮干狩りをしに岩手県とかから来たんですよ。

村上…川はすぐ変わったよ。私は釣りが好きだけれど、こんな川で釣りたくないと思ってやめたんだ。昔は鬼怒川に泊まりがけで行ったりしたんだけど、何十匹というアユの黒い集団が、大きな石のところをぐるぐる回って、あっちにもこっちにもいたんですよ。

夏になる前に、少しゆつくりした流れのところで、アユ釣りをするための仕掛けとして川づくりをするのね。川づくりっていうのは、自分の竿のテグスの長さに合わせて、アユが手前を泳ぐように、自分たちで川の中の大きな石を寄せて、川の流れを作るんですよ。そうすると、その石の所にアユがよってくるわけよ。自分の竿の範囲にテリトリーをつくるわけです。

もう少し浅いところでは、川の真ん中に斜めに石を並べておいて、流れを作って、魚の通り道を作って、受け漁をしたり。

高橋…私の時はもうあんまりやってる人はいなかったな。村上さんの時代が一番、花盛りだったんじゃないですかね。

村上…私は気仙沼駅のすぐそばなんですよ。昔は電車以外はバスしかないもので、駅が中心だった。古町は一番の町と言った。新しい町が新町って言うでしょ。三日町、八日町っていうのは、市場が立った町。

私が小さい時は、マグロは気仙沼の駅の中で箱詰めしていた。構内には塩が真つ白い雪のようにいっぱい残っていた。それを見ながら学校に通っていた。駅からちよつと行ったらある赤坂橋の上から、駅から流れるような側溝があるんです。その側溝にアユが泳いでいるのが見えたんだよ。信じられないでしょ。自分の目で見ているし、自分で追いかけているし。ウナギもいたし。

高橋…八日町の方まで流れていたんですよね。今は暗渠になっているけれど。ウナギとかよくとれたって聞きますよね。

吉田…私も古町の小川でウナギをみたことがある。

村上…あそこは逆にね、駅から一ノ関方向に向かって流れている。駅途中で海に向かって流れるでしょう。八日町の市役所前の道路の下を通って流れていたんですよ。今でもあります。

村上…石垣まだあるよね。道路の下にね。

高橋…大堀銀座という地名があつてね、その堀川みたいなのがあつたんですよ。

水辺の変化、水辺との関わり方の変化

村上…川にはどこでもクレソンがいっぱいあつたね。

高橋…今はないですね。

村上…クレソンは大川から市内へ向かっていく両岸にあつた。クレソンの森みたいになって白い花が

咲いて、その上にこげ茶色のトンボ、川トンボが飛んでいたよね。

高橋…私が帰ってきた頃までは、階上の川にもありましたよ。

吉田…室根の川には、ちよつと前まで大量にあつたな。

村上…でもほとんどなくなつたよね。

山内…震災で駄目なつたのは、小泉の泉集落の真ん中の川。あそこクレソンだらけでしたよ。

吉田…結構、湧水とセツトになつていたんだよね。だからなくなつたんだよね。

村上…大川の八幡様には、ずっと子どもの頃から遊んでたけど、兩岸にびしつとあつたよ。ウチの田んぼとかにも、そこらにいっぱいあつた。

東京へ行つていた時、クレソンとわからなかつたんだよ。ただの雑草だと思つていたから。そして、一つで六〇〜七〇円で売っているんだよね。それで休みのとき、ウチに帰ってきて田んぼの手伝いをやっている、田んぼのそばの新堀という堀にいっぱいクレソンがあつてね。おばあちゃんたち三人が、そのクレソンを鎌で刈つて集めてんのさ。それを同時進行で車で運んで行くの。おばあちゃんたちに聞くとね、東京へ送っているって。

高橋…それでなくなつたのか？（笑）

村上…それもあるだろうけど、川が汚れたからだろうね。

吉田…昔は、水量が今よりもあつたし、川の石に泥が付いていなくて光つていたんですよ。今は沈殿物が増えて石が光っていないね。

村上…市役所の人たちが、浄化槽とかの成分や、家庭のトイレから流れてくるのもあるんだよって言ってたね。昔は苔が生えるような石はなかったね。

農薬が駄目なんだと思うよ。ウチで農薬を使つた時を覚えているよ。次の日に行つたらね、農薬を使つた田んぼの堰にウナギが数珠繋ぎで死んでいた。堰の横にもう一つある川のところでもウナギが全部死んでいた。その頃は規制が厳しくなくて、自分が農薬使つていなくても、みんなが使っているから、田んぼを介して水は流れてくるもんだからね。多分そういうのが蓄積されて、本当の日本の草つていうのはなくなつたんじゃないだろうか。

高橋…クレソンは最近まであつたのになんでなくなつたんだろうな。

村上…クレソンにはよくセキレイとか飛んできてくれてさ、本当に綺麗だったんだ。

吉田…私が若い頃の川には、淵があつたの。瀬とか淵という水溜りがあつて、川が蛇行していた。所々に深みがあつて、そこで水泳なんかやったわけ。今そういうところが



八瀬川の流れ（2017年6月）

ないよね。

山内…今は、ウンボをいれて、浚渫してしまうんですね。川底を定期的に平らにするんですね。村上…それもあるけれどね、部落の人たちが集団行動をしなくなっただよ。みんなで川掃除しなくなっただよ。昔は、部落の人とかいろんな人も雪掃きだろうが何だろうが、ウチのそこばかりじゃなくてあつちまでやつたりいろんなことやつたでしょ。それで川掃除すつぺと言うとみんな出てきたでしょ。川の草をみんなで刈っていたんですよ。今はそういう何でも協力してやるってことがないもんね。

最近では、草刈だつて何だつて市役所に電話してしまう。それは違うんじゃないかな、自分で刈る方がいいんじゃないかと思うんだけどな。だけど今は誰も刈らないし、川の中は雑草だらけになっちゃった。

吉田…今、ヨシが増えてきたね。ヨシは昔はなかった。昔は川の両岸にはヤナギがあつてね。ヤナギの根つこの下には必ず魚がいたもんだつたよな。

村上…川は崩れやすいからつて、蛇籠を置いて流れないようにしたのさ。時代が移つて、それよりもコンクリートの方がいいという話になつて。コンクリートでするようになったら、今度は魚が卵を産むところがなくなつたと言つて、次は脇に魚道作りが始まつたんですよ。それで魚道作りが始まつたんだけど、いろんな先生たちは魚道がいいと言つただけど、今思えば、昔のやり方が正解だったかもしれないと思うね。津波も同じで、コンクリートの上は水が流れるのは速いし、本当に全然違う行動をとっていたらと思つてしまうね。

山内…これだけ海も川も山もあるけれど、実は、その中へ入つていい人は限られていますよね。潮

だまりで貝をとつてもヘタすると捕まってしまう。例えば、子ども連れのお父さんが川に行つてちよつと釣りでもしようものなら、漁業権持ってますかつて子どもの前で言われてしまう状態ですよね。

高橋…潮干狩りでそういう経験あるね。

山内…だから、これだけ自然があるし、人と自然が近い距離で言うんだけれど、正直言うとそのれほど我々は関われないんですよ。そこをもう少し何とかしてほしいなと思います。

川なんていっぱいあるから、遊んだつていいじゃないですか。だけど川にヘタに近づいただけで怒られるし、鮭なんか上ってくる川だとよけい怒られるし。必然的に離れてしまいますよね、関係性が。目の前にあるんだけどね。

高橋…今は、山にも里にも子どもがいないよね。

村上…子どもの頃は、上がってくるサケを田んぼでとつてコラーつて怒られたけれど、それだけだったよね。



細い川と河川堤防（唐桑町、2021年9月）（提供：山内宏泰氏）

山内…ひと昔前だったら、浜の目の前で暮らしてる若者なんて、ウチから服脱ぎながら堤防まで行つてそこから飛び込んで岸壁にくつついてる貝つまんどつて、服拾いながら家に帰つて食つていましたよ。

吉田…今は、海岸で遊んでいる子どもたちが、岸壁についてるツブとかウニをたまにとつたつて駄目だからね。

山との関わり、山の変化

村上…私は、炭は冬にしか焼かない。夏場は木が成長して皮と木がくつついてないんですよ。この間に水が残っているから。ところが、秋口からは冬になるぞつて木が準備をするから、ぎゅつとくつつくんだね。

雪降つてから雪が解けるまでの間に炭を焼く。枯れた木は焼かないから、生の木を焼くんだけれど、木の周りに雪がいつぱい降っているから伐つても鮮度が落ちないんですよ。一週間くらい置いていても。ところが、もし夏に切つて、一週間置いたらあつという間に木が乾燥してしまつて駄目になる。冬場の木は密集してるし、夏の木はガサガサだから。夏の木は焼くと皮が剥がれて駄目な炭になる。でも冬場の炭は木と皮がくつついてるから剥がれないようにちゃんとぴしつとなる。

あともう一つ、雪の上だから山に傷をつけない。昔は雪の時に、周りの木に傷をつけないように、木の側を馬ソリで走るときには、山になるべく傷をつけない配慮や工夫はいつぱいあつたね。

村上…今、山に行つても、昔の山と同じような緑になった山だと思つたら大間違いで、もう昔の山とは全然違うんですよ。生えてる木も違うし、いろんなものが違う。例えば、昔は雪が降つて、簡単に

言うと、落ち葉がバーツて散るよね。落ち葉の上に雪が降ると、落ち葉は根雪でちゃんとした腐葉土になっていくんですよ。ところが、落ち葉が散って雪が降らないと、風に飛ばされてどつかに行ってしまう。それで山の頂上には無くなってしまふ。この辺の山もそうだけど、すぐ地べたが見えて昔のようなふかふかではなくなっちゃっていますね。

吉田…今の話から思い出すとね、昔は一二月になつて雪が降れば根雪になるのに、今は寒くなつても降らなくなつたもんね。冬休みなるとスキーできたんだもんね。今は雪の量がないから、雪は浅いね。寒さはそんなに基本的には変わらないと思うんだけど、その季節に雪が降なくなつたよね。

これからの人と里山・里海との関わり

深町…気仙沼の自然、そして人々の自然との関わりは今日までに大きく変化してきたことを伺いました。これから、身近にある里山・里海とどのような関わっていくと良いでしょうか。



里山の風景（気仙沼市切通、2018年9月）

村上…気仙沼の自然の活かし方というので思うのはね。今まで父ちゃんみたいに船乗りになるな、百姓にはなるなっていう学校入れてただけれど、これからは教育が全く変わってくるのではないかなと思うんですよ。

今までみたいに大学に行くんじゃないくて、若い人たちが山や里に行くようになって、自分の頭じゃなくて自分で汗流して働いたときの喜びっていうのを、その生きる喜びっていう体験を重ねていかないと駄目なんじゃないかなって。自分たちの幸せ感とか、それを少しずつ変えていくと、山のことも海のことも見方が変わってくるんじゃないかな。

そして今こういう時代で世の中が人工知能とかがいっぱいになってきているんだけど、人間も動物だから、片方にそういうように進んでるときに動物的感觉で、作用と反作用みたいなもんで片方へ向かう反応が生まれてくると思うんだよ。その反応が結構出始めているんじゃないかなと思う時があるんですよ、すごく。



八瀬・森の救援隊のメンバー（右から2人目が吉田さん）

だから、今まで戦後復興から、こういうふうにきた日本の教育だけど、その教育を自然と共生して、自然から物を取って食べてそれが喜びなんだっていうことが入れば、お金をいっぱいもらったことがすごいとかじゃなくて、その喜びを感じる教育を変えれば、子どもたちの歩ける道が変わるんじゃないかなと思う時がある。

子どもたちをバランスよく育てていくために、一足す一を教える前、学校に行く前の時点で山や海に触れたり、あらゆるものに触れた方がいいんじゃないかなと思う。いろんな仕事に携わってみるとか。

山内…例えば夏休みの二週間くらい遊びながら山学校をやるような、そういう活動もいいですよ。個人所有のちよつとした小さい山とか、気仙沼市内全域の放置されている木々。特にスギの木などを一回整理して伐採するだけでも、オーシャンビューの絶景ポイントって無数に生まれるんじゃないかと。それだけでも観光資源になると思うんです。でもそこで一番ネックになるのが、震災の後でも問題になった、山の地権者が何処に行ったかわからないという問題ですよ。

高橋…役所でやっているんだよね。結構時間かかるっていうけどもね。

山内…その問題を解決していかないと、多分何もできないですよ。ニュージーランドに行ったときですが、向こうはフィヨルド地形なので、平野部が1kmも行かないで、高さだけ一気に何百m上がるような山がいっぱいあるんですよ。麓ではゴルフをやつて、山の上でスキーができるぐらいです。その急斜面を利用して、幅2mほどの道を作つて、リュージュという車輪が付いた台車に乗つて、大人から子どもまでみんながキャーキャー言いながら山を下っていくんですよ。ゴンドラリフトにその台車を引つけてまた山上まで行つて。これニュージーランドでものすごく人気ですね。

気仙沼だったらどこだってできるんじゃないかと思つたんですね。海が見える、木漏れ日がさす山

の中をキャーキャー言いながら、ワーツと滑って下まで行くと、リフトで上まで上がってみたいな。そういうのを視察で見に行っても、なんでやらないかって言う山と山の地権者の問題って話しになってしまふんです。しまなみ海道じゃないですけど、これだけのロケーションがあるから、自転車で林道自転車ツーリング的なものもできるはずだし。もったいないと思う。

吉田…山の所有者が分かんないのは、田畑は相続の時に登記するんだけど、山は手をつけないで何代も前からそのままだからなんだよね。

高橋…震災の時にあれだけ何もかもなくなった。その中で復興計画に携わって、新しいまちの再生をエネルギーから考えるという話があつて、風力発電や太陽光発電というアイデアが出た時に、リアスの地形に合った発電をした方がいいんじゃないかと思つて、そこに加わっていくことにしたんです。二〇一二年に気仙沼地域エネルギー開発株式会社を設立し、気仙沼地域の間伐材のみを燃料とする小規模木質バイオマス熱電供給システム「リアスの森バイオマスパワープラント」を市内に設置、創業を開始しました。

木質バイオマスエネルギーは、やればやるほど難しいし、なんか変な闘志が湧いてきてですね、日本でも成功してないとなつた時にいろんな人が応援に来てくれた。日本の山々みんなの問題なんですね。何か解決の糸口を見つけることができれば、ボランティアに来てくれた人たちへの恩返しになるんじゃないかと思つて、むぎになってやつてしまつて今に至ります。なかなか日本国内で成功しなかった事業でしたが、たくさんの方「地域通貨リネリア」やバイオマス事業などに関わっていただき、山の恩恵をいろいろ教えてくれたりして、ここまで来れました。

日本で間違いなく初めてで、この地域からちゃんと木材を出して、地域の人たちで動かせた発電なんですけれど、残念ながらこの収支は非常に厳しい。これを国内に普及させて初めて恩返しになるのだらうなというふうに思うのですけれども。何とか継続することはできるんですけれど、やっぱり儲かるなと思っていないとなかなか普及していかないし、トーンダウンしていきますね。その中で、今度SDGsの取り組みが始まって、追い風が吹いてきたので、簡単に諦めたくないですね。

今、日本の山の価値が下がってしまっているけれど、山を生かすことや一次産業を生かすことによって、国力が増すこともあるんじゃないかと思う。それは、持続可能な社会に通じることなので、せっかく苦勞して立ち上げたので、ここから何か日本に一石を投じるところまで繋げたいと思います。

震災そして震災復興を振り返って

深町：二〇一一年の震災やそれ以降の震災復興を



リアスの森バイオマスパワープラント

振り返り、今、思うことをお話しいただけますか。

吉田…仙台から来た方から聞いた話ですけど。津波の逃げ方は、「ここまで津波が来たら、次の波ではあそこまで逃げられる。もつと大きな波が来たらもつと向こうまで逃げられると言つてね。どこまでも逃げられる場所が、本当の逃げられる場所なんだ」って話でね。高い場所に上がるだけでは逃げたんじやないからねつて。水が周りからきたら終わりだからね。万が一火事になったりして火があがったら、高いところに火が入ったりしたら逃げられないんだよつて。だから逃げるといふことの原点はね、一から二、二から三から四と、次々に逃げられる場所が一番の避難地だって話を聞きました。

山内…リアス地形は津波が来ると最悪な地形だと聞くけれども、要するに山からいきなり海になりますよね。V字の谷になっていて、川は津波が来れば、必ず水深が上がる。昔のままのり



リアス海岸（唐桑町只越、2017年6月）

アス地形だったら、陸地が全部山だから無事に避難できたけれど、主に戦後に広大な平地の埋立地をつくったことで、すぐ逃げたとしても山までは行けなくなってしまった。南気仙沼地区から山まで逃げるのはとても大変なんです。曙橋を渡って、赤岩港のあたりから上に上がった人は良かったんですけれど、防災センターの方に行った人は被災してしまっただ。避難ビルへ逃げても燃えてしまうし、二次避難ができないし。元々のリアス地形のままだったら、逃げられたんじゃないかって思います。

村上…高台の津波が来ないところに縄文の文化があったんだよね。

山内…今度、鹿折地区の造船所があったあたりに漁船用の岸壁を造るという話があります。そこは内湾で唯一浅瀬が残っているところなんです。それがまた全部掘られてしまうと、たぶん内湾の状況がさらに変わるのではないかと思います。

村上…傾斜になっていて、船揚げとかによかったのね。

山内…元々造船所の歴史が古く、あまり海底を掘る必要がなかったんですね。船を通すところ以外は。だけど今回漁港にすることで、みんな掘ってしまうと、また環境が変わるなど。

村上…こつち（汽船発着場）の方になんで漁船が泊まって、あつち（気仙沼湾東側）に漁船が泊まらなかったのかというのは、あつちはね西風が強いからなんですよ。船を出し入れするときに風上に向けるのは大変なんだよ。浅瀬もあるしね。こつちの方はどつちかすると西風を呼べるようになってるからね。

山内…確かにあつちは風裏になっていますね。

高橋…せっかく大島に橋が架かったんだから、内湾に造らなくても、もう少し遠くで船を泊めてもいい

いのね。

村上…あそこの人たちは牡蠣とか帆立なんかを剥いた殻を自分の家の周りに埋めるんだよ。それで埋めて埋めて、自分の敷地を大きくした家がいっぱいあるんだよ。

山内…見たことがありますね。

村上…あるでしょ。昔はどこでもやっていたんだよ。そこに杭を打って、またそこに埋めて、また杭を打って、そうやって敷地を広くしていたんだ。

山内…リアス・アーク美術館では、一昨年調査をして、去年の夏に「東日本大震災発生一〇年特別企画展」をやる予定でした。コロナ禍の影響により一年延期しました。状況は変わらないのですが今年やらないと一〇年というメモリアル期間が終わってしまうので、なんとか二月五日〜三月二日まで開催します。「あの時、現在　そしてこれから」というタイトルです。

美術館というところは災害専門研究機関ではありませんので、いわゆる学術的にはほぼ削除されてしまう主観とか、個人の思いとか、そういうところに蓋をしないで、むしろそういう蓋をとっぱらっていくために何をするべきかを、常にウチでは考えています。

美術館というのは、極論してしまえば、表現をする、表現者あるいは表現されたもの、あるいは表現しようと思うものたちが集う場所であればいいわけなので、あれから一〇年経った状況の中でみなさんがこの一〇年をどう思っているのかっていうことを表したいという考えです。

どうしても世の中がステレオタイプに筋道を作ってしまう、特に被災地ではないところの人たちが復興万歳みたいに言ってしまう。被災地で実際に被災して被災地に生きている人たちのことを

言わせてもらえば、別にそんなことなく、私たちにとってはむしろこういう問題、ああいうことの方が重大なことなだけだねっていうようなこととはいっぱいある。だからウチの場合はステレオタイプの復興一〇年ではなくて、公の施設がこんなことやっちゃっていいのかなってどこかで思いつつも、復興事業ってなんかみんな正しいことやってみたいに言っているけど、そんなことないんじゃないの？というのを問うています。

今回テーマにしているのは、この一〇年で激変した風景です。果たしてそれが望んだことなのか、あるいは結果的にそうなってしまっただけじゃないのかっていう疑念があって、もしこう振り分けをしていたら、結構な確率で望んだわけじゃないけれどこうなったんだよねっていう風景の変化の方が多分多いんですよ。

例えば、そこにでかい橋（気仙沼湾横断橋）が架かっています。個人的な感覚としては、三陸の空を飛んでいる感じがする。橋ができたことによっ



東日本大震災発生10年特別企画展の展示（提供：山内宏泰氏）

て気仙沼の何か象徴的な風景が変わってしまった。昔は安波山の上からこの内湾を見るのが気仙沼、「ザ・気仙沼」だったのですが。

最近、市民写真コンクールで目にする写真、地域の人たちがこれぞと思つて撮つた気仙沼「ザ・気仙沼」は、八割ほどは橋です。内湾の気仙沼、愛称「かなえおおはし」と、その向こうに大島大橋がちょうど重なつて見える写真が多いです。やっぱり復興の象徴みたいに言われちゃうことと、あとは、派手だし綺麗だしみたいな。

島と陸続きになつたつていうこと。この絶対的な環境の変化は、島の文化をこれから先相当変えていくと思うし、実を言うと唐桑や小原木あたりまで、気仙沼中央ＩＣから一〇分ほどで移動できるようになりました。また気仙沼中央ＩＣから三陸道で仙台に行くと二時間、石巻へは一時間です。大島大橋ができたことによつて、我々が得たものは確かにあるかもしれないし、他所から人も来るかもしれないけれど、むしろ出ていく



気仙沼市内。空を横切る気仙沼湾横断橋（2021年8月）（提供：山内宏泰氏）

人が多くなるのではないかと考えます。

また、三陸道を通すために多くの山が切り崩され、切り通しが無数にできました。どれだけの動物が住み家を追われたのかということも考えられ、そういうこと、一個一個の変化を大きく感じます。

私は市内の公営住宅最上階まで行つて、写真を撮つて歩いていきます。これはそこで暮らしている人たちがどんな風景を見ているのかっていうことを知りたいからです。例えば南気仙沼小学校跡の南郷住宅の最上階から気仙沼大川を見下ろすと、大蛇のような河川堤防の上に橋が一本、二本、三本、四本、五本と連なっています。また目の前の南気仙沼地区はまだほぼ更地です。その光景には悲しいため息が出ますが、あそこにまた家が建つていいんだろうかと複雑な気持ちになります。

風景が変わるっていうことは文化が変わっていきることの象徴だと思うので、これから生まれてくる人は、我々が知っている気仙沼と同じイメー



南郷住宅最上階から望む気仙沼大川（2021年8月）（提供：山内宏泰氏）

ジを持つことができるのかとても考えさせられます。この一〇年の中でここまでの変化が起きているってことが、どれだけ世界で共有されているのかと。

決して復旧復興事業というものを批判しようと思っているわけじゃないんです。ただ、何かうやむやのうちに、それがまるで正解だったかのようになっているのかなと。自分たちが思い描いたものと違う部分がいっぱいあると、みんなが口を開けば言っているのに、それが大衆の声として上がってくることであんまりないので、それをオープンな場所で一度考え、共有する。それが今回の展覧会の目的です。

コロナ禍がなければ、世界中の人に注目してもらえるタイミングで共有したかったのですけれど、それができなかったのはとても残念です。ですが、この状況の中でできることをやろうと思っ



気仙沼市朝日町の TP + 7.2m の防潮堤（2021 年 8 月）（提供：山内宏泰氏）

大切にしたいこと、大切にしたい風景

深町…最後に、これからに向けて大切にしたいこと、大切にしたい風景について教えてください。

村上…これから大切にしたいことは、若い人たちやお客さんと話し合うことかな。毎日同じことを言うかもしれないけれども、昔の話を伝えることが大切に思う。気仙沼でもクレソンがいっぱいあったりさ、水の透明度が変わったり、それでこういうことがあったんだよって話が大切だと思う。そして、お酒飲んだりするとみんな上下関係なくして話ができるし。若いやつにこいつ面白いな、すごいよっていうやついっぱいいますよ。でも何にもわからないやつもいる。「え！こんなこともわかんないのか」ってやつもいっぱいいます。

もう一つは体験のこと。やつぱり三歳なら三歳で身につけること、四歳なら四歳で身につけること、ある程度あるんじゃないかなと。今の日本では、学校に上がる前までに得られるはずの人間形成が失われているんじゃないかなと最近すごく思うときがある。塾や習い事にいっぱい行つて勉強したり、頭を良くするのもかもしれないけれど、基本的な人間のバランスがちよつと違うんじゃないのかなって。もう少し何かに触れたり、いろんなことをしたときに養われる優しさや思いやりや、いろんなことがあるんじゃないかなって。それが大切じゃないかなとは思いますが。本当に。

吉田…今思うことは、高橋社長の一生懸命バイオマス発電をやるっていう話を聞いて、自分は夢をどれだけ持つているのかを考えるね。最近体力が落ちてきているのを感じて、これからどれだけ体が動くのかなって。動けなくなつたときに、将来をどのようにしたいと人に伝えるのか。自分もそろそろどこで身を引くのかを考えます。やつぱ自分が動けないと、口だけでは駄目なんじゃないかなと思いますよね。

自分の気力と体力のバランスね。これで終わりかと思うと寂しいし、これ以上やれていうのも苦しい。夢を持つていいのか、夢に挑戦すべきか。八瀬・森の救援隊で山の手入れをして高橋社長の事業にもう少し協力したい気持ちもあるし。

山内…美術を教えている立場として、風景画を描くための写真を撮ってきてと課題を出すんですね。風景の定義っていうのは人それぞれによつて相当違つていうのがわかつてくるんですね。我々が風景っていう場合は、例えば画角の中に、どんとサンマ船が一隻いる絵を描くと、人はそれをサンマ船の絵だと思えますよね。だけど画角の中に港があつてそこにサンマ船があるような距離感だと、それは港の風景になります。サンマ船がいる港の風景になります。この距離の取り方によつて、それは風景なのか物なのかが変わつてくるんですね。そういう意味で言うと、風景つて限定するよりもしかしたら何かもつと物だったり、光景、情景も全部含めて考えていただいた方がいいのかな。

高橋…残しておきたい風景つてそういう角度でみて言われたら、人間関係の良さを残してほしいとか思うよね。一番ね。あるいは気仙沼ばかりじゃなくて、東北人のいいところとかね、優しさやいろんなところ。まだ日本のいいところが東北に結構残つているんじゃないかなあと思うんです。東北を日本でちよつと見直してほしいと思う。心や人情とかいろんなのをひつくるめてね。そういう中で東北をあんまりいじらないでほしいつてわけじゃないんだけど、今までのいじり方と同じことをしちゃうけないよなと自分では思つています。

吉田…さっきの山内さんの話から言えば、里山があつて、川が流れている風景。川と水、清流と山の風景。そういう風景はいいなと思うね。



1960年ころ、安波山より気仙沼湾を望む（提供：山内宏泰氏）

高橋…昔の古き良き時代の話、僕らの時代はそれがちょっとまだ名残があって、ウチの子どもたちはやつぱり、さつき山内くんが言ったように、潮干狩り行っても怒られたりね、簡単にできない時代だったけれど、例えば大川の淵をシラウオが遡上していくようなのはまだあったんですよね。そこでシラウオをとって、こうやって食べるんだぞって教えてやつたりはしたんですけども、今以上に元に戻れないんでしょうけども、でも何かやることによってウナギが帰ってくるとか、メダカが帰ってくるとか多分あると思うんでね。

東北の良さっていうものを、魚がいっぱいあがつて、おすそ分けの文化があったり、その自然の良いところも少しでも次の世代に残せたらいいなと思います。

そのために山を豊かにしたいですね。村上さんや吉田さんの話を聞いていても楽しそうですね。すぐく自慢げに話すしね。それが東北のいいところだと思います。

山内…風景って例えば絵に描いたりするときに、海だけって絵にならないんですよ。山だけ、川だけでも絵になら

ないんですよ。そこに例えば掘つ立て小屋が一戸あるとか、そこに船が一艘浮かんでいるとか、そこに草がぼうぼう生えた道が一本すーと伸びるとか。田植えが終わったばかりの整然と並ぶ稲穂がみえるとか。何かその人工的なものが一個入ってこないと、風景を描こうと思うとなかなか絵にならないんですよ。

みんなが共有できる風景って、やつぱりみんなが知っている風景じゃなきゃいけない、その知っている風景っていうものが、今はなくなっているのではないのでしょうか。知っていた風景がなくなって知らない風景が増えて、これはまた知っている風景になっていくんですよ。

私が子どもの頃は、ガリバリウム系の青い塗装をかけたトタンで、あらゆるものが囲われた時代なんです。それをみて子ども時代になんて醜悪な風景だろうと嫌だったんです。それがですね、震災の直前ぐらいから、



唐桑町鮪立の伝統的建造物（2017年1月）

子どもの頃にみってから二〇年以上、三〇年近く経ったそのブルーのトタンがですね、サビが浮いてちよつと緑色がかри、そこに草が覆いかぶさり、泥汚れがつき、部分的に継ぎ接ぎをし、どンドン自然に吸収されていつていたんですね。そこに独特の美しさがあつたんですよ。

私があの津波被災で一番寂しく思ったのは、そういう時間の、自然と人間の掛け合いの中の時間の蓄積でしか生み出せない風景の中の美しさ全部なくなっちゃった。全部真新しいものだけになつて、自然と人工が全く線引きされてしまったというところなんです。

村上…そういえば津波で流されたときに一年経つか経たないうちに、津波を受けて流された地面に雑草がバツと青くなつたよね。あれをみたときに、人間がいろんなその建物を新しく建てたり造るよりも、地球の治癒力の方が早いわって思つたんですよ。地球が自分の傷ついたところをそうやって自分の草や木で修復していく、その治癒力の



巨大な防潮堤が遮る小さな浜（唐桑町、2021年9月）（提供：山内宏泰氏）

方が早いんだって。あれをみてね、人間は救われるんじゃないかと思った。

山内…そうでしたね。本当ですよ。そのままにしていたら昔に戻ったかもしれませんね。

深町…気仙沼に馴染んでいく風景が引き継がれ、そして新たに生まれていくことを切に願いながら、これで終わりにしたいと思います。貴重な時間をとってお話いただき本当にありがとうございます。

(二〇二二年一月二五日 福よしにて 聞き手…深町加津枝、吉田丈人、小沢晴司)

「座談会参加者プロフィール」

●吉田勝彦(よしだ かつひこ)

所属…八瀬・森の救援隊(事務局長) および八瀬・森の学校(事務局長)

主な活動…二〇〇七年に気仙沼市八瀬に里山体験や教育旅行の民泊受入をする「八瀬・森の学校」を設立して事務局長となる。団体では蕎麦の栽培と蕎麦打ち体験や月一回程度の八瀬・学校そばを営業する。また、震災後設立された気仙沼地域エネルギーのバイオマス発電に協力するため、二〇一四年に間伐材の原料供出する自伐林家の集まり「八瀬・森の救援隊」の設立に参画し、事務局長となる。

●村上健一(むらかみ けんいち)

所属…魚料理専門店「福よし」

専門分野…漁場料理

主な活動…昭和五三年から「福よし」の親方として素材の特徴を生かした料理を提供。気仙沼で出船を見送る人々の姿を目にした時、「福よし」という名前をふと思い付いた。自らも現場に出かけて材料を調達し、山や川、海

の風景を想像しながら料理をしている。「美味しんぼ」(八六巻)では、世界一の焼き魚と評されている。

●高橋正樹(たかはし まさき)

所属…株式会社 気仙沼商会

専門分野…商学

主な活動…二〇一一年の震災後、気仙沼市震災復興市民委員会プロジェクトのリーダーとして、復興に向けた提言をまとめた。二〇一二年には、豊かな森林を活用した再生可能なエネルギーをつくることで街づくりを行うため、気仙沼地域エネルギー開発株式会社を設立する。地域全体のエネルギー自給を実現するために、木質バイオマスプラントを稼働させ、NPO法人リアスの森応援隊の活動を広げるなど、地域内循環を目指した新しい取り組みを進めている。

●山内宏泰(やまうち ひろやす)

所属…リアス・アーク美術館

専門分野…現代美術、美術教育、災害伝承

研究テーマ…災害とアート、人と自然の関わり

主な活動…美術館学芸員としての活動を通し、地域文化の研究並びにまちづくりの実践を重ねる。アーテイストとして彫刻、絵画、デザイン、舞台美術、衣装制作など多様な造形活動を行う。東日本大震災で自宅を失うなどの被災を経験。二〇一三年にリアス・アーク美術館『東日本大震災の記録と津波の災害史』常設展示を企画設置。(現在同美術館館長)

主な著書…(論文) 山内宏泰「博物館展示における震災資料展示の課題と可能性」『国立歴史民俗博物館研究報告 二一四号』(二〇一九年三月一五日・国立歴史民俗博物館発行)

災害に備えるとはどういうことか？

元南三陸町職員が見た震災復興の現実

一般社団法人サステイナビリティセンター代表理事 太齋 彰浩

はじめに

東日本大震災は東北太平洋沿岸の市町村に甚大な被害をもたらした。宮城県南三陸町もそのうちの一つである。被災者救援を第一とした急性期にはじまり、復旧・復興へ向けた多くの労力・資金・時間が費やされてきた。震災から一〇年が経過し、各自自治体の災害復旧・復興事業は終息しつつある。被災地で暮らす筆者としては、あの規模の災害からよくここまで戻ってきた、という思いがあるも、生態学を学んだ者として、海岸線に余すところなくめぐらされた長大な防潮堤や、多自然型の川づくりなど一顧だにしないような河川堤が目に入る度に、ため息がでる日々である。

当時、行政に身を置き、町の水産業復興に携わっていたので、なおさらなのかも知れない。「もう少しやれることがあったのでは？」という自責の念が頭をよぎることも度々あるが、できてしまったものは仕方が無い。前に進むための知恵や、今後同じようなことが起こった場合に備えて、どんな準備をすべきか？を考える方が余程建設的である、と自分を納得させるほかない。

この度、「被災地の知恵を紹介せよ」というお題をいただいたので、今後の災害復旧が少しでもよい方向に進むためのヒントになればという願いを込め、復興事業の渦中で働いていた当時感じたことや、震災後に生まれた南三陸の誇る住民活動についてご紹介したい。

震災当時

まず、震災当時の南三陸町の被災規模であるが、役場を含む中心市街地の実に七五%が津波により消失、死者・行方不明者八三一名、避難者は人口一万七、六〇〇名のうちの九、七五三人にのぼるなど、“壊滅的”だったといつてよい。町行政の中核を担っていた職員も多数亡くなり、本当の意味での行政経験の無かった私にまで、水産業振興係長の辞令を出さざるを得なかったことから、その逼迫ぶりがうかがい知れる。

市町村は被災した住民の方々と直に関わる立場にあり、あまりのタスクの多さ・困難さに、当時どうやって対処していたのか、正直記憶がない。被災の程度の差こそあれ、どこの自治体も混乱の中で手探りで、懸命に対応していたのではないかと思う。

復旧・復興事業への入り口

それに対して、国からは人員の派遣や新たな支援メニューなど、これまでに無いほど手厚い支援を行っていた。そのこと自体はとて有り難く、復興にかかる税負担も含めて、国民全体で支えていただいたということに関して感謝を忘れたことはない。

その一方で、誤解を恐れずにいえば、復旧・復興に係るお金の使い方について、自治体の自由度は

ほとんど無かったといつて良い。地方交付税などが収入のほとんどを占め、自主財源の乏しい市町村にとつて、いかに国のメニューにそつた申請書を書けるかこそが、今も昔も事業原資獲得のポイントである。市町村としてあまりやりたくないようなことでも、それを盛り込まないとやりたい事業が採択されないということになれば、その内容を盛り込まざるを得ないことだつてある。

復旧・復興事業も、こうした枠組みの中で行わざるを得なかった。また市町村の人員に対する仕事量が膨大すぎて、本来市町村がやるべき事業を、県や国に代わりをお願いするような事態にもなつていた。

海岸防潮堤の計画

そんな中で出てきたのが「数十年から百数十年に一度程度発生する比較的頻度の高い津波に対して防護する海岸防潮堤の整備」であつた。いわゆるＬ１津波に対して壊れない防潮堤を被災地に張り巡らすという計画である。南三陸町は宮城県より七・五mや八・四mという設計高が示された。

いつだったかはつきりと憶えてはいないが、県の担当職員が防潮堤からつながる河口部の設計において、水門をつくるか、両岸を嵩上げたバック堤整備にするかという試算を持つて町長を訪れた際、そこに私も同席したことがあつた。

バック堤の方が安上がりなので、こちらでやりたいという説明であつたと記憶しているが、そもそも防潮堤復旧は「嵩上げた整備が前提」で話が進められていたし、バック堤にした場合の影響などを細かく調べる余裕もない中で同意を迫られるという状況だった。高い防潮堤やバック堤には広い土地が必要となり、海が見えなくなるなど、少し考えただけでも懸念事項はいくつも出てくる。

私自身は多様な生物の住処となつてゐる渚が埋め立てられることが心配であつたし、陸と海のつながりが分断された時、生態系にどんな影響が出るのか、調べる必要があると思つた。しかしながら、その時点で何の科学的裏付けとなるデータも持ち合わせておらず、復興の歩みを止めることはできない、という強迫観念にも似た思いの中で、国や県の意向を跳ね返すことはできなかった。そこにかかる力も時間もなかったというのが正直なところである。おそらく他の市町村でも同様の光景が見られたであらう。

止まらない巨大防潮堤の整備

歴史に「もしも」という話はナンセンスであるが、もしこの時に、「生態学的な見地から見た巨大防潮堤整備による損失額」のデータが手元にあつたなら、もつと違う整備方針が示されたのかも知れない。

この防潮堤整備方針を決めた国の会議に、自然資本の損失額を具体的に語れる委員がいれば、自治体が地域の生態系サービスの重要性を語れる具体的な情報を持っていれば、あるいは自然資本に配慮した設計・施行が世の中の当たり前になっていれば、もう少し住民も納得のいくやり方ができたのかも知れない。

結局、総延長四〇〇km、総事業費一兆円とも言われる巨大防潮堤の復旧工事が進むこととなつた。しかも復旧名目なので環境アセスメントは実施しないという。

コンクリートの堤体の寿命は五〇～六〇年といわれているので、次に大きな津波がやってくる時には本来の機能が發揮できるのかも不明であるし、そもそも南三陸町は条例により、浸水域の大部分

に人が住むことはできないので、防潮堤で一体何を守るのか？と疑問に思う住民も多い。そんな中で、防潮堤整備が進んでしまったのは、つまるところ「準備」の差なのだと思う。

土木・建設の分野では、ことあれば自分たちの考える最良のプランが通るよう準備してきたのだ。それに対して、生態学分野は知見を政策に組み込めるだけの準備ができていなかった。ただそれだけのことなのだろう。

ここで誰かを悪者にするつもりはない。土木・建設分野の方々も社会を良くしたいと思って活動している方がほとんどであろう。生態学の分野でちよつとだけ土木分野に寄り添ったり、経済的な評価に意識を向けることができれば、まったく違った形が生まれたかも知れない。そんなことを、自戒を込めて記しておかねば、と思った次第である。

この教訓を次に生かすために、何が必要か？を考えるキッカケにして頂くことが本稿の一番の目的である。

復興予算のあり方

さて、話は前段の復興予算のあり方の問題に戻るが、これは、地域の中で資本をどのように見だし、使っていくかという意思決定の問題でもある。

もしも、自治体に配分される復興予算の金額だけが決まっていって、その使い道については、自治体が自由に決めてよい、となっていたらどうだったであろうか。その時にどのくらいの自治体が巨大大防潮堤建設を選んだだろうか。

南三陸のように、低地に人が住めない状況で、維持費だけかかり続けるような防潮堤建設の優先度

が高くなることは、いくら何でも考えづらい。もつと地域が豊かになることに投資する、という意思決定をしたのではないだろうか。もし巨大防潮堤建設を選んだということになれば、よりうまいやり方をした近隣市町村との競争で早晚淘汰されることになったであろう。

地方自治体が国から信頼されておらず、自治がなかなか進まないが、国がメニューを示すやり方にはもう限界が来ているように思う。本当の意味で市町村に自由な予算を与え、意思決定をまかせる方式を主流化していく必要がある。

たとえ国からの見た目の配分額が減ったとしても、その方が地域が豊かになることにつながるのとは間違いない。なぜなら、地域で暮らす人の方が、より地域の課題を理解しているし、限られた資金を何に使えば課題解決につながるかを、ゼロベースで真剣に考えるようになるはずであるから。近年盛んになったクラウドファンディングやふるさと納税の手法は、こうした動きを先導するものとして注目している。

仮設市場の設置

自身の経験からいえば、自由度の高い使い方を許された民間の助成金や寄付金がとても有り難かった。

南三陸町は、公益財団法人ヤマト福祉財団の「東日本大震災生活・産業基盤復興再生募金」に応募し、観光も含む海業の再生に対して三億四七〇〇万円もの支援をいただいた。当時、魚市場の復旧が急務であったが、本来の市場用地は岸壁の復旧に時間がかかり、すぐには復旧できそうになかったの

で、当面仮設の市場を設置して営業する方針を打ち出した。ところが当初は国に仮設市場設置への支

援メニューがなく、一億円はかかると見込まれた設置費用の工面が課題となった。わらにもすがる思いで助成金に応募したところ、採用していただき、市場の他にもカキ処理場やワカメ倉庫などの様々な漁業施設や、体験学習で使う機材の整備にあてることができた。その後に国でも仮設市場建設への支援メニューを整備していただいたが、スピード感を持って取り組むことができたのは、なによりも自由度の高い民間支援のおかげであった。

南三陸の仮設市場は、震災からわずか七カ月後には完成し、水産業関係者の目に希望の光をもたらしてくれた。仮設市場は本設市場が整備されるまでの五年間、町内の水産業を支え、市場としての役目を終えたいまでも、町のイベント会場として活用されている。

かもめの虹色会議

最後に、南三陸の住民活動で実現した防潮堤のセットバックのについて触れたい。震災後の市民



仮設市場の落成式

活動で特筆すべきは、かもめの虹色会議の存在である。

上山八幡宮の禰宜である工藤真弓さんが主宰を務めるこの会議の開催回数は、これまでに一〇〇回を超え、まちづくりに関わりたい住民が自由に議論できる場として、重要な役割を果たしてきた。

会議が立ち上がったきっかけは、真弓さんも参加するまちづくり協議会の公園部会（中心市街地だった場所につくる祈念公園の計画を、住民側で議論する場）で、八・七mの防潮堤計画が説明され、その計画に疑問を持った真弓さんが、私に勉強会の依頼をくれたことである。勉強会の場で、海と陸をつなぐ渚の重要性について話したところ、多くの住民に共有し、みんなで考えたいということになり、隔週で集まって防潮堤計画を含めた旧市街地のより良い復興の姿を話し合うこととなった。

この会議は参加するのに資格はいらない。上下関係もない。ただし、自分事として計画に加わる気持ちがあることが条件という、とてもフラットな場であった。多様な参加者が自由に議論を重ね、共通言語を獲得していくことにより、公的な位置づけのまちづくり協議会を補完する、非公式の作戦会議として機能するようになっていった。

より良い復興の姿を描く 松原海岸の存続へ

議論の中心となったのは、以前の防潮堤が津波で破壊された跡地に半自然海岸となり、アサリなどの生きものが棲みつき始めた松原海岸の存続であった。

このことにはいくつかの重要な意味があった。

一つは、住民が海と触れあえる貴重な場所を残すこと。松原海岸は潮干狩りもできた海岸であり、ずっと以前は松原の名のとりの砂州であった。それが震災により過去の記憶を呼び戻すかのような

海岸の姿となった。これを防潮堤の下に埋もれさせてしまうのは非常に残念であり、住民の親水空間として確保できないかという思いがあった。

二つめは、災害復旧で建物跡も撤去され、震災前のまちの記憶が失われていく中で、壊れた防潮堤を撤去せずそのままの形で残し、当時の姿を伝えていくという意味。これはまた、どんなに頑丈な構造物をつくっても、自然の力には勝てないという教訓を伝えることにもつながる。

三つめは、一と二を活用して学びのプログラムをつくり、積極的に人材育成と交流を図ってこういうことである。

長大で無味乾燥な防潮堤に埋もれてしまう空間を、少しでもセットバックして残すことで、まちの活力と学びにつなげていこうという、未来づくりの意思が詰まった計画は、まちづくり協議会を通じて提案された。むろん、計画変更は簡単ではなく、町や県に何度も跳ね返されたが、その都度何が問題なのかをかもめの虹色会議で詳細に検討し、譲歩するところは最大限譲歩しつつも、譲れない線は明確にしながら絵を描き直し、粘り強く提案し続けた。その結果、計画位置から数十メートルのセットバックが実現し、松原海岸は被災後の姿のまま保存されることとなった。

松原海岸は本当に猫の額の小さな海岸であり、現地は依然として防潮堤工事が続いているので、自由に入ることは難しい状況ではあるが、地元、志津川高等学校自然科学部の調査により、絶滅危惧種が複数種見つかるなど、生物多様性の高い場所として注目が集まっている。この先、南三陸が震災の経験を伝えていく中で、ますます大きな存在となっていくはずである。

防潮堤計画の変更を実現したかもめの虹色会議は、多様な人材が安心して意見交換できる場であり、住民が「行政と対等な議論」をするために必要な戦略を学ぶ場であったと言える。



防潮堤を前にかもめの虹色会議の活動に学ぶプログラム



防潮堤・河川堤とセットバックにより保全された松原海岸

その根底には、無用な対立を避け、復興に取り組む仲間としての共感を、どうしたら得られるかという深い思想が流れている。

なお、かもの虹色会議の活動については、『月刊社会教育二〇二一年七月号』で詳細に紹介されているので、興味ある方は参考にしていただきたい。

また、本稿では触れなかったが、震災後、町が民間事業者とともに練り上げた自然を生かしたまちづくり構想が、住民参加によって実現していった事例について、総合地球環境学研究所発行の『レジリエントな地域社会 vol.3』に寄稿させていただいた。地域で震災前から行われてきた地道な活動が、住民の自分事となることで具体的なまちづくりへとつながる様子を描いているので、こちらも是非ご覧いただきたい。

むすびにかえて

以上、南三陸におけるいくつかの事例を紹介させていただいたが、その中で得た教訓は、災害が起こってから準備したのでは間に合わないことがある、ということ。つまり普段から有事を意識して戦略的に備えていた者がことを有利に進められるという、ごく当たり前の話。

それから地域づくりは予算の多寡ではなく、現地の人間が危機感を持つていかに知恵を絞れるかが重要だということ。そして、その際には無用な対立を生まず、同じ方向を目指す者同士として一段高い視座を持てるとうまく行くことがあるということ。

こうしてみると、いずれもいにしえから教訓として伝えられてきたことばかりである。災害に対して、完璧な備えなどできる訳もないが、少なくとも地域住民が、地域の未来について普段から気軽に

話し合える関係性ができていることは、実は一番の備えなのだと実感している。普段使いの食品のローリングストックが災害対策になるように、地域の未来志向のコミュニケーション活性化が、災害への備えになるとの認識が広がることを祈っている。

「南三陸地域イヌワシ生息環境 再生プロジェクト」その後

南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト協議会 会長

南三陸ネイチャーセンター友の会 会長

鈴木 卓也

はじめに

二〇二〇年三月発行の『レジリエントな地域社会 Vol.3』に、「南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト」の取り組み」と題する一文を書かせていただきました。

私たちのプロジェクトの目的は、持続可能性が確保された地域林業の振興により、絶滅が危惧されるイヌワシの生息環境の再生保全を図ること、それによって多様性豊かな地域の山の環境を、あるいは山と人との多様で豊かな関係性を取り戻すことにあります。

プロジェクト発足に至る経緯と初期の取り組みについては前掲記事をお読みいただくとして、今回はその後の二年間の取り組みを報告させていただきます。

その後の活動と今後の予定

まずはプロジェクト。関係諸団体を繋ぐ「南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト協議会」（以下、「協議会」）が二〇二一年五月に発足、本格始動となりました。

同年六月には協議会メンバーも参加しての委員会形式で「イヌワシの棲む山」と題する絵本が刊行され、気仙沼市、登米市、石巻市、女川町及び南三陸町の三市二町（いわゆる南三陸地域）の小中学校及び公民館・図書館に地域資料・教材として寄贈させていただきました。

話が前後しますが、前掲小論で「調整が大詰め」と記した「南三陸地域森林整備促進協定」は、「南三陸地域のイヌワシ生息環境の再生を図ること」を目的に明記した形で、宮城北部森林管理署（国有林）と株式会社佐久（民有林）、登米市及び南三陸町（公有林）の四者により、二〇二〇年三月に締結されました。

林業者によるイヌワシ生息環境の再生に繋がる森林管理と対をなす、市民参加によって山の環境再生を担う「火防線トレイル」についても、新型コロナ下の間



南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト協議会・
設立総会の様子（2021年5月10日）

隙を縫って刈り払い作業が進んでおり、長期的な維持や保全、多面的な利活用に向けての協議が進んでいます。

なお、協議会発足二年目となる二〇二二年度は、イヌワシの餌刈り場となる開けた山の環境を確保するための行動計画を、具体的な数値目標も含めて作成し、実際の施業に落とし込んでいくためのガイドラインづくりに着手します。

また、そうした取り組みを広く発信するため、協議会独自のホームページの作成と、前述の絵本の第二刷も予定しています。

おわりに

国内林業が多少息を吹き返しつつあるとはいえ、急激な繁殖率の低下と個体数の減少に加え、大規模集約型再生可能エネルギー開発の波など、イヌワシを取り巻く状況は非常に厳しいものがあります。

森林国であるこの列島で、山の自然に手を加



パタゴニア日本支社はじめ有志の皆さんと実施した火防線トレイル刈り払い作業の集合写真（2021年12月12日）

え、持続可能な形で人々が利用し続けてきたからこそ、山と人との多様で豊かな関係性が育まれ、イヌワシをはじめとする「開けた山の環境」を住処とする生き物たちも暮らしてきました。そうした豊かさに価値を見出し、大切に育んでいく心を、この地域から発信して行きたいと思っています。

地域の小学校教員を務めるかたわら、日本で三例目、戦後では初となるイヌワシの繁殖巣を一九五五年に確認し、以後六五年に渡って日本のイヌワシ研究と保護とに邁進され、二〇二〇年六月に亡くなられた故・立花繁信先生の教え子のひとりとしての、それがささやかな務めであり恩返しであると考えています。

絵本『イヌワシの棲む山』

発行者…「イヌワシの棲む山」製作委員会

発刊日…二〇二二年六月二五日

体裁…B5変形・カラー・三四頁・FSC森林認証紙使用

【非売品】南三陸地域の小中学校を中心に配布

「イヌワシの棲む山」製作委員会

代表…佐藤太一（株式会社佐久・南三陸森林管理協議会）

文…鈴木卓也（南三陸ネイチャーセンター友の会）

作画…西澤真樹子（認定NPO法人大阪自然史センター）

編集…水谷典雄（Office WORDS）

協力…南三陸町・南三陸町教育委員会



絵本『イヌワシの棲む山』

●本書は非売品として二〇二二年六月に発行しましたが、残部僅少につき、二〇二二年六月に販売品として第二刷を発行いたします。

●売り上げは、発行元事務局である南三陸ネイチャーセンター友の会を通じて、南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト協議会の活動に活かされます。

●販売日や販売方法等につきましては、南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト協議会のホームページが未整備のため、南三陸ネイチャーセンター友の会のホームページで随時お知らせいたします。左記リンクよりご確認ください。

<https://m-inuwashi.jp/>

●なお、左記リンク先にてPDF版を掲載しておりますので、こちらでもご利用ください。

<http://yamasagozain.com/ehon.php>

●本書はバタゴニア環境助成金を得て作成されています。

2021年
6月25日
刊行!

出版のご案内

イヌワシの生態研究と保護に
生涯を捧げた研究者
故 立花繁信氏（元小学校教諭）を記念して

イヌワシの 棲む山

9歳の少年タックくんは
じいちゃんに連れられて
かつてイヌワシが棲んでいた山に登る。
「ここ、イヌワシがいる山だよな？」
「さよう、見られるかな？」
「隠れつつと眺めろな。」
「じいちゃんもずっと見てねえんだ。山のようすが
昔とすっかり変わってしまったからな」
「変わった？どんなふう？」
「昔話を聞くうちに、
タックくんは不思議な体験をする…」

移り変わってきた南三陸地域の自然の衰退（地図）、イヌワシ
関連年表、都立のナチュラリスト、現在の南三陸地域の林業、
立花繁信先生についてなど、地域学習に役立つ関連資料多数。

【発行】南三陸ネイチャー
センター友の会
【非売品】南三陸地域の中小
学校を中心に配布
【体裁】B5変型カラー
34ページ
FSC 森林認証紙使用

■南三陸ネイチャーセンター友の会とは？
2011年3月11日の東日本大震災で被災し、自然環境が壊れた地域
イヌワシの生息地である南三陸地域の復興と、自然環境の再生を
目指す南三陸ネイチャーセンター友の会の活動の一端、南三陸ネイチャー
センターの発展を支援するため、2012年に設立されました。
メンバーは地元の自然環境保全の志士や関係者、関係団体、市民団体、
観光関係者、学生など、地域内外の多様な関係者が参加しています。
自然環境の再生、持続可能な地域社会の構築を目的としています。
詳しくは当ホームページ（<http://m-inuwashi.jp/>）をご覧ください。

「イヌワシの棲む山」制作委員会

代表：佐藤太一（株式会社佐久・南三陸森林管理協議会）
文：鈴木卓也（南三陸ネイチャーセンター友の会）
作画：西澤真樹子（認定NPO法人大阪自然史センター）
編集：水谷典雄（Office WORDS）
協力：南三陸町・南三陸町教育委員会

○南三陸地域の中小学校、図書館を始めとする公共施設を中心に配布します。
地域学習などに活用していただける方など、入手をご希望の場合は
南三陸ネイチャーセンター友の会までご連絡ください。

南三陸ネイチャーセンター友の会
宮城県本吉郡南三陸町志津川字天王前 205-12
電話・FAX 0226-64-2037 info@m-inuwashi.jp

絵本『イヌワシの棲む山』発刊ご案内ポスター



絵本『イヌワシの棲む山』（一部引用掲載）

北上川のヨシで日本の文化を支える

～熊谷秋雄氏（有限会社熊谷産業社長）インタビューから

熊谷家の茅産業

祖父の時代から茅産業を始めました。川の漁もやっていたり、田んぼをやっていたり、半農半漁でした。そしてヨシを刈り取って、最初は土壁の小舞（こまい）の材料や茅葺きの屋根の材料として出荷する商売でした。大したボリュームじゃないけど、それを今会長である父が後を継いでやっていた。シジミ漁も田んぼもやっていたんですが、ウチの会長がだんだんヨシの事業の方にシフトしていった。その間に一緒にやっていた屋根屋さんと屋根の工事の仕事もするようになりました。会長も屋根の仕事覚えて、それを僕が引き継いだという形です。僕で三代目になります。

高度経済成長の時に、建物の様式が変わって、昭和から平成になる頃かな、私が一時海外にいて帰ってきた時に、地元で茅の需要がないのでやめようかなと親父と兄貴が話していた。話の流れで、私にはもうちよつと続けたらいいんじゃないかって言ったんです。私の小さい頃みたいに、ヨシ原がきれいに刈り取られていなかったんです。地元の茅葺きの民家も減って、建築様式も変わって断熱材を使うようになって、だんだん需要が減ってきました。土壁の小舞の材料だけが結構新潟県や長野県に出回っていったんです。

それでもやろうと思ったのは、みんなが辞めるから一軒ぐらい残ってでもいいんじゃないかという

ことです。同業者で青森の岩木川や、渡良瀬川遊水地に刈り取る人もいたし、中国から入ってこなくて、ヨシズの需要は結構あったんです。ウチの方でも多い時で七軒ぐらい携わった人がいて、私の小さい頃は三軒に減っちゃったんですよ。各集落に茅場があるんですよ。その三軒でうまく各集落で持っていたヨシ原の権利を買い取って、三軒で分けて、やれてたんですよ。それがだんだん需要と供給のバランスが崩れてきて、人がいなくなっただけで、逆にみんな全部やめていくから続けたらいいんじゃないかと。僕が親父と兄貴に話をして続けるようになったんです。震災前までは細々とやっていました。

かつての北上川での暮らし

川の漁をやった時に一番多かったのはシジミですね。あとはサケを捕ったり、春だったらマスを捕ったり、春先にシラウオかな。



北上川のヨシ原

基本となるのは春から秋にかけてのシジミ漁です。昭和五〇年代かな、河口堰ができたんですよ。昔の堰の時は上手く真水と海水が混ざって、シジミがちょうど繁殖しやすかった。河口堰できてから、ガラツと変わっちゃって、シジミ漁もだんだん芳しくなくなってきましたね。

震災による茅場の変化

津波で結構やられて、茅場は地盤沈下しました。高いところってみんな空洞になってるんですね。今刈り取りをしている茅場は、大須集落（おおす）と本地（ほんち）、あとは馬鞍（まぐら）。長尾は下流なので今は刈り入れできなくて放棄しています。震災の時、ここの中州にいたんですが、うまく揺れが収まってくれて逃げれたんですよ。会社にいたらみんな死んでました。ヨシがダメで、あとこっちはみんな流木ですね。この松原海



熊谷秋雄さん

岸の向こうがみんな流れ込んだりして。震災の次の年から清掃したりしたんで、少しずつはこの上流からヨシが採れるようになってきましたね。少しずつ少しずつです。

今でもこの辺はダメですね。地盤沈下したりしてね。あとはこの辺は堰ですかね。工事で昔みたいに簡単に下に行けなくなっちゃったんですね。トラックで行くにしてもです。船着き場もいまだに壊れたままなんで。人がいれば要望して直してくれるけど、人がみんな危険区域で高台に移りました。この辺は誰も住めない土地になりました。

現在の茅産業

震災とは関係なく、ヨシ原に興味を示す集落も少なくなってきました。震災前から。竹林とか杉山と同じで、物に対して価値がないんですよ。僕らも手伝ってくれる人たちに賃金を払うのがやっとで、余裕を持って各集落に昔のように高額を払えないですよ。人件費が上がってきて、物がずつと抑えられてきた時代だったんで。毎年継続している権利はもうなくなりましたよね。ただ揉めないように、地元の石巻市北上総合支所を通じて国交省の北上川下流河川事務所に書類を出すんですが、そこで調整するのが総合支所だったんです。昔はその支所が各自治会や契約会からお願いされて、支所



熊谷貞好会長（提供：堀内孝氏）

で書類を作ってくれたんです。合併の後、役所がうまく地域と交わらなくなっちゃったね。今は資料を作るのが大変です。

今実際に刈り取りをしているのはほぼウチだけです。ウチ以外にこの辺でヨシを葺ける人はいないです。秋田とか岩手とかにまだ何人かいるので、貴重な存在じゃないですか。昔は結構遠い所まで行きましたけど、今は夏場に東北と冬場に関東、それがメインで、たまに九州行ったり京都行ったり四国行ったりしますけど。呼ばれれば全国どこでも行きます。春から秋まではなるべく東北の方でやりたいなっと思うね。

主な仕事は文化財になりつつあるけど、個人の方でもやりたいっていう方もいるので住居もまだあります。民間のものも。例えば、中尊寺のお寺とか鎌倉だつて民間じゃないですか。この辺、大崎市、涌太町はまだ個人宅で残っているの、多い時に年に五、六軒、修繕の仕事とか。あとは関東の個人宅も頼まれました。関東では東京の周辺で柏とか小田原とか、地主さんが残っていて茅葺きを維持してる所が結構あるんですよ。

北上川のヨシの刈り取り

北上川のヨシは、潮の満ち引きの関係で水の中にも生えていることもあります。淀川の十三に近いかもしれません。潮が引いたときは低い所、潮が満ちたときは高い所を刈り取ります。以前は、収穫は船を使っていました。震災後地盤沈下して、中州にヨシを刈り取りに行けなくなりました。中州のヨシを刈るのに震災の時までは水路を利用して、FRPの船を使って搬出していました。

今は刈り取りは全部会社としてやっています。昔は「カリコ」がいたんですよ。農閑期の仕事な

ので、酪農家とか農家さんが夫婦でやってました。刈って一束いくらということで買い取り、それが手間賃ですね。

このヨシの権利は入会権みたいで、各自治会とか集落が国交省に申請を出して、昔は何軒も会社があつて、入札にかけていたんですよ。でもそれがだんだんやる方が減ってきて、今は各団体さんとの話し合いで、権利を譲ってもらいます。昔は結構金になったので、それを使って各部落で秋のお祭りをやったり、集会所を建設したような、地域通貨みたいな役割がありました。前より大分減ったんですが、まだ入会権が存続しているんですよ。

多い所は四〇人位の集落でヨシ刈りをやっていました。個々に農家が刈る前は、各集落で適当な用途のある場所を区切って、結で刈り取ったんです。滋賀県にも随分行っただんですよ。

ウチも今は機械で刈り取っているんですよ。何年かに一回あるんですが、水分の多い雪が早



北上川河口付近

く降ると倒れちゃって刈り取りできないんです。それを回避するためにハンガリー産の機械を使っています。刈り取るだけなら他の機械でもできるんですよ。でもこの機械だったら水陸両用なので、雪が降っても刈り取れる。機械が川を泳ぐんですよ。ヨシも傷まないしね。ヨーロッパに行く機会があつて、その時にこういう機械があると知りました。これは震災から二年過ぎた二〇一三年に買ったものです。

今、川のヨシは面積的には六〇haぐらい刈っています。山のススキは三〇haぐらいかな。刈り取るのはどっちも大変です。今はヨシを大型機械で刈るようになったから、刈り取るのは短期間でできるようになった。選別・クリーニングは別として。ススキの刈り取りは、山が急斜面なので大変なので、草刈り機械で刈ります。

南岸（なんがん）低気圧って言って、湿っぽく春先にくる低気圧が来て、ヨシが全部倒されるのがすごく怖いんですよ。だからその前に刈り取



人によるヨシの刈り取り（提供：熊谷産業）

っておく。大型機械を入れて正解でした。操作自体はそんな難しくありません。昔は小さかったので、刈り取りから全部やっていたんだけど、今は刈り取りチームと屋根を葺くチームと分かれています。刈り取りがあればみんな一緒にやりますけどね。この機械、農機具屋さんが直せないんですよ。自分たちでパーツ作ったりしないから。車屋さんも農機具屋さんもパーツを取り寄せて取り替えるだけだから。それだとこの機械を動かせないですよ。自分たちで整備して加工してついたりしないといけないので溶接も自分たちでやっています。よその人じゃ無理なんです。

ススキの茅葺き

ヨシだけじゃなくて、ススキも使います。ヨシもススキも屋根材としては、全部茅なので。今、白浜の山のところもあるし、二ヶ所かな。ススキを刈り取ってるのが五か所あります。部落で持ってた共有のものが、集落がなくなつて、買い取



機械によるヨシの刈り取り（提供：熊谷産業）

つてくれと言われたり。地元の女川の草地組合が牛のために草を刈る草地を使わなくなったりしたので、そこを借りています。営林署の土地も借りたりしています。

ススキは刈り取る作業中に乾いちゃうんです。日本海側みたいに立てておいたりしてないです。ヨシもすぐ乾きます。刈り取った年から使えます。刈り取ってる間に乾いちゃうので。川のヨシだと最大で長さは3mぐらいです。ススキだと長さ七尺、2m10cm、七、八尺です。麦は栽培してないのでないです。稲ワラは農家さんをお願いして、「ほんによ」とか「はさかけ」したのを譲ってもらおうようしています。でもだんだんそういう人もいなくなつて。今は何とか入手でできています。この辺は畳屋さんがまだあり、親戚の畳屋さんが頑張つて集めてるので、そこから譲ってもらえるようにしています。だんだん困るでしょう。年間でも大した量は使わないです。このぐらいで一〇〇とか二〇〇。軒



日本一の茅葺き屋根の仕上げ作業（岩手県奥州市）（提供：熊谷産業）

先の化粧に使うぐらいなので。藁をそのまま屋根全面にふくことはないです。五年で全部壊れちゃったら、やる手間が大変なので。

文化財だと元々使ってる材料を使いなさいと決まってるので、それによつてヨシかススキになります。あとは、ヨシでこれぐらい、ススキでこれぐらい持ちます、値段はこうで、どちらにしますかと施主さんに判断をおおぎます。値段は変わらないですね。ヨシの方がゴミがなくて良いのですが、ススキの方が手間代でコストがかかるんです。ヨシの方が持ちます。今、焚火しないから乾燥しないんです。それで二〇〇三〇年位持ちます。ちゃんと差し茅をやつていけば、五〇年もつんですが、今はそういう所は少ないです。予算の関係もあるんですよね。管理されている所はもう五〇年も六〇年も昔のままで維持しているところもあります。

茅葺き屋根の葺き替えに必要な材料

屋根の葺き替えをやるときに、他に材料として絶対必要なものは稲ワラとタケと雑木、マツです。宮城から南はタケでいいのですが、岩手行くとマツを使うんですよね。細いマツを。逆に山形、秋田行くと雑木を使うんですよ。タケもないし。場所によつてですね。青森行くと、根曲がり竹を使ったりですね。そういう形で地方に合わせた資材をストックしておかなければならないので、それは大変ですね。できるものは周辺で調達し、できない物はそれが生えてる所に行つて、その時に必要に応じて調達しますよ。いつ出るかわからないので。建設コストを積算する本があるんですが、それには載つてこないんですよ。タケは、三年物の季節の良い時に刈つたものが必要です。自分たちで刈らないとないんですよ。虫が入ったら、施主さんからクレームが来るし、タケの刈り旬があります。マダケもモウソウもシノダ

ケも。この周辺にある藪から、その三種類を自分たちで刈り取ってます。自分たちで手入れして。五反分ぐらいですかね。それで毎年うまく回るようにしています。マツは岩手県久慈の方に行かないと今手に入らないです。刈らせてもらえないかと頼みこんで。五〇八年生ですかね。すーっとまっすぐで。長さは五、六mと、長いものはそれ以上。下地で使うので一五〇本とか二〇〇本とか必要ですね。雑木はソゾメだったり、ヤマザクラだったりマンサクだったりいろいろですね。それはウチの山の周辺で刈り取ってます。この周辺の山持さんにお願ひしたり、自分の山。ちょうど茅場の周りがそういう所なので。

スギやヒノキを使うときは、三重県から購入します。今それも大変で、皮を機械で剥く。手で一本一本剥く人がいなくなっただんですよ。やっているのはみんな高齢者ですよ。スギ皮も向こうから入れています。それももうそろそろ。細い長木（ながき）って言うんですかね。南の方に行ったら、



茅葺き屋根の葺き替え作業（提供：熊谷産業）

スギ丸太とかヒノキ丸太を下地に使います。あとは屋根上に登るのも丸太を使って登って行くので、それにも使います。昔は大した値段してなかったけど、今は大分値上がりしてます。全ての資材が値上げをしています。一番手に入れにくいのは、茅で言ったら小麦ですかね、あと麻殻。麻殻は軒先に使うので。今は麻は、麻をとるために品種改良して太いじゃないですか。昔は細かったですね。その細いのと同じものを調達してくれって言われたら大変です。今は麻殻は、古い建物にあつたら、それをストックするか、栃木の鹿沼市にやつてる所があるんです。でもなかなか細いものはないです。何でも大変です。

あとは鍛冶屋さんがいなくなつたんでね、鉄釘だつたり、刈り取り鉄も。しょうがないですよ。時代の流れ。檜皮は使わないです。関西が多いので、その同業者にお願いします。業界みんな仲がよいので。植物性で、茅、こけら、檜皮。京都の清水寺の近くに全国社寺等屋根工事技術保存会が



1926年に移築した本社は屋（提供：堀内孝氏）

あるんです。ここで定期的に研修や会合があつて、そういう仲間の人たちのつながりがある。ちょうど植物性の三つの携わる人たちが一緒に会を作つて。今でももちろんあります。コロナ禍になつてから、そういう研修などできなくなつたんですけど。

行政の支援はないですね。例えば、ここが長尾部落なんです。ここが震災の関係で機械が入らなくなつたんですよ。それで部落の人が市を通じて、国交省にここの場所を直してくれとお願ひしてもやつてくれなかつたですからね。一〇万円もかからないようなことなのに。決まつたルートで言つてもね。市が正式に国の方に要請したらそれでやつてくれるのか。一緒に物事を進めていくつていう雰囲気がなくなりましたよね。昔は全然違つたんですよ。広域合併の弊害なんですけどね。昔は火入れするときは役場職員もみんな一緒にやつたんですから。一緒に町村を何とかしようという考えはなくなりましたね。火を入れるのは四月



熊谷産業

に入ってからですね。使うところで入れるところは全部火入れます。どうしても風とか天候によってストップになったりはします。

ウチもいつまでやれるかわかんないですよ。ヨシは水の浄化にいいし、自然を守るためにというようなことで、環境作業だと思ってるんですが。渡良瀬川遊水地とか琵琶湖とか、近江八幡とか滋賀県の人たちとの仲間意識が強いです。一年間のサイクルで言うと、四月に火入れをして、刈り取りは一月からやっていきます。四月から一月の間はそのまま置いておきます。刈り取りは三月いっぱいから四月入る場合もあります。それが終わったら野焼きです。昔からだいたいそういうやり方でやってきた。ススキの方は火入れはできないです。毎年刈り取るっていう作業をしないと。古い茅が入ったら使い物にならないです。だから全部刈らないと。そういうふうにしなから、良い茅がいつも出るようにしています。



熊谷産業周辺の風景



北上川のヨシ（提供：熊谷産業）

職人について

全員ウチの従業員として海外の方も一緒に働いています。少し前は、茅葺きの技術がある人は一五人ほどでしたが、辞めた人も亡くなった人もいて職人は不足しています。茅葺きができる職人さんは一〇人ぐらいですね。それ以外は事務や加工する人、臨時とパート入れると一八人ぐらいですね。女性は一〇人ですが、職人にはいません。職人になりたいという人は独立して、一人でやってる女の子はいます。ここで修行して、山形で二、三年はくつついてやってます。関西の方では女性の方頑張ってますよね。滋賀県立大学出た女の子結構がんばってる。一番年配だと八八歳で、若い人だと二三、二四歳ですかね。職人と職人になりたい子は、地元の人ほとんどいないですね。年配の人は地元ですけど。五〇歳から下はみんな県外ですね。関心を持ってやりたい人たちしか来ないので。茅葺きの技術が集まっている拠点になっています。だから大変な面もあります。

北上川のヨシの特徴とヨシ販売について

真水の琵琶湖産のヨシに比べて、汽水の北上川のヨシは硬くて短いです。屋根に向いてますね。硬くて締りがいいので、持ちがいいですね。一番いい長さが二m四〇cm（八尺）ぐらいかそれに近いもの。琵琶湖つて四m近くあるものもありますよね。あんまり長すぎても良くないです。だから琵琶湖の人たちは、こちらの方に、お茶室で使う皮付きのヨシを結構買いに来ました。向こうにはないので。琵琶湖は夏障子とか衝立とかね。祇園祭りの時、入れ替えたりしますよね。一番高級な「野洲よしず」とか、衝立に山を描いたり。そういう意味で文化の交流が琵琶湖とあったんですね。昔は水も汚れ

てなかったの、シミのない色の良いやつが出たんですよ。今はそういう取引はできないんですよ。そういう少ない束をストックして、後から送ってくれてできないです。僕らも屋根をやるんで、ある程度材料を回せないといけないんで、そのスペースでデッドスペースなっちゃって。せいぜい二年ぐらいで回るような量を取って。少ないのをそこに置いて、三年とか溜まつたら下さいとかはできないです。とんでもないお金を出してもらえば、また別ですけど。今ある収納スペースは、隣にあるところと会社があつた向こうのスペースと、四ヶ所ぐらいにわかれてますね。一ヶ所が六〇〇から千坪。それぐらいが一通り回すのに必要なスペースになります。

刈った茅を売ったりはあんまりしないです。茅を売るだけでは会社は維持できないですよ。昔は祖父、親父の流れで、そういうこともあつたけど、自分たちの刈り取った量で、屋根を葺くというスタイルに変えました。



熊谷産業の皆さん（提供：堀内孝氏）

これからに向けて

ここは石巻市になる前は桃生郡北上町です。行政も一緒になって、何とかしていこうと一生懸命だったんですね。久慈にも働きかけて。市になってから、その文化財関係の方との行き来はないですね。昔は何かあったら役場の職員が来たんすよね。

市内の文化財で茅が必要になったりすることはあります。頼まれればやりますよ。南三陸町とか女川とか小さい所はいいんですね。ここにイヌワシがいたので、イヌワシのためにここ使ってくださいとかね。南三陸町との境でも刈り取って。イヌワシって草地がないと繁殖できないんですね。餌を捕るとか。イヌワシがまた来るような草地にしようということで、協議会を作って、極力参加するようにしています。イヌワシは六年ぐらい前まではいましたからね。ススキ刈つてるときにわかります。震災後にいなくなりましたね。震災直後はいたんですから。工事とかね。あと一つは、大きな風力発電もできたので。震災の後に状況がもつと悪くなった。でも何かうまくやっていけばまた、そういう事例もあって、協力できることはしていきたい。またイヌワシが住む町に。

(二〇二二年一月二四日 熊谷産業にて 聞き手：深町加津枝、小沢晴司)

【有限会社 熊谷産業】

・本社 宮城県石巻市北上町橋浦字行人前一九〇
・事業内容 茅葺屋根工事・天然スレート葺屋根工事・国宝・重要文化財保存修理工事
・ホームページ <https://www.kayabukiyane.com/index.html>
北上川の自然や熊谷さんたちの茅産業の歴史について「歴史」「茅葺」「茅場」「将来」「工事経歴」等の項目で知ることができます。

震災を乗り越えて

地域のリリーダーへのインタビュー

島田 和久

ここでは、東日本大震災（二〇一一年三月十一日）発生直後から地域主導の被災者支援活動にリーダーシップを発揮された三人の方々のお話しをご紹介します。佐藤良夫さんと金崎潔さんは、比較的新しい地区に転居してこられた方です。自分の住んでいるコミュニティを一から作り上げるための役割を担ってきました。一方、東梅英夫さんは代々この地域に住んできた方です。お三方は、震災での被災者支援活動の経験を踏まえて、震災後に様々な取り組みをしています。背景はそれぞれ異なりますが、三人のリリーダーに共通していることが見えてきました。



復興後の三陸鉄道大槌駅とその周辺

東梅 英夫さん（岩手県下閉伊郡大槌町白澤地区）

震災と避難所運営

地震直後より伝承館（白澤鹿子踊保存会館伝承館）には、身を寄せさせてほしいと避難者が続々と到着しました。伝承館は、白澤地区に残る伝統芸能の鹿子踊りの稽古をしたり、装具を保管したりする建物です。当時は、避難所として指定されていませんでしたが、避難者が増えるにつれて「ここが避難所になるんだ」と感じました。夕方には伝承館は避難者でいっぱいになりました。翌日、避難者名簿を作りました。その時には一二七人いました。

地震直後から鹿子踊りのメンバーたちが集まりはじめ、発電機や工事用の電灯など、避難生活をするために必要なものを持ち寄りました。伝承館にいる避難者を支援しようという動きは白澤地区の住民にも広がり、三〇kg入りの米が五、六袋伝承館に届き、ガス釜とガスレンジで炊き出しが始まりました。炊き出しは自発的に始まり、おにぎりづくりは地区の奥さん方や避難者の女性たちが担当しました。出来上がったおにぎりを別の避難所に届けることもしたのですが、その運搬も自発的になされました。

避難者の代表を決め、鹿子踊りメンバーとともに避難所リーダーとして「白澤伝承館避難所」と書いた腕章を身に着けました。数日後に大きな余震があり、また津波が来るという噂が避難者の間で飛び交って伝承館は混乱しました。このため、「リーダーを決めてあるのでリーダーの指示に従ってください。腕章をしている人たちが毎日二回、町の対策本部へ行って情報を得ているから、安心してく



東梅英夫さん



白澤鹿子踊保存会館伝承館

ださい。」と話しました。

私ともう一人の方で町の災害対策本部へ毎朝夕通い、こちらの要望を伝えたり、最新情報を得たりしてきました。このとき注意したことが、一人行動をせず、複数で行動して正しい情報を早く受け取るということでした。リーダーは信頼を得ることが重要だと感じました。また、この地区の三〇世帯がそれぞれ被災した親戚・知人を自宅に受け入れていたので、各家庭の避難者数を把握し、毎日決まった時間に物資の分配をしました。

避難所ではラジオ体操を朝六時半から行うようにしました。体操の後は朝礼を行い、前日に災害対策本部で得た情報や今日の活動予定を話すとともに、避難者の要望も聞きました。私が会社勤めをしていたときに体操と朝礼が毎日あったので、それを思い出して取り入れました。伝承館は一二〇人ほどの避難者だったので、避難所運営は比較的しやすかったとは思いますが、私たちは情報収集と伝達を重要視し、それを実行できたことで大きな混乱もなく運営することができました。運営する側は、避難者が何を求めているかを感じ取り、その対応を対策本部から得ることが安心につながったと思います。物資・食料の配給、仮設住宅、あと何日ここで我慢すればよいかなど。それから、物資の配分担当を決めて配給をしたこともスムーズな運営につながりました。

今回の避難所運営で感じたことは、「分け合えば余るし、奪い合えば足りなくなる」ということです。これまでに経験したことのない大災害で誰もが大変ななかでしたが、みんなが譲り合うことで避難所が混乱することなく運営できたと感じています。毎年九月に開催される大槌祭りは白澤鹿子踊保存会にとつては最大の催しであり、いつも一〇〇人を超える保存会の人たちが集まります。祭りでは、その参加者への飲食の準備もみんなで力を合わせて行ってきたので、今回の震災時にもその経験が活か

され、スムーズに炊き出しをすることができたと感じています。

震災の経験を将来につなげる

地区の防災訓練の実施

震災から二年して、地区内に被災者のための住宅地や町営住宅ができ、古くからの住人は少数派になりました。役所が自治会づくりを主導したり、新住民と旧住民との交流をしてきたので、移住者の方々は地域にスムーズに溶け込めたと思います。縁あって私が初代の自治会長を拝命しました。新しい方々の新鮮な発想をいただきながら自治会をつくっていきたいと感じました。

震災の経験をもとに、地区の防災訓練を二〇一八年三月に始めました。「地域と地形を知ろう・点検しよう」というコンセプトで年に一、二回実施しています。地域を歩き回って、沢や砂防ダム、道がどこに通じているか、防災倉庫がどこにあるかなどを確認しています。防災訓練の開



地区の防災訓練（2019年3月10日撮影）

催チラシには持参品を書きません。当日に皆さんが何を持参して集まったかを確認することになっています。白澤地区は今回の震災では津波被害は免れましたが、豪雨災害・土砂災害などあることを忘れてはならないと思っています。このことを強調して訓練を行ってきました。これまで参加者は大人が多かったですが、今後は小中学生も含めた若者の参加も増やしていければと思っています。

この内容は、二〇一八年二月二七日および二〇一九年三月一二日のインタビューをもとに、東梅さんに校閲をお願いしたものです（聞き手…島田和久）。

佐藤 良夫さん（宮城県本吉郡南三陸町志津川廻館・旭ヶ丘地区）

震災時の地域状況

旭ヶ丘団地は、昭和六〇年代にできた志津川地区の高地にある住宅団地です。旭ヶ丘団地のある旭ヶ丘地区は約一〇〇世帯で、その下には廻館（まわりだて）地区があり約八〇世帯ほどが住んでいました。自分たちは旭ヶ丘団地ができてすぐの昭和六三年に引っ越してきました。この団地の男性はサラリーマンが多く、日中は家におらず、火災や災害が発生した時は家にいる女性が対応する必要があるました。そのため団地完成直後に婦人防火クラブが発足し、現在に至るまでこの地区の防災組織の中心的役割を担っています。ほぼ全世帯が加入し、会長、副会長など役員は一四人です。六〇代が中心です。これまで年に二〜三回の防災訓練を行ってきました。

震災当日には、旭ヶ丘コミュニティセンターに三〇〇人ほどが避難してきました。婦人防火クラブのメンバーは、地震直後にコミュニティセンターに集合し、すぐに被災者支援の準備を開始。衣類、寝具を持ち寄り、各家庭の備蓄を使って炊き出しも開始しました。



佐藤良夫さん

旭ヶ丘コミュニティセンターと山を挟んで反対側にある志津川高校にも避難者のためにおにぎり数百個を届けました。この地区の住民による炊き出しは、一週間後ほど続きました。

旭ヶ丘団地は、町営水道を団地の水道タンクに一旦くみ上げ、各戸に送水していたため、町営水道の断水後も二日ぐらいは水が使えました。その後は、地区内の工場の貯水タンクを利用してもらえたのでさらに三日ほどは使えました。停電は二ヶ月ぐらい続きました。この地区はプロパンガス利用だったので、各家庭ではボンベのガスがなくなるまでは使用できました。コミュニティセンターにも五〇kgのガスボンベが二本あり、これを利用して炊き出しをしました。

旭ヶ丘コミュニティセンターの玄関前にテントを設営し、避難所の受付兼ミーティングスペースとして使いました。被災者の支援は防火クラブメンバーと、地区の男性たちで行いました。男性たちは自主参加で多い時には四〇～五〇人になりました。私がU字溝を用いた手製のかまどづくりを男性たちに教え、薪集めしてもらいました。また、



田東山より志津川湾を望む

入谷（注：南三陸町入谷地区）に空のペットボトルを持って水汲みに行ってもらったり、届いた支援物資の仕分けをしてもらったりもしました。

今回の震災では自身の経験が役立つと感じています。自衛隊員時代に災害派遣を一〇数回経験しましたし、手製担架作りや手製のかまどづくりも訓練していました。そのため災害が起こった時、自衛隊はどれぐらいの日数で支援に来たり、炊き出しを開始したりするかというおおまかな予測ができ、地区の方々に見通しをもってもらうことができました。

今回の震災では、婦人防火クラブのメンバーの連携がスムーズだったことで、旭ヶ丘コミュニティセンターでの被災者支援が迅速にできました。地域内のコミュニケーションの秘訣は、七夕まつり（コミュニティセンター前で）、センターの桜で花見、クリスマス会などイベントを定期的に実施して顔を合わせていたことだと思っています。これに加えて、月に二回はお茶っこ会をしたり、手芸教室は年間二〇回ぐらい開催されています。研修旅行（温泉など）も年に一〜二回あり、さらに忘年会もあります。こういう日ごろの住民間の交流が震災時に役立つと感じています。

震災を機に地域づくり、北の恋人岬プロジェクト

私自身、震災によって傷ついた故郷を想うことが多くなり、二〇一五年初めごろから古い公園の再生を手弁当で始めました。そこは、私が青春時代によく海を見に行った明神山荘の近くにある小さな公園です。公園のすぐ近くには袖浜海水浴場があり、当時はたくさんの方が海水浴に訪れ、その行き帰りに公園を利用していました。しかし、四〇年ほど前に漁港が整備され海水浴場は閉鎖となりました。それに伴ってこの公園も訪れる人がいなくなってしまう、震災後久しぶりに訪れた際には荒れ果

てていました。

そこで、友人二名に声をかけて公園の整備を始めました。最初は木の伐採をして根っこを除去し、地面を平らにする作業をしました。半年ぐらい経った頃、新聞に取り上げられたことをきっかけに、町外からボランティアが公園整備に協力してくれるようになりました。また、埼玉にある企業が鐘を寄付してくれたので、海を見おろしながら鐘を鳴らせる公園になりました。二〇一八年七月に公園の整備が完成し、「北の恋人岬」と命名しました。フェイスブックを作ったり、町の観光協会から情報発信をすることで、全国から訪問者がきています。震災から一〇年経ちますが、少しでも多くの人たちに南三陸町のことを氣にかけてもらえればと思っています。

この内容は、二〇一七年九月二二日および二〇二一年一〇月二五日のインタビューをもとに、佐藤さんに校閲をお願いしたものです（聞き手…島田和久）。

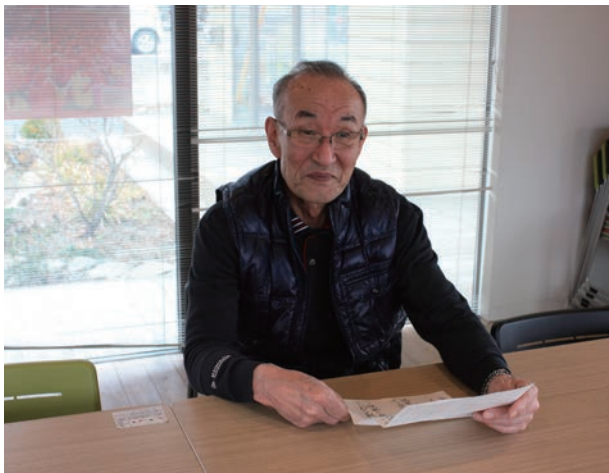


北の恋人岬

金崎 潔さん（岩手県上閉伊郡大槌町迫又地区）

新興住宅地でのコミュニティづくり

昭和五八年、迫又地区に移り住んだ当時は、この地区には自治会がなく、沢山地区の隣という位置づけでした。当時、迫又地区には七五世帯が住んでいました。沢山地区経由で行政の配布物や集金が来ていたので、大槌町役場から、私が迫又地区の行政連絡委員に任命されました。それから、班割を作ったり、テレビが映らなかつたので、役場に話して有線テレビを設置したりしました。引越してきて三、四年後に町内会を結成しました。しかし、会合の出席率が悪く、二年目に解散になってしまいました。当時は、地域の人々を巻き込むのが難しく、役員だけで町内会を運営しているような状況でした。町内会が解散になって以降、私は長らく民生委員、行政連絡員など地域に関わる仕事をしてきたので、住民の方々とは顔見知りになっていました。



金崎潔さんに聞く

震災と支援

このため、地震発生直後、地域の子育て世代の女性たちが地区のために何か手伝いがしたいといって私の家にやって来ました。翌日、この人たちとともに中央公民館に歩いて行き、毛布などの支援物資を持ち帰って、被災者を受け入れている家庭に配布しました。三〇代の一五、六人の住民の方に協力をお願いし、各家庭を歩いて必要な物資と滞在人数を確認してもらいました。これをもとに私が名簿と必要物資のリストを作成して役場に出しました。後日、車で支援物資を受け取りに行き、自宅の敷地に張ったテントの中に置きました。協力してくれた女性とその子どもらが物資の到着を各戸に知らせると、住民たちが私の家に物資を受け取りに来る、という流れでした。この時にサポートしてくれた女性たちは、この住宅団地に移り住んできた世代でしたが、「子どもたちのために」という気持ちで支援物資の分配の協力をしてくれました。また、男性の住民の方々もボランティアを申し出てくれ、近くの山林に穴を掘って仮設のトイレを作ったり、町の水道局まで水を汲みに行ってくれました。

これらの方々の協力のおかげで物資の配給や支援活動がスムーズにできました。振り返ってみると、震災当時、町内会はありませんでしたが、地域の仕事を通じて住民の方々と顔見知りになっていたことが、連携をスムーズにしたのではないかと感じています。また、私がサラリーマンをしていた頃の経験も役立ったのではないかと思います。私は、富士製鉄（現 日本製鉄株式会社）の釜石製鉄所に就職しました。入社以来、いろいろな部署を経験しましたし、現場のリーダーも経験しました。優秀な上司にもたくさん出会いました。そのなかで、同時に複数の仕事をする力、人を見る目、現場

を指揮する力などが身についたのではないかと思います。職場での経験が震災時の地域活動にも生かされ、地域をまとめていったのではないかと思います。

震災の経験を将来へ防災訓練の立ち上げ

震災後の二〇一六年六月、迫又に再び町内会が創設されました。今回は、大槌町役場が町内に広く町内会設立の提案をし、迫又地区でも震災の時にボランティアをしてくれた女性の方々が中心となって自治会を立ち上げようと盛り上がり、私が会長代行となつて、一ある班にそれぞれ班長となる方をお願いしていきました。

町内会ができて二年後の二〇一八年一月一七日には、町内会主催の第一回防災訓練を開催しました。一〇二名出席しました。現在の迫又地区の住民は四五〇人ほどです。今後、毎年一回は開催したいと思っています。今回実施した避難訓練は、津波ではなく水害（大槌川の氾濫など）を想定したものにしました。訓練で集った住民の方々には、「水害もあるので気を付けてください」とお話しし、「てんでんこが大切」だと伝えました。二〇一九年一月には第二回の避難訓練を実施し、この時にも一〇〇名程度の参加がありました。しかし、二〇二〇年以降は新型コロナウイルス感染症の拡大により開催ができない状況が続いています。地域のみなさんが積極的に参加してくださっているのととも残念です。この状況が収束したらぜひ再開したいと思っています。

この内容は、二〇一八年二月二七日および二〇二一年三月二五日のインタビューをもとに、金崎さんに校閲をお願いしたものです（聞き手…島田和久）。



復旧した三陸鉄道の大槌駅



復旧した三陸鉄道の大槌駅と大槌の街並み

津波の被害に対する賢明な対応策とは

〽櫻井公一松島町長（宮城県）インタビューから

東日本大震災時の津波

松島湾の震災時の津波の状況についてお話します。

松島湾は、直径が約一〇km四方の湾で、宮城県内の沿岸部の中心に位置し、湾の最奥が松島町となります。松島町の南西に塩竈市と七ヶ浜町、利府町、北東に東松島市が位置します。松島湾の入口を塞いだ形になっているところは、塩竈市の浦戸諸島と東松島市の宮戸島と言われる島々であり、松島町が湾の最奥に位置していることから、その地理的条件により松島町は被害が少なかったと言われています。

東松島市に接する手樽地区は、歴史的に干拓事業が進められた地域であり、展望地として有名な富山は、現在、海から約一km離れています。以前は直下まで海だった



松島町周辺地図

ため、現在よりさらに島々が入り組んでおり、津波に強い地形であったのだと思います。松島湾を一つの地域と捉え、島の数が二六〇余と言われ、大小の島々で津波の威力は軽減されました。

松島町では津波により沿岸部の建物に被害が生じましたが、津波の勢いで倒壊した家屋がなかったことから、他の沿岸地域とは全く状況が異なったものと思われます。当町には、伊達政宗公が建造した瑞巖寺などの歴史的建造物があります。瑞巖寺では参道の途中まで浸水しましたが、本堂には津波が到達しませんでした。しかしながら、参道の杉の木が塩害を受け、二年目には枯れ始める状況となり、特に、本堂に向かって、左側の方が右側よりも三〇cm程度低かった影響もあり、多くの杉が被害を受けました。樹齢三〇〇年もある杉が次々枯れて、ほとんどなくなってしまうました。震災前は山門に入ると杉の大本が荘厳な雰囲気を出していましたが、現在は、若木が植栽されている景観になっています。

五大堂など島々にある建造物も地震の被害にあっています。やっぱり先人の知恵っていうんですね。政宗が松島は大丈夫だとわかってそこに建立したのかどうかはわかりませ



松島町の大仰寺より松島湾を望む



富山にある大仏寺。正面には松島の絶景が広がる



伊達政宗ゆかりの瑞巖寺本堂



瑞巖寺の参道の
杉並木（震災前）



瑞巖寺の参道の杉並木（震災後）



松島“湾”ダーランドの
解説版（東松島市野蒜ヶ丘）

んが、津波による被害がほとんどありませんでした。お城を建てる時に、城であれば様々な土地の条件を踏まえて建築されると思いますが、お寺もそのようなことを考えていたのかなと思います。また、松島湾内には縄文時代の貝塚が多く存在しておりますが、町内の貝塚史跡を見た場合、津波の影響はほとんど受けておりません。また、松島は古くから霊場としての歴史もあり、町内には多くの史跡も存在します。それらの歴史的財産が、古からの教えを物語っているようにも思えます。



東松島市野蒜から松島湾方向を望む

津波への備えの大切さ

東日本大震災で我々が教えられたのは、津波はとにかく逃げるんだということでした。震災以前にも津波警報（大津波）などが出ました。ところが、あまり影響がなかったことから、東日本大震災でも、安心してしまった方々は多かったのではないのでしょうか。だから、地震は怖いけれど、津波に対しての危機感が薄れていたと思います。震災一年前の二月二十八日とその年の三月九日津波の情報が発表されましたが、いずれも大きな被害には至りませんでした。まさかそんなに高い津波になるとは思わないですね。

津波は一波、二波、三波と何回も来ます。津波シミュレーションではその度に島々の外洋側の波高が高くなり、湾内では波高が低くなるということが確認できました。このシミュレーション動画では、一番奥にある松島地区に来るまでに波高が大幅低くなっています。

また、東松島市には、東名という地区がありますが、津波が外洋から陸地をこえて松島湾に到達しており大きな被害がありました。東名地区には、鳴瀬川から松島湾までを結ぶ運河がありますが、津波が鉄砲水のように走り多くの方が犠牲になったそうです。

東日本大震災の際に、奥松島といわれる東松島市の宮戸島の方々は、古くから言い伝えがあり、津波が来たらすぐに高台へ逃げていますので、島内のそれぞれの浜では壊滅的な被害を受けていますが、人的な犠牲者は少なかったと聞いております。宮戸島には「貞観地震の碑」があるんですね。その石碑の言い伝えにより多くの方々が助かったそうです。

防潮堤について

防潮堤については、それぞれの自治体でその高さの議論がありました。松島町においても、東日本大震災の被害状況を踏まえれば、整備する宮城県としては、最低でもT.P.（東京湾の平均海面からの高さ）四・三mにすべきとの状況から話し合いはスタートしました。しかし、松島町を訪れる観光客の大半は、遊覧船の発着所や五大堂、瑞巖寺、物産店街のある松島海岸で過ごされます。その地域に、観光客の目線からはコンクリート壁しか見えないような防潮堤を整備することは考えられません。観光関係を含めた説明会においても、やはり海が見える方がいいという意見が大半を占めました。宮城県を代表する観光地として松島の観光を考えるセクシオンと、防災を考えるセクシオンでは相反するところがあり、何度も議論がありました。



松島湾船着場付近の石積み防潮堤

た。最終的には町の議会としても要望書を提出し、地元も望んでないということで、最終的に整備を行う県の判断で、松島海岸公園を盛土して対応することで、T.P.四・三mから松島海岸については、T.P.二・一mの高さになったのです。また、素材も松島の景観にも配慮した、石積風の防潮堤を整備することになりました。

最終的な防潮堤の高さは、松島海岸でT.P.二・一m、それ以外の地域でもT.P.三・三mの高さで整備されました。この高さは、震災により地盤沈下した分を補うような高さとなっています。観光エリアの公園についても、津波防災緑地として、広場の高さも同時に上げるとともに、津波によって発生する漂流物による被害を軽減する植樹帯などを整備し、現在でもお客さんの視線から海が見える状況となっています。ぜひとも、その状況を見ていただきたいと思います。

震災時の松島の役割

東日本大震災において甚大な被害が生じた沿岸自治体に比べると、比較的被害が少なかった松島町は、近隣からの避難者の受け入れや物資の供給基地、被災地支援の拠点基地の役割を担いました。もちろん、松島町も大きな被害を受けましたが、宿泊施設で受け入れが可能な施設も多くあったことから、復旧作業に当たる方々のステーションになったのです。

当時は、どこのホテルも宴会場まで利用して、支援の方々が宿泊していました。災害の復旧に来た方々、全国の警察、電力会社、医療関係者、ボランティアなど、様々な人が松島に来て、松島に泊まりながら、気仙沼市まで行く人、石巻市に行く人、女川町に行く人がいて、夜になると松島に帰ってきました。そのときのアクセス路になったのが三陸道路です。当時はまだ気仙沼までは開通していま

せんでしたので、朝と夕方は高速道路が渋滞していました。宿泊施設では、朝・晩の食事だけでなく、昼食用の弁当等の調達を行うなど、様々なフォローを行っていたようです。さらに、兵庫ボランティアプラザをはじめ、兵庫県立舞子高校の環境防災科の生徒など、全国のボランティアを受け入れ、松島町を起点として、被災地の復興に向かっていただくなど、被災地域全体の復興に向けた大事な拠点になっていました。被害が他沿岸地域に比べて比較的少なかった本町としては、「復興」「創造」そして「貢献」を震災復興計画のスローガンとし、松島の役割を位置づけ復興に取り組んできたところです。

(二〇二二年一月二九日 松島町役場にて
聞き手…小沢晴司、深町加津枝、吉田丈人)



インタビュー後の集合写真（左から3人目が松島町長、松島町職員と研究プロジェクトメンバーとともに）



3.11 東日本大震災伝承板



松島湾の眺望

原子力災害から一〇年、福島は今と未来

／松島座談会での振り返り

宮城大学 教授 小沢 晴司

東日本大震災と原子力災害発生から一〇年が経ちました。浜通りでのこの一〇年を振り返る座談会が、二〇二一年秋、宮城県松島町内で開かれました。環境省で福島除染に関わり、退官後宮城大学で教育研究等に携わる筆者の呼びかけで、交流が続いている地元等から六名が集まりました。報告者として小沢のほか、社会学者で東京大学大学院情報学環准教授の開沼博先生、相馬中央病院内科診療科長を務める越智小枝先生、浜通りでのツーリズム推進等に関わってきた福島交通支倉文江課長の三名と、コメンテーターとして、福島民報社鞍田炎取締役いわき支社長兼浜通り創生局長、福島民友新聞社小野広司編集局長、河北新報社報道部高橋一樹記者の三名でした。震災から一〇年、福島県浜通りに様々な立場で関わり、地域を見続けてきた各人の目に映る地元の声や思いをたどりながら、災害からの地域文化の再構築、災害にレジリエントな環境保全型地域社会の創生、自然に寄り添う暮らしの実現に向けて、という課題を振りかえれば、原子力災害と避難指示を受け、一度失われようとした地域の復興に取り組む福島の浜通りでの経験や試行の中に、様々な教訓とメッセージがあることを再確認しました。

一・七名の報告

小沢 晴司（宮城大学教授）

地元の声を聴く

切り出して、最近の取組みを報告します。二〇一一年発災の翌二〇一二年一月環境省が福島に除染の事務所を設置し、その八月に福島に派遣され、避難指示区域の自治体等との交渉、住民説明会、広報などを担当しました。その初期地元リーダーから言われた言葉があります。「だから国はだめなんだ。自分のことや自分の都合ばかり話す。まず地元の人のお話をきく、地元の人に耳を傾ける、それからではないですか、自分の話をするのは」。

当時、市民の除染理解のため環境省と福島県が運営していた除染情報プラザ館長の指名も受け、スタッフと相談してプラザ内の会議室を改造して、地域の歴史や文化を学ぶ企画展コーナーを作りました。最初に飯舘村を取り上げました。飯舘村は全村避難で福島市や伊達市等に分散避難し



座談会の様子

ていました。村は秋に飯坂温泉等の会場で文化祭をしていました。避難先で、刺繍や工芸品を作る、通えなくなった小学校の絵を子どもたちが想像しながら描く、そういう作品が会場に並べられました。舞台では伝統芸能や合唱等の発表もありました。離れ離れに避難しているので練習もままならないのですが、皆が会場での若者の舞台を見守ります。そういう舞台演舞の写真や、住民がこつこつと作った作品を借りてプラザの第一回企画展を実施しました。初日に菅野飯館村長が見えて声をかけて下さいました。「小沢さんも少しは地元のことを考えるようになったね」。

浜通りの交流の道のデザイン

地元を知るというのは本当に大切なことだと思います。東北太平洋沿岸の復興と再生のため、環境省は地元と連携して長距離自然歩道「みちのく潮風トレイル」を構想しました。二〇一九年六月青森県八戸市から福島県相馬市まで千kmを超える全線開通式典挨拶で、立谷相馬市長が「みちのく潮風トレイルというからにはいわきまで伸ばすことが大事だ」と示唆しました。環境省ではトレイル建設のための復興予算も終わり、起終点は審議会で決めているので南に伸ばす新しい作業はできないとの考えでした。組織での取組みが難しいなら個人ベースでと、NPO法人みちのくトレイルクラブの相澤常務理事、福島県観光物産交流協会高荒理事長と検討を始めました。

自身で一番気になったのは、トレイルを南に伸ばすとき、ルート上となる大熊町や双葉町がどう感じるかということでした。避難住民が未だ戻っていないのに観光客を呼び込む、そういうトレイルの計画を描くことが許されるのか。二〇二〇年三月、両町を含めた福島県浜通り沿線の首長等を訪ねました。大熊町と双葉町の町長や議長も「進めよう」とおっしゃいました。常磐線全線が丁度再開通し

た頃でしたが、両町にある駅の乗降客が少ない。浜通りにトレイルを描くと、帰還困難区域が横たわり、そこは歩けないので、双葉駅と大野駅の一区間で常磐線を使うことになります。両駅利用客増加も期待され、両町でも受け入れて頂けると感じたので作業は進められると思いました。

二〇二〇年福島県観光物産交流協会、NPO法人みちのくトレイルクラブ、うつくしま浜街道観光推進会議と一緒に検討作業を始め、一二月沿線自治体担当者説明会、二〇二一年二月に富岡町からいわき市久之浜までのモニターツアーを実施しました。松本栖葉町長が祝辞を述べ、遠藤広野町長が参加者とともに歩きました。二月終わりのいわき市内での報告会は新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対応で、オンラインで実施されました。三陸沿線の首長には時々作業の様子も報告していたこともあり、立谷相馬市長、山田名取市長、山本宮古市長、小林八戸市長から応援メッセージをいただき、当時の清水いわき市長もこれに答えるメッセージを寄せてくださいました。二〇二一年度はうつくしま浜街道観光推進会議とNPO法人みちのくトレイルクラブが主体になり、福島県観光物産交流協会と当方で協力をしています。

支倉 文江（福島交通課長）

ホープツーリズム

二〇二一年三月まで福島イノベーション・コースト推進機構に、その前の三年間は福島県観光物産交流協会に



出向していました。震災直後は福島交通で「ふくしま復興かけはしツアー」という、福島の現状を知っていただくツアーに取り組んでいました。東京八重洲を金曜の夜出発して、土曜一日浜通りをまわり東京に戻る一泊二日の弾丸ツアーで、根強いファンもついて一五回ぐらい実施しました。被災地の方とお客様が関わり、その後も継続して来てくださる方が多くなり、これは人がつなぐツアーだと「ヒューマンツーリズム」と名づけました。そのうち当時の福島県観光交流局幹部から「復興ツーリズムをするので観光物産交流協会に出向してくれないか」とお声がけいただきました。東北全県の知事が仙台に集まる会議があり、そこで内堀福島県知事は、浜通りを訪ねることをブラックツーリズムではなく「ホープツーリズム」と表現しました。それからホープツーリズムの名前でツアーを作っていました。

当時、福島には特別な方しか来ませんでした。誰に来てほしいかと聞けば、若い世代、特に大学



富岡町夜ノ森の桜並木

生、高校生に来てほしいと言う方が多かったのですが、では高校生に、でも放射能に抵抗があつて難しいかも…、では有名な高校に来てもらい、そこが来るなら做つて行こうという作戦をとりました。ホープツーリズム推進メンバーや身内のつながりで、灘高校と筑波大学附属駒場高校から二〇人ずつ計四〇人に来ていただきました。次に女子高バージョンで、お茶の水女子大附属高校や川越女子高校にお声がけしました。その矢先、越智さん、開沼さん、小沢さんなどに会い、コーディネートとして、参加者の世話役として協力していただきながらホープツーリズムを進めていきました。それからイノベーション・コースト構想推進機構に移り、双葉町に県の震災伝承館ができて、その一般研修プログラムの中にホープツーリズムが組み入れられました。機構ではコンシェルジュとして、イノベ構想の視察に対応し、浜通りをご案内しました。

チームふくしま

もう一つ、私は二〇一一年から「チームふくしま」というNPOで理事もしています。活動は「福島ひまわり里親プロジェクト」。当時震災が起きて福祉作業所や障害のある皆さんの仕事がなくなるのでは、と考え、その支援をしようというのがスタートでした。ひまわりが放射性物質を吸うらしいという話があり、ひまわりの種を福島県内の皆さんに配布するため、その袋詰めをする仕事を福祉作業所の皆さんにやっていただこうと考えました。すると、おそらく国だと思いますが、ひまわりが放射性物質を吸う効果はありませんと発表され、プロジェクト事務局は非難を受け窮地にたたされました。目的は、絆や思いやりの心を育むことだ、と舵を切り、ひまわりの種を県外の方に買ってもらい、それぞれの場所で咲かせ、また福島に戻していただき福島で咲かせてその種油を絞る、という展開にしま

した。種から絞った油は、実は福島交通の一部のバスの燃料にもなっています。多くの方に参加いただきひまわり里親は五〇万人を超え、五〇〇〇校以上の学校が取り組んでくださるようになりました。

チームメンバーの一人が二〇二一年五月一二日に急性大動脈解離で亡くなりました。彼の夢を受け取って活動が続けたい、例えば子ども食堂を開いて子どもたちにカレーを提供したいと、クラウドファンディングで寄付も集めました。彼の病気では大量の血液が必要だったため、献血で人の命を救う活動しよう和日本十字社と連携してのイベントや、ひまわりの種を献血された方に配る、ということにも取り組んでいます。ここに「ひまわりおじさん」という外国語の絵本があります。震災で元気をなくした子どもが、ひまわりおじさんとひまわりの花で元気を取り戻すという内容です。シリアの子どもたちに配って、お礼のメッセージもいただきました。今後は難民キャンプにも持っていく予定で、その準備もしています。チームふくしまは最初のきっかけから、いろいろな方向に活動が展開して、さらに頑張っていかなきゃいけないと思っています。

越智 小枝（相馬中央病院内科診療科長）

相馬市へ

私は震災前まで一〇年間東京で臨床医をしていました。関節リウマチや膠原病専門の内科医でした。東京下町の錦糸町という町にある病院で勤務し、様々な社会的背景をもつ患者を見ているうちに、病院で患者を待つ



ではなく、社会の健康を守ることも大切と考え、公衆衛生を勉強しようと留学を考えました。

留学合格通知が来たのが二〇一一年二月二八日。退職手続きをしていたら三月一日地震が起きました。留学をやめてすぐに被災地に行くべきか迷いましたが、周りの人達から「被災地のニーズは一年や二年ではなくならないのだから、しっかり勉強してから戻ってこい」と背中を押され、二〇一一年一月から二〇一三年一〇月まで、インペリアルカレッジ・ロンドンの公衆衛生大学院に行きました。その後、立谷市長とのご縁で相馬市の仮設住宅の検診に参加し、「相馬に来ないか」とお誘いいただきました。

当時の相馬市は、社会状況としてはどん底でしたが、逆にあとは回復に向かっていくだけ、そんな上向きのエネルギーが感じられ、そのような復興の現場はおそらく日本のどこにもないし、これから一生みられないかもしれないと思い、「はい、相馬市に行きます」と応え、相馬に移り住みました。地元でいろいろな方から「なんで来たのですか」と言われることがあり、当時から正直に「面白かったの」と言っているのですが、聞きようによつては不謹慎な言葉に聞こえたかもしれません。

しかし面白いからこそできることがあるとの思いがあり、それが多分ホープツーリズムのような、前向き感のある活動に携わるきっかけになったと思っています。相馬に来て驚いたことは、空気がいしくて、食べ物が入くておいしく、さらに家に鍵をかけずに外出しても大丈夫なくらい治安も良い。ここでの暮らしは本当に贅沢なことだと思いました。逆に空気も悪く新鮮な魚や野菜を食べられない東京の人が、被災地の人達をかわいそうと言っていることに違和感を覚えました。そこから「被災地のことを知らない」と損をするのは東京の方ではないか」と考えるようになり、ここがいかに面白いかを学ばないとあなたたちが損するよ、ということをお伝えようと思いました。

福島を伝える

はじめはオンライン記事で「福島は自分も住んでいるけど危険ではない」「面白いところだよ」と書いていましたが、そうすると一部の人からは「御用学者」とレッテルを貼られることもありました。「お前は福島が安全だと言っている。イコール親原発だ。」ということのようです。また被災地が魅力的なところだと発信したら「自分たちの不幸をないことにするのか」と疎ましがられたりすることもあり、このように人々が分断されてしまうことを何か打開したいと思いました。

そのような人たちに直に会って話をしてみると、親・反などと言っても実は考えている方向は「人々の健康あるいは幸せ」という同じゴールなんです。悪意があるのではなく、同じ山を違う方向から登っているような感じです。それなのに分断してしまいう一因は、本来のゴールより手前のすごく近いところしかみていなかったためなのかもしれません。



みちさがしツアーで解説をする開沼と小沢

人々の健康をみると、放射能だけではなくいろいろな健康被害があつて、例えば避難で生活習慣が変わつてしまつたとか、メンタル面への影響、あるいは仮設住宅に住んでスーパが遠いと車に依存してしまふとか、今まで野菜とか魚は無料でもらつていたのが、スーパに行つて買う気がしない、といったこともあります。このようなことを含めて災害後の健康問題を発信するようになって、小沢さんと復興関係の皆さんと知り合い、環境省のリスクコミュニケーションのプログラムでもお話しさせていただくようになりました。

科学者や技術者、医者も含めてですが、「なんで伝わらないんだろう」「こんなに丁寧に説明しているのに」「こんなに分かりやすく漫画にもしてみたのに」ということをよく聞きます。それでも伝わらないということについて、科学リテラシー以外の要素でもう少し深く考えるべきことがあるように思います。

たとえば南相馬市小高のお母さんが作つた避難者の交流施設でこんな話があります。「なんでもうちよつと便利に、施設の入口のところ、誰でも入れるようにしないの」と聞いたら、「わざと不便にデザインしている」というんです。「不便だから、ちよつと助けてつてみんなが声かけるでしょ。そういうデザインにしています」と。そういう発想は、科学者や技術者がもつてないものではないでしょうか。

テクノクラートといわれる人達は、課題に対して最新の技術やスピードで対処しますから、時間とか、文化とか、歴史という概念を大切にすることが重要ということを忘れがちです。どんなに無駄であつてもやらなくてはいけないことや、わざわざ不便にしなればいけないということができない、そういう仕方がわからないのではと思います。今対処したらそれで終了、次の未来へ繋ぐ展開のイメ

ージができないのではと。

今回コロナ禍があり、原発事故後と同じような風評被害やインフォデミックが繰り返されています。この一〇年福島で学んできたことは、やっぱり人が交わることを一番大事にしたい。ゆつくり時間をとって不便ことをあえてする、あるいは災害の最中でもいかに楽しむかということの中に、未来に対処する何かの芽があるのではないかと、ホープツーリズムのようなものが、コロナ禍でもできるのではないかと、明るいもの、未来に繋がるものをコロナ禍でも見つけて、福島の一〇年からの学びをいかに応用できるかと考えながら、オンラインで記事を発信しています。

南相馬や東京で、小学校の先生や保健師さん、レストラン経営者を直接訪ね、小さいグループで話をすることがあります。その対話によって自分も学ぶし、次の災害に役立てられることもあるかもしれないと考えています。発災後の福島の一〇年とその後新しいフェーズも、コロナ禍の先や、これからの東京にとってのヒントがたくさんあると思うので、そのことも確かめていけたらと思います。

開沼 博（東京大学大学院情報学環准教授）

ポジティブカフェ

これまでお話しをされた小沢さん、支倉さん、越智さんとの関係を振り返ると、当時環境省はリスクコミュニケーション活動の一つで「ポジティブカフェ」というものを始めました。今



考えると「福島の人、ポジティブになろうぜ」といった感じを受けてしまう名称でもあったのですが、途中から「くるまぎカフェ」という名前になり、シンポジウム形式やワークショップ形式でやることにもなり、お声がけをいただいてコーディネーターやファシリテーターなどで関わるようになったのが最初でした。

当時一番の課題は、言い方を選ばずに言えば、炎上しないこと、どうすれば場が収拾がつかない状態にならないようにできるかということでした。もつと重要な課題があるはずですが、まずそこをしないと場が成立しない、やったことがかえって分断を促すだけになってしまうということです。それぞれの立場で、参加者も、協力する地元の方も、話し合つて心一つにして進めていくことで、ある面で、自分の気持ちで騒ぎたいような人とはすみわけができる。ここは自分が前向きに話せる場だとくるまぎカフェを開催した県内各地域では、学びの共同体というか、顔見知りでお互いにある程度知っている、そういう層がみえてきたと思います。当時は除染だつて問題があつたし、廃炉関係もいろいろな問題がある、避



避難指示区域を案内する小沢

難指示解除についてもいろいろな話が出てくるという中で、くるまぎカフェでは、地元地域にちゃんと分かってる人がいる、何かあったときに倒れない足腰がある、そういうことがみえてきたのが震災から数年後でした。

その後、くるまぎカフェのプログラムでは、福島市でシンポジウムや話をするだけではなく、実際に現場に行こう、ツアーをしよう。当時双葉郡の方に行くといつても避難指示がでているわけですから、現場に行くといつても現場がないところもありましたが、そういう展開になりました。ツアーの名前を「みちさがし」と提案しました。わからないという意味の「未知」と、トレイルのように道をひく、例えば植葉で除染が始まって、対象としての点じゃなくて線にして、そこに様々な人が実際に通って行くことで次に繋がる「道ができる」のではないかという二つの意味での「みち」。

個別の試行からパブリックへ

私自身は二〇一三年から自分でツアーを組織して月一回ぐらい東京の人にSNSで声をかけ、現場を案内することを始めました。福島エクスカージョンと呼んでましたが、最初ゲリラ的に来たい人 hands を上げてもらうというところから、だんだん学校単位で申し込みますとか、この地域の生協で行くからガイドしてといったプライベートだったものがパブリック化されていく動きになっていきました。それはこの一〇年の成果、一つの到達点だと思います。広島などでも一〇年ぐらい掛かって今の広島について学ぶプログラムができたと言われます。広島でもそういう動きがここ一、二年急速に進み、整理されてきたように感じます。

一方、数か月前から、小沢さんが環境省をやめられたあと、除染、中間貯蔵事業では、最終処分と

再生利用の話に軸足が徐々に移ってきており、そこにも関わっています。難しいのは、例えば荒れて場の收拾がつかなくなる雰囲気を経験がない方が主体になってきていることです。福島でそういう経験を重ねてきた、私と長崎大の高村先生が関わりながら、来月二月は名古屋で対話イベントが予定されています。

大臣も代わり、対話が必要というところまでは誰も分かっていますが、ではその対話とは何なのか、という本質に迫るのに、福島での経験は非常に価値がある、でもそれを引き継いでいくことの難しさも感じています。そのことについては、小沢さんが指摘された、まず地元の気持ちを聞くということ、それに尽きると思います。役所のみならず学者―コミュニケーションの専門家でも「ご説明じゃなくて双方向で」と言う人もいますが、誤解を招くおそれがある。まず聞くということしかない。こういう感覚や、実例、現場にあったトラウマみたいなものを次に活かしていけないと、進めるべきことも進まないと思っています。

もう一点、「東日本大震災・原子力災害伝承館」についてです。コロナ禍にも関わらず、伝承館のお客さんは想定の倍のペースで来てる、あの種の施設としては成功していると思います。課題は、県の伝承館が研究施設でもあるという点です。研究員の公募をしたところ、様々な方が応募してくださいました。しかし、例えば今この線量はどのくらいあるとか、ベクレルとシーベルトの単位の違いとか、地元のおじちゃんやおばちゃんが実感としてわかっていることがわかっていない人の採用は難しく、結局この前の春は一人も採用できなかったそうです。

言いたいことは、この一〇年で人が育ったかというと言っていないということです。災害についての科学的知見のようなものは、広い意味ではたまってきたかもしれないけれど。私自身でも、かなり意

識をして力を入れて人を育ててきたと思っ

っているのですが。先ほど申しあげたような、ここまでのま

った教訓、知見というのを、さらに掘り起こして、地域に対して残していくことがこれからの重要な

課題だと思っています。これまでのツアーや、越智さんが取り組んできた実践をさらに続けていくこ

とが重要でなし、トレイルもまさにそういう動きの一つだと思ひます。ゲリラ的なものからパブリッ

クへ、より組織的に、長期的にできるものにしていくことが重要だと思ひます。

二. 報道三者のコメント

鞍田 炎（福島民報社取締役いわき支社長兼浜通り創生局長）

求む 働く世代

私は二〇二〇年六月からいわきで勤務しています。その前の三年間は本社編集局、その前の三年は会津若松にいました。会津は二〇一四年「八重の桜」で観光的に盛り上がり、そのピークに赴任し、翌年はもうピークアウトになる、そういう時期でした。今の新型コロナ禍とは違ふ環境、大熊町役場が会津若松に避難していた時で、渡辺町長や避難住民、受け入れる会津若松市当事者の方々とは様々な話がありました。今いわきに來ているこ



とも大きな財産になっています。

浜通りに駐在して感じるのは、自治体によって置かれている現状が劇的に違う、双葉郡八町村で、南部の帰還率と、これから避難指示が解除されようとする区域、さらに先行して解除された所と、それら状況の差が非常に大きくなっているということです。その中でも共通している最大の問題は人手不足です。避難している方が戻ってくればその地域は復興する、簡単な問題だと考えているかもしれないですが、実は全くそうではない。戻るのは全体的に高齢者が多く、帰還率は高くても働く世代が少ない。双葉町はこれからですが大熊も高齢者ばかり。そこに二〇二三年、学校が戻ってくる、不安を抱えながら、どうするのかという状況にあります。

一方でこの一〇年、非常に多くの国費を使ってくさんの企業が被災地に立地を決めました。その企業社屋が入る産業団地造成が終わり、大熊、双葉以外の周辺で事業所が去年ぐらいから操業を始めようとしています。が、働く人がいない。各首長に聞く



第一原発遠望

と「働く人は大丈夫ですから来てくださいと企業に言っているがなかなか難しい」という。企業経営が不安定になっていて、コロナ禍が追い打ちをかけている。着工の遅れ、操業開始の遅れが始め、産業発展にずれができてきている。産業は双葉郡の復興のエンジンになってほしいが、せっかく誘致した企業も資金繰りがつかなくなったり、足腰がぐらついて、撤退や民事再生に追い込まれたりする企業も出始めている。これから双葉郡に来ようという企業があっても働き手はどこからもつてくるのかという課題がある。

支倉さんのイノベーション・コースト構想推進機構や県は移住定住を進めています。移住定住のターゲットと、喫緊にほしい労働力とは階層が違うのかもしれない。地元で喫緊にほしい人材と、長期的な移住定住をどうするのか、ターゲットを分けた戦略をつくって手立てを講じていく必要があります。県の伝承館一帯の双葉町の産業団地にもこれから多くの企業が誘致されます。大熊町でも別の所に産業団地をつくろうとし、浪江町も然りです。それぞれでつくったその後はどうするか、本腰を入れて考えないといけません。

ツーリズムの可能性

小沢さんからの観光のお話で二つ感じたことがあります。浜通り全域の観光プログラムや商品づくりが非常に難しい状況にある。その中で小沢さん達がチャレンジしている。ぜひ成功させていただきたいのですが、そのためにどうするか。うつくしま浜街道観光推進会議は、いわきの観光まちづくりビューローの井上さんが会長をやっていて、意欲のある経済人です。浜通り全域の観光をどこがどう構築していくのか、設計が大切だと思います。浜通りの観光、特にいわきでは施設をつくって終わり

という、箱ものの観光の傾向がみられたように感じます。双葉郡も同様、電源立地交付金等の枠はたくさんありますが、今後の持続可能な地域づくりの中で観光をどう位置づけるか、地域資源に対するしつかりした認識と地元への愛情が、長続きのためには必要ではないかと思っています。

先進地で取組む方の話を聞きながら、今は新型コロナウイルス対応でインバウンドのお客さんが見込めず、当面はマイクロツーリズムが大事と考えています。それを浜通りに導入するために何が必要か、試行錯誤して取り組む個人や団体への支援が必要だと思っています。マーケットが縮小し、人口が減る中、維持するだけでも手一杯で大変なところもある。これから日本の社会では、箱ものに頼る観光はそろそろ限界に直面するのではないか、そこに投資してきたお金や人的資源は、今後医療や介護、そういう福祉面や教育方面に向けていかないと、国そのものがどうなるのかという時代に突入していくという危機感をもっています。そのとき、若者のあり方がどうあるのか、若者に呼びかけていきたい、その意味で、トレイルもそうですし、いわきで脚光を浴びているサイクリングも、箱ものではなく地域を結ぶ観光と言うとおり、そういったものを地域に根付かせていく、そのために地域の歴史、食文化や伝統、そういうものの価値を地元で再認識することが必要だと思っています。

私はいわき市常磐出身ですが、浜通りの人間は熱しやすく冷めやすい、あまり地元のことには注目しないといわれます。いわきに戻ってきて、地域にこんなに宝物があるのになんで使わないんだろうということや、一生懸命頑張っているプレイヤーが実は大勢いるということに気がきました。そのプレイヤーは孤立して点になっている状態で、業界間の横串が刺さっていない。異業種間のいろいろなプレイヤーたちを、いわき、特に浜通りのためにどう繋げて力を発揮させられるのか、そのあたりも考えていきたいと思っています。

高橋 一樹（河北新報社報道部）

福島に来てはじめてわかった

二〇一五年から一七年まで福島で勤務していました。一年目は整理部というレイアウトの部署で、二年目から福島に行きました。記者は普通最初に警察担当をしますが、福島では避難自治体ごとに担当を割り振られました。一年目は川俣町山木屋地区を担当して二年目は浪江。避難指示解除に向けた説明会が各地で開催され、特例宿泊、そして避難指示解除というステップを踏んでいこうという議論の頃でした。大阪での説明会にも足を運びました。

福島での記者三年目は自治体担当ではなくもう少し広い視野で帰還困難区域の道路の状況や仮設住宅のコミュニティをどうするかというテーマで取材しました。東北出身ではないので、津波被災地の状況はテレビニュースで見えてイメージはありましたが、福島がどうなっているか、来るまでわからないことが多かった。福島で暮らし続けたかったが子供のことを考えて出ていかれた方もいるし、不安だけと住み続けているという方もいる。自治体も、大熊、双葉と、浪江、富岡と、楢葉、広野では全く違う状況で、町の中でも帰還困難区域と線量が低めの居住制限区域とで違う状況がある、そういう実感は福島に来ないとわかりません。

例えば東京に住んでいる人たちが福島に呼んでくるには、先ほど皆さんがお話されていたように、観光が一番の切り口になると感じます。語弊があるのを恐れずに言えば福島面白いからいですよ。ただそのまま伝えても来てもらうのは難しい。実際に来てもらったときに、地元の方とどういうやり

取りをしてもらうかが大事と感ずます。大人の方に呼びかけて来てもらうのは難しいかもしれませんが、例えば学校単位で、若い方をターゲットに教育的な要素も含めて呼びかければ、状況も変わっていくのではないかと。風評の問題もそうですが、対話が必要。でも対話の大事さと難しさも感ずます。

対話の場

今年には宮城県庁で、知事選の取材もしましたが、村井知事は内堀知事と違う印象で、自分が先頭に立つて改革していく。宮城県内でも賛否が割れる問題である女川原発再稼働や、水道事業民営化、今のままでは赤字が積み上がってしまう病院経営とか、サン・ファン号もそうですが、村井知事は将来的に人口が減っていくって、このまま漫然と何もしなかったらどんどん税収も落ちてしまつて、自治体として立ち行かなくなるといふ問題意識があつて改革を進めているのが分かります。が、まだ対話が足りない印象です。例えば病院が四つあつたのを二つにしようとする、目の前の病院がなくなつて困る人がいる、そういう方との対話が見えにくい。そのような中で「私はこうしたい」といふのと「いや、それは反対だ」といふ両極の議論になつてしまふ。サン・ファン号はかなり老朽化していて、保存するのは確かに難しいと思いますが、双



サンファン号

方向のやり取りが不足していると感じていました。知事選開票翌日に県から「今月解体に着手します」とお知らせがあり、それは秋の解体が決まっていた、あと一〇日ぐらいしかないのでお知らせをして最後に見に来る人が間に合うようにとの意図でした。

福島でもそうだと思いますが、直接やり取りをすれば、目指しているところは同じだと気付くこともあるので、その対話の場をつくっていくことの大切さ、と同時にその難しさがある。まず聞くことが大事というお話がありました。なるほどと思いつつも、行政がまず「聞く場をしつかり設けます」と言っても「ガス抜き」ではないかと言われる。そこも上手に進めないと「結局全部聞いたからいいよね」というと思われる。対話の場をつくって双方向でしつかり話をするというのは言うは易し、実際は難しいとつくづく思います。鞍田さんのお話を聞いて、そこに新聞社の役割があるかと感じました。そこから先もまたいろいろ考えてみたいと思います。

小野 広司（福島民友新聞社編集局長）

震災と原発から一一年目

今日は浜通りの出身が三人（開沼、鞍田両氏と小野）、しかも高校の同窓生が揃いました。震災後、開沼さんにはいろいろ教えを乞う立場で、改めて『はじめての福島学』を教科書にして「え、福島はやつぱりこうだったんだ」と学びなおしてきました。鞍田さんとはいつも公の会議が一



緒で、私の前に必ず鞍田さんが中身の濃い話をされるので、とても勉強になるなという思いを重ねてきました。私の出身地は震災後避難指示区域になりました。昔の同級生が今も被災地でまちづくりに奮闘している、現場に立っています。勉強させられる事が多々あって、尊敬しつつ彼ら彼女らの活動を見えています。

震災と原発事故から一年目に入り、現場で何を取材するべきか、一層難しくなると考えています。問題の裾野が広がっている中で、どういうあたりがいいか、今日は皆さんに伺っていききたいと思っています。小沢さんの話では、「みちのく潮風トレイル」については得意分野が皆それぞれあり、福島民報はサイクリング関係、ウオーキングは福島民友新聞社が強い。うまく絡んでいきたい。震災、原発事故の中でのホープツーリズムについては、名前がつく前から、僕らもできるだけ現地に人が入って見てもらうことが重要だろうと学生などを呼んできて、原発に入ったり、あちこちに行ったりしてきました。少し変わってきているのは、壊れた被災地は定番で皆が見たがっていたところですが、だんだん片付いてきて、今ほぼ更地になった。一方、双葉町内や富岡町の一部で壊れた所を見られるようになっていく。でもそれはホープツーリズムの趣旨とは違うのではないか、福島の人が見てほしいのは別のところなのでは、という意見も出ていて考える必要がある。次に、越智さんの取組みにはずっと刺激を受けていて、医療界の皆さんからいろいろ教えていただきました。それを一般の人、読者にどう伝えていけるか、どう伝わるのかということが悩みのタネです。開沼さんには、これからの双葉郡のあり方、どういう方向で地域をつくっていくのかを聞きたい。複雑多岐にわたる状況の中で、未来をどう描くか。中間貯蔵の問題も然り、二つの原発の廃炉の廃棄物や跡地の問題も含めて、これからどうしていけば地域で対応できるのか。

鞍田さんがおっしゃった移住と労働者の話も気になります。先週、富山大学の学生から「福島では外国人労働者の移住についてどう考えているんですか」と宿題をいただきました。移住者は、地域をつくっていく、人を増やすなどやる気のある人たちが来てますが、今必要な労働者を、とすれば、やっぱり外国人を入れるしかないのではないかと、県外の若い人達がみている。いろいろ教えていただければと思います。

三、意見交換（司会進行：支倉文江）

小沢晴司…

では、まず私からいいでしょうか。先ほど小野局長からの二点、外国人労働者と「みちのくの潮風トレイル」について。先日、気仙沼の菅原市長にお会いしたとき、地元の水産業で船で働いている人はほとんど外国人で、事実上もう海外の労働力に頼ってる状況と伺いました。それが、コロナ禍で船員さんがインドネシアに帰って戻ってこれない、気仙沼の水産業は大変な状況だともおっしゃっていました。そういう現実がすでにあるので、外国人労働者受け入れはハードルが高い課題ではないと感じています。

トレイルについて、現在開通している八戸市から相馬市の区間には原子力災害による避難指示区域はありません。福島への南伸計画は、避難指示があつた地域、原子力災害の現場、そういった経験をもつ地域に初めて設定されます。そのことが相馬から八戸の区間の人達にとっても、トレイルを歩く人達に対しても、大きな意味とメッセージをもつと思っています。

一昨日この松島研究所で、青森大学の先生や環境省の前局長等と懇談する場がありました。青森大

学の先生は、福島へのトレイル南伸計画に呼応して、八戸より北、下北半島の大間まで伸ばせないかと考えてることでした。ということは、六ヶ所村、核燃料サイクル構想の再処理工場のある、日本の原子力政策の中で多くの議論があつた地域を通ることになります。すると福島は浜通りと、八戸以北と、日本のエネルギー政策の課題を抱えたところへ、みちのく潮風トレイルの南北両端から延長設定する構図になる。今回の福島でのトレイル設定はそういう可能性をもっていると感じています。

越智小枝…

トレイルを通じての何か一貫性、例えば四国のお遍路さんみたいにユニフォームを一緒にするとか、お札じゃないけどポイントをためるとか、そこを歩きとおすことを面白いと思えるような仕掛けは何かあるのでしょうか。

小沢晴司…

岩手北部から青森にかけての区間でスタンプがあります。全線では対応はまちまちです。八戸から相馬まで歩きとおしたら、自己申告により、全線踏破の証書がもらえます。

越智小枝…

歩いてる人同士が仲間意識をもてるといいのかなと。お遍路さんやポケモンGOのような、そんなグループ感は大事だと思います。ルートのかしこに同じようなデザインのカフェがおいであるとか。一度に全区間を歩きとおす人はほばいないと思うので、休みのたびにちよつとずつ歩いて、ここからここまで歩いたね、と。せっかく道が繋がったのに人と気持ちが繋がらないと意味がないと思うので、そういう仕掛けがあると思います。

AEDが救急を呼べるような、非常電話のようなものはおけないでしょうか。浜は真夏に歩くと熱

く、浜から病院は通常は遠いんですね。そのための安全管理的な設備は大事だと思います。

高橋一樹…

宮城のオルレコースを一つ歩きました。「オルレ」は「裏路地」という意味だったと思いますが、民家の裏側がコースだったり、いい意味で地域の目を感じられること、ちょつと分かりにくいところでは、そこに住んでる方が「こつちだよ」と教えてくれたり。

小野広司…

福島では今メインルートを小沢さんたちが調べて、それが一本に繋がるとして、実際に地元の人が見てほしいのはまさに路地や、少し離れた所でも見てほしいところはあると思います。浪江で、請戸小学校が震災遺構としてオープンしたので、請戸小学校に寄り道するとか。その後双葉の伝承館まで何もないのでその間をどうするか、伝承館から双葉駅までも何もないですね。途中で浪江焼きそばが食べられるとか、人との交流を生み出すには、メインルートを外れて路地のような空間に踏み込むことをどう考えていけるかですね。

越智小枝…

あえて休憩所はルート外につくって、こつちに休憩所ありますよと道から外れないと休憩できないようにしておくのもありかもしれないですね。

小沢晴司…

暫定ルート案では伝承館から双葉駅までまっすぐ線を引いていますが、途中で中間貯蔵施設区域の脇や双葉町役場に向かい、旧双葉高校の方をまわって駅に行くのも考えられるかもしれません。南相馬と浪江の間は海沿いに線を引いてますが、浪江の皆様から、中心市街の復興していく権現堂地区や

道の駅を通つてほしいという意見も聞きますし、そうしますと南相馬市小高の辺りから内陸を通り大悲山という丘陵地があり、そこに浜通り一のスギの巨木があるし、薬師堂や観音堂には日本最大級の磨崖仏もあります。

鞍田 炎..

双葉高校をまわるのはいいですね。大杉や摩崖仏もおもしろい。



大悲山薬師堂前の大杉



大悲山摩崖仏観音

越智小枝..

観光というと景色とお土産物というイメージですが、ホープツーリズムでは歴史を売りたい、そのように観光のデザインも変わってきてますよね。観光の定義が分からなくなってきました。

支倉文江..

観光は、ある時代では非日常の時間で、旅先の旅館で自宅と違ったふかふかの布団、お膳の上においしい料理がこぞとばかりに並ぶ、というものだったんですが、今や自宅でふかふかの布団に寝て、食事も自分に合ったものを気をつけて食べられるので、その感じは違ってきますが、やっぱり、日頃味わえないものを味わう、体験できないものを体験できるというのがやはり観光なんじゃないかと思います。観光に行つて何かを得た、おいしいものを食べた、有名な人に会うとか、こんなことを自分で体験したということが求められている。必ずしも贅沢ではないけれど、日常ではないという感じ。携帯が一切通じない場所に行く

とか。相馬に行つて、時間の流れ方が違うと感じたことがあります。日常から切り離された時間をすごせるような観光もいかなと感じます。

ホープツーリズムについて振り返れば、第一のターゲットは高校生、教育旅行です。すると人数が多い、二〇〇名規模の学校がほとんどです。キーマンに会つて話を聞いて、聞いたことといろいろ感じて持ち帰つて、その後の自分の行動に反映させるというコンセプトで作つたのですが、五対一で話を聞くのと一名が二〇〇名の前でお話をするのでは状況が違つてしまうと思つています。経済的な効果はありますが、本来の目的からそれないうち注意していかないとあります。

小野 広司 ..

高校生を相手に話をしたとき、地震がどれだけ大変だったか、原発事故がどんなものかという最初の一か月の話は高校生が一生懸命聞いてくれます。その後、地元の人が復興で頑張つてゐるあたりは、感想文をみるとあまり印象に残つていないような感じでした。

越智 小枝 ..

ジレンマのようなことについてディスカッションするのは盛りあがつたりします。医療者の場合は被災地に介護施設があつて、一刻も早く逃げなければいけないけれど、車がなくて、それでマイクロバスで運ぶ。でも医療者も命の危険を感じているところどこまでバスを待つか、結局避難の過程で何人も亡くなつて。では避難させないほうが良いのか、でもさせなかったらそこに医療者は毎日通つて看なければいけない。どうするのがいいか。それで、車が手配できないときに、東京では、それをどうすればいいと思うかと、議論させると、それなりに高校生は真剣に考えてくれます。逆に分からないこと、結局あのときどうすれば良かったのかと、今だから言えるけど、あのときは本当に正しか

ったかどうかは分らないと、コロナでもそうですけど、落ち着いたから話せるというのもあると思います。家族をおいて避難しなければならなかったとか、津波のとき、おじいさん、おばあさんを追い越して高台に走った方の話とか。当時そういう辛すぎて言えなかったことも含めて、まだまだあるのではないかと、そういう解決してないことのほうが。それが若い世代に考えてもらう事柄なのかもしれない。

開沼 博

語り部について、広島施設のついて県庁の研修会議に出て、そこで問いかけたことが、今越智さんの指摘のことでもあったりします。二点あって、一つは語り部が基本的に高齢者になっていつてること。時間がたてば高齢になるし、本当の意味で現場の人は忙しいから、語り部をやってられないという問題もある。県が語り部を育成しようとしています、経験や記憶がない高校生を語り部にしよう。今の一五歳は当時五歳でしたから、語り部の定義が何なのかを定めないまま作業しているためいろいろな矛盾が生じるだろうと思われます。

もう一つが、煎じ詰めると、強調したり、泣ける話にしたほうが受けるという件。広島は大きな都市ですから、お客さんが泣けるような語り部を旅行会社がアレンジして、ファンがつく、さらに泣けるようカスタマイズされていく、もしかすると現実離れたかたちになっていたりする。改善としては、一つはきちんと記録を新聞記事のデジタル化などで、臨場感の下がるかもしれませんが、できるだけ語り部の語りを未来でも今と同じような雰囲気で見られるように残し、その事例を増やすということ。

あと越智さんがおっしゃったように、かなりハイエンドユーザー向けの、それはそれで重要だとい

う前提の上で、では福島から私たちが京都へ修学旅行に行つて、真面目に京都の歴史を皆で勉強したかというかと心許ない。高校生で友達と新京極へ行つて何か買ったな、三十三間堂でも何か買ったといったぐらいで。福島に来てくれた人たちが、何か心の一つの引つかりとしてもつてかえつてもらうのでいいのではという。ハイエンドユーザー相手でもなく、開き直りもどこかで必要で、そこで先ほどの語り部の二つの問題みたいなものは、少しゆるめながら考えていくのも肝要かと思つていゝろです。でもまだどこが落としどころか、吟味が必要と感じています。

越智小枝…

語り部プラス新聞記事のこと、当時の新聞記事、よく一周年で朝日新聞とか読売新聞とか河北さんも出してましたが、ああいうときの記事はそのまま、そのときの事実が書かれている一次資料だと思います。語り部という人にたよるのではなく、資料の取扱いに関するその考え方は伝承館のコンセプトにも近いと感じます。読売新聞の記者がおつしやつていたことで、新聞社もニュースを伝える役割から、歴史を記録している、たくさん記録をもっているというのが今一番の強みになりつつあると。記録の活用はとても大事なことでと思います。

鞍田 炎…

今回請戸小学校の震災遺構化で、職員を五人集めようとしたのですが、当初は集まらなかつたらしい。浪江町の職員を臨時に派遣して対応してるのが現状で。語り部については予約があつたときその役割を果たせる人を準備する。住民の帰還が進んでいないので、そもそも語り部としてお願いできそうな人が地元にいない。心の中ではお手伝いしたいのだけれど、家が離れてるのでられませんという人が多く、現場では苦勞してるというのが一つ。ではどうするか、先ほど話に出ましたけど映像や

音声で記憶を収録し、それを再現して流すということが一つ。あともう一つは、これからの語り部が、震災を経験していない人が出てくるということ。結局当時を知らない人間に語り部になってもらうということとは、その人に対する教育的な意味合いで、経験を知らないけど再生産していく、そういう役割分担もあると聞き直っていくしかないのかもしれない。

観光と、ホープツーリズムでのパッケージ化の話、それと京都の修学旅行、まさに重なるところを感じています。まず来てもらうということについて。浜通りは積極的に来てもらうような観光地ではなく、スバリゾートハワイアンズに来て、あとは野馬追を見て帰るというのが定番だった。その間の双葉郡は、観光地として注目されることがそもそも少なかった。そこにまず来てもらうということは第一義的に意味があると思います。観光で大事なのはリピーターがあることだと思います。一回来て「あ、こんなところか」「飽きたからもういいや」という所は本当の観光地ではない。そうではなく「あそこで実はおいしい食べ物があったのに食べそびれた」「一回食べたらいかったのでもう一回食べにいきたい」とか。また今はいろいろなマニアがいますのでマニアックな世界で、例えば廃道マニアとか、使われてないトンネルマニアとか、普通の人から見るとなんだというものをとりあげてみる。今は個人の指向が非常に分化しているので、何か一つの個性があつてそれが面白いから来ると、それだと思います。

数字をみてみると、例えば大量に旅行商品をつくってバスで送り込むという観光地、果たしてそれが観光地として適した状態なのか、目指すべきは何かという議論がほしい。キラークンテンツは「食」だと思っています。食の魅力というのを浜通りはもつと磨いていくことが必要です。先ほど地域資源という言い方がありましたがやっぱり食が思い浮かぶ。今もここへ来る途中、松島に入ると牡蠣の看

板があちこちに並んでいます。福島の間は「ああ、牡蠣、焼いて食べたいねえ」となるわけです。おいしい生牡蠣を前にして、それでいいのかというのはありますが。

越智小枝…

震災前、相馬では全部食べ放題の店があつたと聞いています。かに祭りでは、他の食べ物は有料だけれどかにだけ全部無料ということで観光客を呼んだり。南相馬よりちよつと南のほうには、古墳マニアが好きなところもあるようです。いい古墳（桜井古墳）があるらしいですね。

支倉文江…

会津は観光地。観光業に携わる方々の絶対的な数も意識もそう、いろいろと人を育てている。観光に携わる人材育成、そのキーマンになる方、浜通りにはそういう人がいないという現状がある、やっぱり会津のパワーはすごいと思います。観光に対する思いも強いし、力もある。

鞍田 炎…

会津は観光だけではなく、背景に会津人という意識がある。会津人という言い方も実は「あいづっこ宣言」を通じて再生産していると思います。精神性の再生産、それを公教育でやっているというのもすごいと思う。会津ってなんなのというのを多分小さいときから叩き込んで、歴史の勉強をしつかりさせて、そして歴史遺産を観光に結び付けていくのもあり。そして食ですね。会津伝統野菜を使つての料理、会津はお米が中心ですから、そこから醸造という産業に繋がっていく、そういう歴史や食が観光の根っこにある。コンテンツとしてうまく使っている文化、まさに商人の町なんです。城下町でもあります。会津の人と話すとき新潟商人とか、近江商人とか、山形商人の流れをくんでいる人が非常に多い。あれほど商売つゝ気のある地域は県内でも会津だけじゃないでしょうか。

それで浜通りに来てみると、ここはここでエネルギーというコンテンツがあつて、いわきに行けば炭鉱というエネルギーの歴史があつて、双葉郡は林業、いま廃線になりましたけど、ものすごい距離の森林鉄道網があつて、昔は馬鉄が走つてたり。今、都路あたりでそれを再評価しようという話も出ています。面白いコンテンツがあるんだけどなと思います。そこに横串を刺す、要するに地域プロデュースを誰がどうするかという議論をそろそろしていいのではと思います。

小沢晴司…

終了時間になりましたので閉会します。

三陸海岸の自然に寄り添う地域社会に向けて

深町 加津枝

大正期以降の土地利用の変化

東北の三陸海岸では、黒潮による豊かな漁場と背後に広がる北上高地の自然の恵みを受け、森・里・海のつながりの中で、豊かな自然環境と多様な地域文化が形成されてきた。

図一は、五万分の一地形図に基づき作成した気仙沼市周辺の大正五年（一九一六年）の土地被覆である。凡例で市街地と記される集落は、主に気仙沼湾岸や唐桑半島などのリアス海岸、河川沿いに位置しており、周辺に水田を中心とする農地や森林、河川や海などの水辺があった。集落の中には、津波が遡上しない高台に住居を建て、海岸堤防の背後の低平地では農地や仮設建設物に限定するといった土地利用で人命、家屋の被害を最小限にする工夫もあった。地形を活かし、身近な里山・里海を利用しながらの半農半漁の生活が営まれており、大面積の水田は大川や面瀬川などの河口付近に広がっていた。沿岸部の集落付近には広葉樹林が多く、尾根沿いなどにアカマツを中心とする針葉樹林が分布した。

内陸部の山地は、主に草地、薪炭林として利用された。広葉樹二次林である薪炭林は、地域住民の生活だけでなく、製鉄や沿岸部の製塩などの産業を支え、沿岸から内陸部に魚介類などの物資が運ば

れた。アカマツやスギの針葉樹林、クリ、ケヤキなど落葉広葉樹林は、民家の建築用材、道具や木造船、養殖いかだの材料、山菜やキノコといった食材の採取地となるなど多様に利用された。

里山の集落から比較的離れた山地には大面積の荒地が分布した。荒地の多くは、ススキやシバ類などが優占する草地であり、家畜の飼料や茅葺き屋根の材料の採取、家畜の放牧が行われた。定期的な刈り取りや火入れにより草地が維持され、また家畜が好まないツツジ類が残るなど、土地利用や管理手法の影響を受けた植生があった。草地は希少種を含む多様な植物、天然記念物となるイヌワシなどの動物にとって重要な生育・生息地となっていた。

図二は、五万分の一地形図に基づき作成した気仙沼市周辺の平成二九年（二〇一七年）の土地被覆である。戦後草地は放牧や飼料などの供給の場としての機能を失うようになり、面積が激減してスギ植林地（針葉樹林）などに変化した。水田面積も大幅に減少して市街地、森林に変化し、耕作放棄地となる荒地も見られるようになった。沿岸部では埋立や干拓が進められ、市街地が拡大し、周



図1 気仙沼市周辺の土地被覆（大正5年）

辺には小規模な畑地が点在した。

東日本大震災後の復興計画

二〇一一年の東日本大震災後、気仙沼市では「自然と調和する都市構造と市民生活」などを基本理念とする「気仙沼市震災復興計画（海と生きる）」（二〇一三年）を策定した。計画では、人命・財産を守るための海岸堤防等の整備（レベル一の津波対策）、職住分離を基本に地域コミュニティの維持・発展を図るための集団移転の促進（レベル二の津波対策）という防災・減災に対応した土地利用の考え方が示された。計画の柱の一つに自然環境の復元・保全と環境未来都市の実現があり、再生可能エネルギーの導入などの取り組みが掲げられた。こうした復興計画に基づく事業も以上で示した大きな土地利用、風景の変化につながっていた。

図三は、気仙沼市における東日本大震災前後の土地利用の推移（第七〇回宮城県国土利用計画審議会資料、二〇二一年）である。災害危険区域の宅地は内陸部に移転することになり、一部の森林は宅

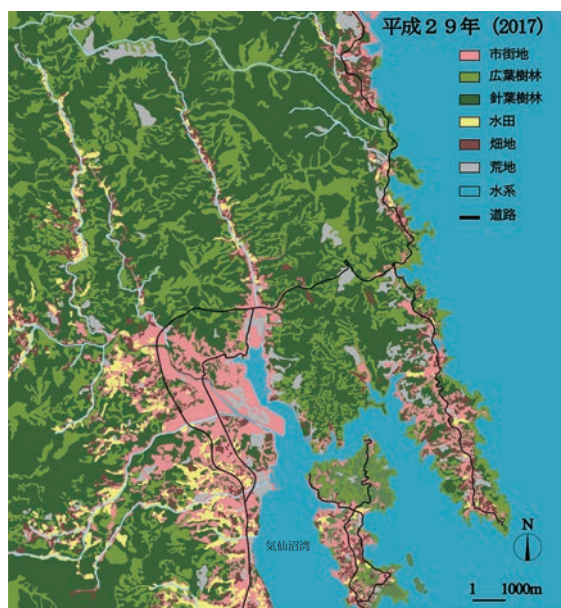


図2 気仙沼市周辺の土地被覆（平成29年）

震災復興事業が
進展する中で

以上の気仙沼市での事例に見るように、三陸海岸の土地利用、風景はおおよそ一〇〇年間で大きく変化し、こうした変化は、戦後の里山の資源利用や管理形態の変化、沿岸部の市街地の拡大などの影響を受けてきた。二〇一一年以降の震災復興の過程では、各地で防潮堤の建設や盛土嵩上げ、道路・河川の整備、防災集団移転など様々な復興事業が行われてきた。こうした事業は、大きな地形改変や土地利用の変化を伴い、森・里・海のつながり、生活や営みのあり方に急速な変化をもたらしている。公共事業が進展する中で、今までにないスケールの土木構造物や建造物が現れ、旧市街地や里山の景観とは異質の景観が混在するようになっていく。



図3 東日本大震災前後の気仙沼市の土地利用
(宮城県国土利用計画審議会、2021年)

生活環境が大きく変化する中では、身近な海や川、森との関わりも希薄化し、管理放棄される農地や森林が広がりつつある。長年続いてきたコミュニティ、自然と持続的に関わるための伝統知・地域知の継承も困難になっている。復興事業を目の当たりにしてきた人々からは、身近な自然や文化を大切にするための科学的なデータや意思決定までの時間、プロセスが不十分な中で進行する復興事業の数々に複雑な思いが伝わってくる。

福島では、原子力災害と避難指示を受け、除染作業や風評被害が続く中、馴染んできた風景、コミュニティから大きく遠ざかる暮らしをせざるを得ない状況が続いている。豊かな自然と文化が育まれてきた福島の里山・里海とのつながりが再生、創造され、ホープフリズムや地域を支える人材の育成などの進展が望まれている。

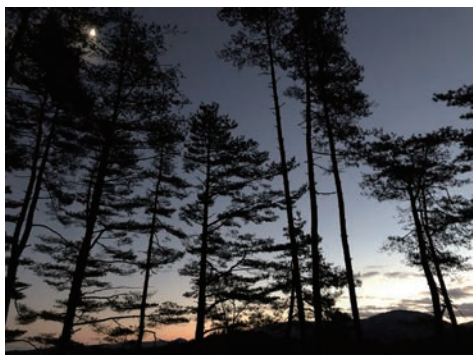
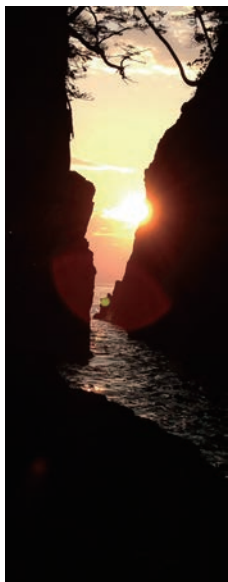
自然に寄り添う地域社会に向けて

復興を進める過程では、地域の生態系や景観、生業を活かすための住民、企業、行政、市民組織による様々な取り組みもなされてきた。気仙沼市の大谷海岸や田中浜、南三陸町の松原海岸、松島町の松島湾などでは、防潮堤の位置、高さ、形状、素材をめぐり粘り強い協議が重ねられ、災害対策だけが卓越しない復興事業を可能にさせた。また、北上川の茅産業などの地場産業は、人と自然がうまく調和した新しい生業のあり方を模索しながら、日本の文化を支える大きな役割を果たしている。こうした生業の継続は、「南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト」などが目指している、動植物にとっても重要な生態系の保全、管理にも結びついている。

さらに、復興計画を踏まえた新たな木質バイオマスエネルギー事業、森や海の国際認証、農産物や

加工品のブランド化などは、生態系を活かした自然資源の地域内循環の先駆的な事例として注目されている。地場産業や市民組織、教育機関などの活動を通し、里山・里海をフィールドに地域に根差した教育、観光プログラムも充実してきている。こうした活動の進展により、地域内外の人々や組織、専門家、行政などによる新たな連携の枠組み、資金の流れも生み出されている。各地にある美術館や伝承館などでの地道な調査研究、企画展示などによる普及・啓発活動は、長い時間、空間スケールの中で俯瞰的に自らの位置を確認できる契機を提供してきている。また、三陸復興国立公園の「みちのく潮風トレイル」などの行政施策として、森・里・海や地域内外の人をつながりを生み出す仕組みも生まれている。

震災、震災後一〇年を振り返り、そして未来に向かう今、三陸海岸に暮らす人々にはどのような風景が見えているのだろうか。大きく変わっていく風景の中、自然に寄り添うレジリエントな地域社会に向けた地元の強い思いと確実な歩みは、私たちが大切にすべき風景とは何か、多くの教訓と希望とともに伝えていけると言えよう。



吉田 丈人 (よしだ たけひと)

所 属 総合地球環境学研究所・東京大学大学院総合文化研究科

専門分野 生態学、陸水学

主な著作 『実践版! グリーンインフラ』(共編著・日経 BP、2020年)、『地域の歴史から学ぶ災害対応: 比良山麓の伝統知・地域知』(共著・総合地球環境学研究所、2019年)、『プランクトンのえほん』(監修・ほるぷ出版、2017年) など

三浦 友幸 (みうら ともゆき)

所 属 (一社) プロジェクトリアス・気仙沼市議会

専門分野 市民活動

主な活動 震災後、避難所の事務局運営の経験を経て、NGO職員として支援活動に従事。その後地元のNPO団体に移籍、支援活動や復興まちづくりの中間支援を行う。また、被災地の防潮堤問題に対し、地域の合意形成のサポートや政策提言を行い、現在、NPOや市議会議員として市民活動団体の支援等を行なっている。

深町加津枝 (ふかまち かつえ)

所 属 京都大学

専門分野 造園学、景観生態学

研究テーマ 地域固有の景観保全、活用のあり方、里山の人と自然のかかわり

主な著作 「身近な自然と風景～里地里山の再生による風景づくり」(西村幸夫ら編『風景の思想』、学芸出版社、2012)、「森林に関する伝統的知識」「流域文化の継承」「伝統の継承と活用・土地利用」(日本景観生態学会編『景観生態学』、共立出版、2022)

太齋 彰浩 (だざい あきひろ)

所 属 一般社団法人サステナビリティセンター

専門分野 海洋生物・生態学、環境教育、地域計画

主な活動 地域密着型の教育活動をこころざし、南三陸町へ移住。使われなくなった箱もの施設を再生し、志津川湾を学びのフィールドに変えることで年間数千人の交流人口を創出。東日本大震災後は、行政職員として水産業復興の計画づくりと資金獲得に奔走。南三陸町バイオマス産業都市構想の実現に貢献。その後、地域資源プラットフォーム構想を発案し、2018年4月に一般社団法人サステナビリティセンター設立(代表理事・ファシリテーター)。

鈴木 卓也 (すずきたくや)

所 属 南三陸ネイチャーセンター友の会

専門分野 日本思想史

研究テーマ 人と自然の関わり

主な著作 『イヌワシの棲む山ー自然と人為の狭間にー』(東北学院大学東北文化研究所、紀要第40号、2008)、『波伝谷の民俗ー宮城県南三陸沿岸の村落における暮らしの諸相ー』(政岡伸洋、小谷竜介共監修、東北歴史博物館、2008)、『被災民具雑感』(日本民具学会、民具研究第147号、2013年)、『山階鳥類研究所の寄贈標本ー立花繁信氏寄贈標本目録ー』(小林さやか共著、山階鳥類研究所、山階鳥学誌、2018)

島田 和久 (しまだ かずひさ)

所 属 北海道大学

専門分野 ローカルガバナンス、アジアの国際政治

研究テーマ 地域コミュニティのレジリエンス、Eco-DRR (生態系を活かした防災・減災)

主な著作 「宮城県南三陸町入谷地区の自助・共助にみる在来知ー東日本大震災時の被災者支援活動を例としてー」『在来知と社会的レジリエンスーサステイナビリティに活かす温故知新ー』(筑波書房、2021)、『レジリエントな地域社会 vol.3』(共編著、総合地球環境学研究所、2020)

小沢 晴司 (おざわ せいじ)

所 属 宮城大学

専門分野 造園学、森林学、環境政策学

主な活動(研究テーマ) 原子力災害からの復興 多様な景観の再評価 復興ツーリズム

主な著作 「浄める」(ビルクリーニング、2009、No.247-No.258、連載)、「琵琶湖国定公園の景観に関する研究」(滋賀県立大学、2012)、「福島のとろろに浄らか」(信仰誌月刊知恩、2019、No.897)、「みえないもの」(公衆衛生情報みやぎ、2021、No.522)

謝辞：

本研究を進める上で、宮城県気仙沼市、南三陸町、石巻市、松島町、岩手県大槌町、福島県の関係者の皆さまには大変お世話になった。現地での調査では、多くのことをご教示いただき、執筆、インタビュー、座談会に快く応じてくださった方々には多大なご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表し、厚く御礼申し上げます。また、冊子の編集にあたっては、調査のとりまとめに尽力いただいた大原歩さん、中井美波さん、神代栄理子さん、大岩由利さんに御礼を申し上げます。

人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」
地球研ユニット：災害にレジリエントな環境保全型地域社会の創生

レジリエントな地域社会 Vol. 8
自然に寄り添う暮らしと地域社会のために

発行日／2022年3月25日

編 者／深町加津枝

発 行／人間文化研究機構 広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

印 刷／有限会社 糺書房

ISBN : 978-4-906888-97-9



レジリエントな地域社会

Vol.8 2022年3月

- | | |
|---|-------|
| はじめに | 吉田 丈人 |
| 1. 防潮堤と市民活動 | 三浦 友幸 |
| 2. 気仙沼大島の浜を未来に
～白幡昇一氏(大島汽船株式会社取締役会長、前気仙沼大島観光協会長)
インタビューから | |
| 3. 里山・里海の自然に寄り添う暮らしの実現に向けて
震災10年目にみえてくる風景
～気仙沼座談会の記録より | 深町加津枝 |
| 4. 災害に備えるとはどういうことか?
～元南三陸町職員が見た震災復興の現実 | 太齋 彰浩 |
| 5. 「南三陸地域イヌワシ生息環境再生プロジェクト」その後 | 鈴木 卓也 |
| 6. 北上川のヨシで日本の文化を支える
～熊谷秋雄氏(有限会社熊谷産業社長)インタビューから | |
| 7. 震災を乗り越えて
～地域のリーダーへのインタビュー | 島田 和久 |
| 8. 津波の被害に対する賢明な対応策とは
～櫻井公一松島町長(宮城県)インタビューから | |
| 9. 原子力災害から10年、福島のと未来
～松島座談会での振り返り | 小沢 晴司 |
| 10. 三陸海岸の自然に寄り添う地域社会に向けて | 深町加津枝 |